金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書７

金沢市

畝田東遺跡群Ⅴ

２００５

石　川　県　教　育　委　員　会

（財）石川県埋蔵文化財センター

畝田東遺跡群Ⅴ

2005

石　川　県　教　育　委　員　会

(財) 石川県埋蔵文化財センター

D１区全景（東から）

D３区全景（東から）

巻頭2　遺構・遺物全景

建物跡SB1102全景（南東から）

出土遺物

例　　言

1　本書は金沢市畝田東遺跡群の発掘調査報告書Ⅴ（6分冊のうち第5分冊）である。

2　本書で報告する遺跡は畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡である。両遺跡は範囲が重なるため、一体的に「畝田東遺跡群」として報告する。

3　本書（第5分冊）では古代を除く時期の遺構・遺物について報告する。

4　遺跡の所在地は石川県金沢市畝田東2・3・4丁目地内、藤江北4丁目地内である。

5　調査原因は金沢西部第二土地区画整理事業であり、同事業を所管する石川県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

6　発掘調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。

7　調査に係る費用は石川県土木部都市計画課（金沢西部開発事務所）が負担した。

8　現地調査は平成11（1999）年度～平成15（2003）年度に実施した。面積・期間・担当課・担当者は下記のとおりである。

年　度	平成11（1999）	平成12（2000）	平成13（2001）	平成14（2002）	平成15（2003）
期　間	平成11年11月24日～ 平成12年1月6日	平成12年4月26日～ 平成13年1月11日	平成13年5月10日～ 12月10日	平成14年4月22日～ 平成15年1月14日	平成15年9月24日～ 平成15年12月15日
面　積	400㎡	9,050㎡	16,200㎡	15,850㎡	1,906㎡
担当課	調査部調査第2課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課	調査部調査第4課
担当者	岩瀬由美（主事） 和田龍介（主事）	白田義彦（主事） 布尾幸恵（嘱託）	岩崎英雄 （調査専門員） 滝川重徳（主任主事） 白田義彦（主任主事） 熊谷葉月（主事） 和田龍介（主事） 兼田康彦（主事） 金田哲也（講師） 布尾幸恵（嘱託）	伊藤雅文（課長） 岩崎英雄 （調査専門員） 冨田和気夫 （調査専門員） 安　英樹（主任主事） 熊谷葉月（主事） 和田龍介（主事） 兼田康彦（主事） 布尾幸恵（嘱託） 山田由布子（嘱託）	安　英樹（課主査） 渡邉大輔（主事）

9　出土品整理は平成13（2001）年度～平成15（2003）年度に実施し、企画部整理課と調査部調査第4課が担当した。

10　出土した石器・石製品の石材鑑定については㈱パレオ・ラボに委託して行った。

11　出土した木製品の樹種同定については㈱パレオ・ラボに委託して行った。

12　発掘調査報告書の刊行は第1・2・5分冊を平成16（2004）年度に実施し、調査部調査第4課が担当した。第3・4・6分冊は平成17（2005）年度に実施する予定である。

13　本書の執筆・編集は安　英樹（調査部調査第４課主査）が行った。

14　発掘調査には下記の機関、個人の協力を得た。

石川県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、独立行政法人産業技術総合研究所、福田弘光、大藤雅男、寒川　旭（敬称略）

15　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

16　本書についての凡例は下記のとおりである。

⑴　方位は座標北であり、座標は建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。特に方位を示していない図は鉛直方向上が座標北である。

⑵　水平基準は海抜高であり、T.P（東京湾平均海面標高）による。

⑶　地区名、調査区名、グリッド、遺構名称・番号等の命名規則については、第１分冊に記載したので参照されたい。

⑷　遺構挿図の縮尺は原則として1/50、遺物挿図の縮尺は1/3である。

⑸　遺構・遺物の色調については概ね農林水産省の新版標準土色帖に準拠している。

⑹　出土遺物番号は通し番号であり、挿図と写真で対応する

⑺　注・文献は末尾に付けた。

目　　次

第１章　概要 ……………………………………………………………………………… 1
第１節　構成の方針 ……………………………………………………………………… 1
第２節　遺構と遺物 ……………………………………………………………………… 1

第２章　古墳時代以前 ……………………………………………………………………… 5
第１節　竪穴系建物跡 …………………………………………………………………… 5
第２節　掘立柱建物跡 ……………………………………………………………………11
第３節　井戸跡…………………………………………………………………………………22
第４節　土　坑…………………………………………………………………………………25
第５節　溝 ………………………………………………………………………………………33
第６節　その他…………………………………………………………………………………41

第３章　中世以降 ……………………………………………………………………………62
第１節　旧大野庄用水 ……………………………………………………………………62
第２節　地震痕跡 …………………………………………………………………………63
第３節　その他…………………………………………………………………………………63

第４章　まとめ…………………………………………………………………………………77
第１節　古墳時代以前 ……………………………………………………………………77
第２節　中世以降 ……………………………………………………………………………80

挿図目次

第１図　遺跡位置図（S＝１/25,000）……2
第２図　地区割り図（S＝１/3,000）……3
第３図　グリッド配置図（S＝１/2,500）……4
第４図　竪穴系建物跡１（S＝１/50）……8
第５図　竪穴系建物跡２（S＝１/50）……9
第６図　竪穴系建物跡３（S＝１/50・１/100）……10
第７図　SB1102遺物出土状況（S＝１/50）……11
第８図　掘立柱建物跡１（S＝１/50）……15
第９図　掘立柱建物跡２（S＝１/50）……16
第10図　掘立柱建物跡３（S＝１/50）……17
第11図　掘立柱建物跡４（S＝１/50）……18
第12図　掘立柱建物跡５（S＝１/50）……19
第13図　掘立柱建物跡６（S＝１/50）……20
第14図　掘立柱建物跡７（S＝１/50）……21
第15図　古墳時代以前の井戸跡（S＝１/50・１/30）…24
第16図　古墳時代以前の土坑１（S＝１/50・１/30）…30
第17図　古墳時代以前の土坑２（S＝１/50）……31
第18図　古墳時代以前の土坑３（S＝１/50）……32
第19図　古墳時代以前の溝１（S＝１/50）……36
第20図　古墳時代以前の溝２（S＝１/50）……37
第21図　古墳時代以前の溝３（S＝１/50）……38
第22図　古墳時代以前の溝４（S＝１/50）……39
第23図　古墳時代以前の溝５（S＝１/50）……40
第24図　古墳時代以前のその他遺構１（S＝１/50・１/30）……44
第25図　古墳時代以前のその他遺構２（S＝１/50・１/30）……45
第26図　古墳時代以前のその他遺構３（S＝１/60）…46
第27図　古墳時代以前の遺構配置１　B地区北部（S＝１/500）……47
第28図　古墳時代以前の遺構配置２　B地区南部・C地区北部１（S＝１/500）……47
第29図　古墳時代以前の遺構配置３　B地区南部・C地区北部２（S＝１/500）……48
第30図　古墳時代以前の遺構配置４　C地区（S＝１/500）……49
第31図　古墳時代以前の遺構配置５　D地区（S＝１/500）……50
第32図　古墳時代以前の土器・土製品１　建物跡（S＝１/３）……51
第33図　古墳時代以前の土器・土製品２　井戸跡（S＝１/３）……52
第34図　古墳時代以前の土器・土製品３　土坑１（S＝１/３）……53
第35図　古墳時代以前の土器・土製品４　土坑２（S＝１/３）……54
第36図　古墳時代以前の土器・土製品５　溝（S＝１/３）……55
第37図　古墳時代以前の土器・土製品６　その他１（S＝１/３）……56
第38図　古墳時代以前の土器・土製品７　その他２（S＝１/３）……57
第39図　古墳時代以前の石器・石製品１（S＝１/３）……60
第40図　古墳時代以前の石器・石製品２（S＝１/２）……61
第41図　旧大野庄用水１（S＝１/60）……64
第42図　旧大野庄用水２（S＝１/60）……65
第43図　旧大野庄用水３（S＝１/60・１/30）……66
第44図　地震痕跡（S＝１/50・１/400）……67
第45図　中世以降のその他遺構（S＝１/60）……68
第46図　中世以降の遺構配置１　B地区・C地区北部（S＝１/1,000）……69
第47図　中世以降の遺構配置２　C地区南部・D地区（S＝１/1,000）……70
第48図　調査区と旧地籍図（S＝１/3,000）……71
第49図　中世以降の土器・陶磁器１（S＝１/３）……72
第50図　中世以降の土器・陶磁器２（S＝１/３）……73
第51図　中世以降の石製品（S＝１/３）……74
第52図　中世以降の金属製品（S＝１/１）……75
第53図　中世以降の木製品（S＝１/３）……76
第54図　古墳時代前期の畝田東遺跡群概念図（S＝１/2,000）……78
第55図　旧地形と周辺の遺跡（S＝１/25,000）……79

表　目　次

遺物観察表凡例……57
第１表　古墳時代以前の土器・土製品観察表……57～59
第２表　古墳時代以前の石器・石製品観察表……59
第３表　中世以降の土器・陶磁器観察表……73
第４表　中世以降の石器・石製品観察表……74
第５表　中世以降の金属製品観察表……76
第６表　中世以降の木製品観察表……76
第７表　主要遺構の時期……79

図 版 目 次

巻頭図版１　遺跡全景
巻頭図版２　遺構・遺物全景

図版１　Ｄ１区全景
図版２　Ｄ３区全景
図版３　SI1101
図版４　SI1102
図版５　SI1103
図版６　SI1104
図版７　SI1105
図版８　SB1101・SB1103
図版９　SB1102
図版10　その他掘立柱建物跡１
図版11　その他掘立柱建物跡２
図版12　その他掘立柱建物跡３
図版13　井戸跡１
図版14　井戸跡２
図版15　土坑１
図版16　土坑２
図版17　土坑３
図版18　SD1101　１
図版19　SD1101　２
図版20　その他溝１
図版21　その他溝２
図版22　その他溝３
図版23　その他遺構１
図版24　その他遺構２
図版25　出土遺物１
図版26　出土遺物２
図版27　出土遺物３
図版28　出土遺物４
図版29　出土遺物５
図版30　出土遺物６
図版31　出土遺物７
図版32　出土遺物８

第１章　概要

第１節　構成の方針

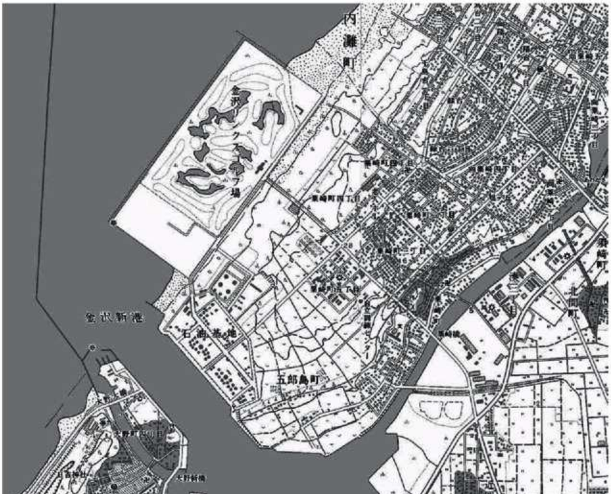
本書は金沢市畝田東遺跡群の発掘調査報告書（６分冊のうち第５分冊）である。「畝田東遺跡群」という遺跡の名称は正式なものではなく、本来は畝田ナベタ遺跡と畝田D遺跡である。両遺跡は別々に発見・登録された遺跡であったが、金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査が進んでいく過程で、範囲が重なることが確認された。さらに、遺跡の内容についても共通するものがあり、連続する遺構も存在する。よって、両遺跡を別遺跡として扱うことは現実的に不可能であり、本書では一体的に「畝田東遺跡群」として報告するものである。当然ながら地域の遺跡動態を考慮した名称ではないことをお断りしておく。

発掘調査報告書は全６分冊の予定であり、第１分冊は空中写真測量図と空中写真、第２～４分冊は遺跡の主体時期である古代の遺構・遺物、第５分冊は古代以外の遺構・遺物、第６分冊は自然科学的分析・総括で構成する。第２～４分冊の区分は地区別によっており、第２分冊がA地区、第３分冊がB地区、第４分冊がC・D地区を所収する。第１・２・５分冊を平成16（2004）年度に刊行し、第３・４・６分冊は平成17（2005）年度に刊行する予定である。

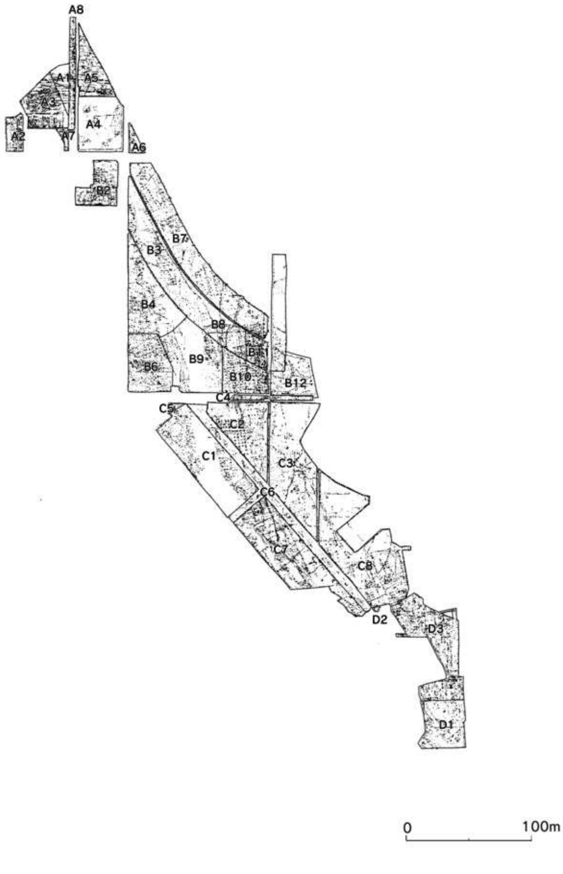
第２節　遺構と遺物

前述したように、本書では畝田東遺跡群の古代以外の遺構・遺物について報告する。
古代に先行する時期は縄文時代、弥生時代、古墳時代の資料が得られている。縄文時代は遺構が確認されず、C７区で後期の土器と石器が出土している。弥生時代は中期の土坑、落ち込みが数基散在する。遺物は土器と石器である。古墳時代は南側のD地区で前期の遺構・遺物が比較的濃密に分布する。５棟の竪穴系建物跡、10棟の掘立柱建物跡等が検出されており、性格としては集落の居住域である。この時期の建物跡は柱穴１間の配置や、柱列が方位に大きく偏向する特徴があり、古代の建物跡と識別する根拠とした。遺物は土器、石製品が出土している。D３区の現地調査中には管玉未成品や剥片が出土し、遺構の土壌を水洗選別した結果、形割、研磨、穿孔各工程の未成品や剥片が得られ、玉生産を行っていたことが確実となった。居住域の周囲には井戸跡を含む土坑群や、延長の大きい溝群、河川跡なども存在し、一体的に集落を構成したものと判断できる。古墳中期は土器が出土しているのみである。古墳後期はB７区にその時期の土器を出土する溝があるが、性格は不明である。

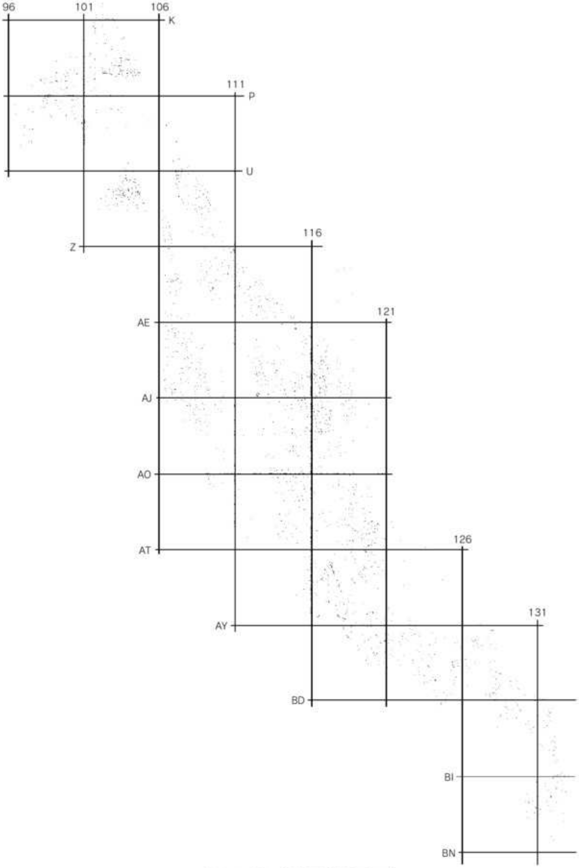
古代に後出する時期は中世、近世の資料が得られている。中世の遺構は、柱穴が小規模な総柱の掘立柱建物跡にその可能性を見出せるが、確実なものは検出されていない。遺物は比較的まとまった量があり、土器・陶磁器として珠洲焼、越前焼、瓦器が、金属製品として銭貨や金具が出土している。銭貨は北宋銭、明銭である。中世の遺物はほとんどが後述する旧大野庄用水から出土しており、その前身を考えさせる資料である。近世の遺構は基本的に近代までの時間幅をもつ。水路の他、肥溜や耕作溝などがあり、最小限の記録を目的とした選択的な調査を行っている。遺構を旧地籍図と照合した結果、A～C地区を貫いて北流する大規模な水路については、旧大野庄用水の一支流であり、周辺の溝群も関係する水路であることが判明している。遺物は少量の陶磁器、木製品、石製品がある。この他、D３区で近世と推定される地震痕跡を検出している。



第１図　遺跡位置図（縮尺１/25,000）



第２図　地区割り図（縮尺１/3,000）



第４図　グリッド配置図（縮尺１/2,500）

第2章　古墳時代以前

第1節　竪穴系建物跡

SI1101（遺構：第4図、図版3）

［地区］D1　　［調査年度］2002　　［グリッド］BK132　　［遺構面標高］3.0m

［構造］4本主柱　　［規模］不明　　［軸方向］長軸が大きく東へ振る

［遺構番号］柱穴：P11010、P11014、P11033、P11034、P11038（建て替えか）

［規模・形状］柱穴：不整円形（径0.3〜0.4m×深0.4〜0.6m）

［柱間距離］3.7（P11033−P11044間）〜4.2m（P11014−P11033間）

［堆積］柱穴覆土は灰色シルト基調で、黒色粘土ブロックが含まれることが多い。地山質で識別しにくい特徴を持つ。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［遺構の時期］出土遺物に乏しく、時期は不明。周辺遺構の状況から、古墳時代前期としたい。

［特記事項］1×1間配置の柱穴のみが検出された建物跡である。柱間が広く、長短比が方形に近いことから、竪穴系建物の上面が著しく削平を受け、主柱穴のみが遺存しているものと判断した。柱穴は地山質覆土で径のわりに深いことが特徴である。狭くて掘削が難しかったことから、記録後に約1/2をたちわることにより、層序と底面を確認している。土層断面ではP11033が他よりも浅くなっているが、柱部分が断面から外れたことによるものであり、その北東に存在する柱部分は同様に深い。また、P11010に隣接するP11038はP11033やP11034の周囲に位置する穴と対応して、建て替えの痕跡を示すものかもしれないが、確証に乏しい。

SI1102（遺構：第4図、図版4）

［地区］D1　　［調査年度］2002　　［グリッド］BK130、BK131　［遺構面標高］3.0m

［構造］4本主柱　　［規模］不明　　［軸方向］長軸が大きく東へ振る

［遺構番号］柱穴：P11018、P11029、P11031、P11039、屋内土坑か：P11017

［規模・形状］柱穴：不整長楕円形（短径0.4m×長径0.6〜0.7m×深0.3〜0.4m）

［柱間距離］2.9（P11018−P11031間）〜3.1m（P11031−P11039間）

［堆積］柱穴覆土は黒色粘土基調で、SI1101よりは識別しやすい。P11031とP11038では灰色粘土の部分が筒状に0.15m下方へ伸びており、柱が沈下した可能性がある。

［先後関係］推定されるプランではSI1103と重複するが、先後関係は不明である。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［遺構の時期］出土遺物に乏しく、時期は不明。周辺遺構の状況から、古墳時代前期としたい。

［特記事項］1×1間配置の柱穴のみが検出された建物跡である。SI1101と覆土は異なるが、柱穴配置は類似しており、同様に竪穴系建物の上面が著しく削平を受け、主柱穴のみが遺存しているものと判断した。柱穴は細長い平面プランが特徴であり、SI1101ほど深くはないものの、やはり狭くて掘削が難しかったことから、約1/2をたちわって層序と底面を確認している。P11039では長軸方向に沿って底面に横木が出土しており、礎板と判断している。きわめて細いが、周囲の土が変色していることから、腐朽した結果であろう。傾いた状態は柱の沈下か抜き取り時の移動を示すものであろう。また、

P11018－P11029間のやや外側に位置するP11017は、柱穴と共通する覆土であり、竪穴系建物に付属する屋内土坑の可能性がある。

SI1103（遺構：第５図、図版５）

［地区］Ｄ１、Ｄ３　　［調査年度］2002、2003

［グリッド］BJ130、BJ131、BK130、BK131　　［遺構面標高］3.0～3.1m

［構造］４本主柱、四角形　　［規模］不明　　［軸方向］長軸が大きく東へ振る

［遺構番号］柱穴：P11019、P11030、P11032、P11153、周溝：SD1179

［規模・形状］柱穴：不整長楕円形（短径0.3～0.4m×長径0.5～0.7m×深0.25～0.45m）、周溝：幅0.3～0.4m×深0.05～0.1m、形状は遺存が悪くて不明確

［柱間距離］2.9（P11030－P11032間）～3.1m（P11019－P11032間）

［堆積］柱穴および周溝覆土は黒色粘土あるいは同色シルト基調で、SI1102と似る。

［先後関係］周溝はP11155と重複しており、周溝が先行する。また、推定されるプランではSI1102と重複するが、先後関係は不明である。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［遺構の時期］出土遺物に乏しく、時期は不明。周辺遺構の状況から、古墳時代前期としたい。

［特記事項］１×１間配置の柱穴とその北側に周溝が検出された建物跡である。P11019・11030・11032は2002年度にＤ１区で確認しており、周溝とP11153は2003年度にＤ３区で確認した。SI1102と同様に竪穴系建物の上面が著しく削平を受け、主柱穴と周溝が遺存しているものと判断した。

柱穴は細長い平面プランが特徴であり、P11019・11030・11032については約１/２をたちわって調査したが、P11153では通常の掘削で層序と底面が確認できた。P11019・11032・11153では礎板が確認されている。P11153は新古の柱穴が重なっており、礎板を持つ南西側の浅いほうが新しい。P11019では長軸方向に沿って礎板が出土しているが、断面では覆土中位に位置する。P11032では短軸方向に沿って礎板が出土しているが、その下位に別の柱穴が存在する。礎板の高度は３柱穴間でほぼ一致していることから、P11019・11032は礎板の下位に古い柱穴が存在してP11153の古い柱穴と対応し、礎板が新しい柱穴に対応する建て替えを想定できる。これに対応しないP11030は何らかの理由で柱が維持されていたものであろう。周溝SD1179は遺存が悪く浅いものであるが、かろうじて延長約５mで両端の屈曲を確認し得た。近接する主柱穴P11153・11019との距離は約２mと近いことから、外周溝ではなく壁周溝と推定できる。この距離をもう一対の主柱穴P11030・11032に反転させると、壁周溝間は約７mとなり、５×７mの四角形プランが復元される。なお、P11019－P11153間のやや内側に位置するP11152は、須恵器が出土しており、SI1103との関係は否定される。

SI1104（遺構：第６図、図版６　遺物：第32図・第39図・第40図、図版25・図版30）

［地区］Ｄ３　　［調査年度］2003　　［グリッド］BI130、BI131、BJ130、BJ131

［遺構面標高］3.0～3.1m　　［構造］四角形　　［規模］周溝内で一辺10m以上

［軸方向］開口部から想定される主軸は大きく西へ振る

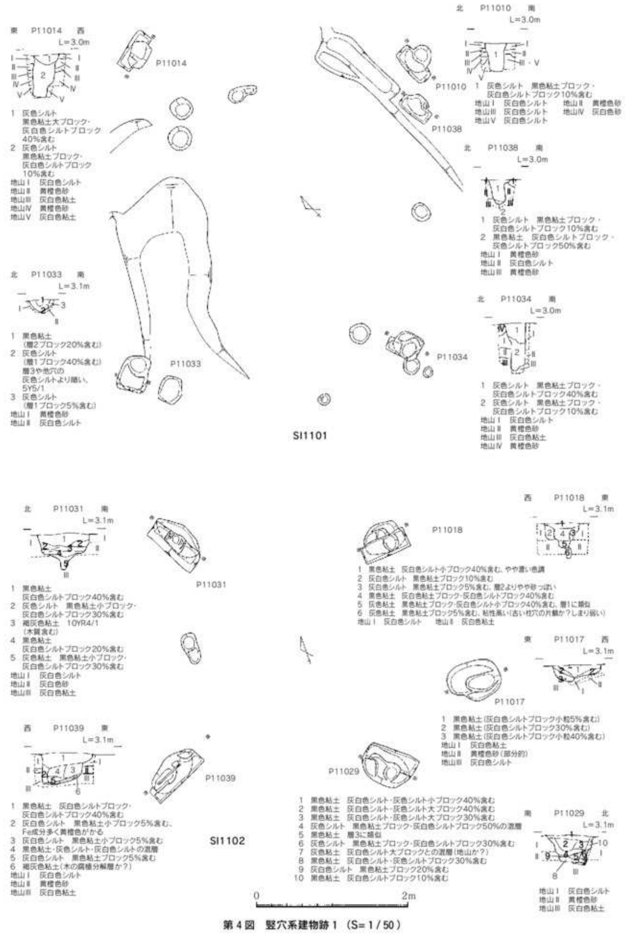
［遺構番号］柱穴：P11157、P11160、周溝：SD1177、SD1180

［規模・形状］柱穴：不整楕円形（径0.3～0.5m×深0.35～0.4m）、周溝：幅1.3～2.3m×深0.05～0.1m、形状は遺存が悪くて不明確

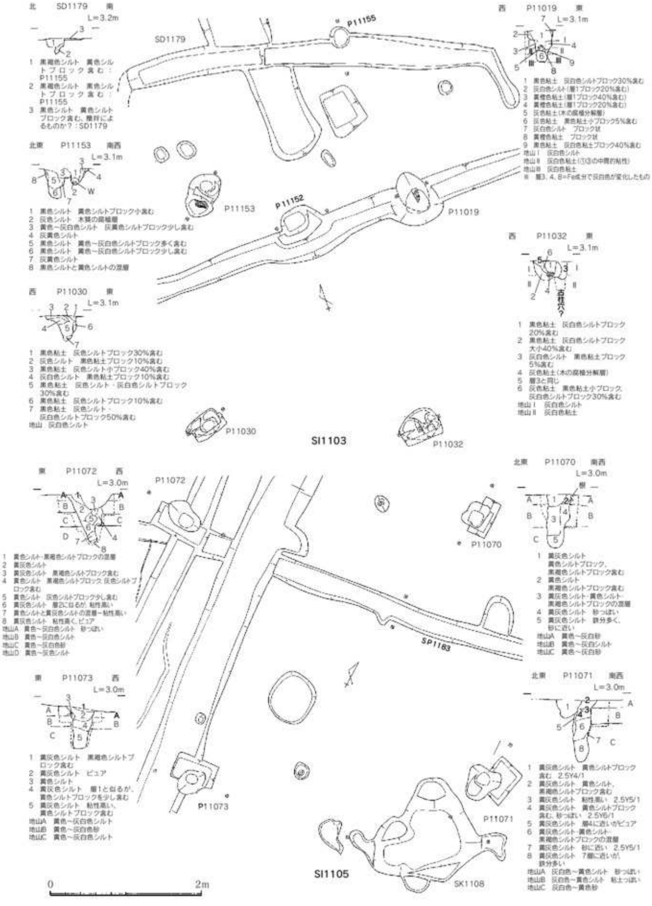
［柱間距離］不明

［堆積］柱穴覆土は黄灰色シルト、周溝覆土は黒色シルトをそれぞれ基調とする。柱穴のうち、P11157は層２～６の部分が相当し、層１は別の穴である。
［先後関係］周溝はいくつかの遺構と重複するが、SD1177の土層断面からはSB1102周溝SD1180（層５～７）→SD1177（層３・４）→SD1163（層２）の先後関係が確認でき、SB1102が本遺構に先行する。
［出土遺物］土器（第32図１～６）、石製品（第39図94・第40図117・121）が出土している。６・117は柱穴、他は周溝から出土した。土器は、在地系の有段口縁甕（１）は摩耗著しい破片であり、遺構に伴うとはいえない。布留系甕（２・３）、同じく鉢（４）、東海・近江系壺（５）、同じく小型高杯（６）が古墳前期でも前半に位置付けられ、遺構の時期を示す。石製品は小型角柱状の砥石（94）、管玉の分割工程未成品（117）、同じく穿孔工程未成品（121）がある。この他、周溝覆土を水洗し角カゴ（２㎜メッシュ）で選別した結果、Ｄ３区の遺構中では大小の玉石材剥片を最も多く得ることができた。
［遺構の時期］出土遺物から、古墳時代前期前半である。
［特記事項］断片的にではあるが周溝と主柱穴を検出し、竪穴系建物跡と判断した。周溝、柱穴とも管玉未製品や剥片を出土しており、玉生産を行っていたことがほぼ確実な建物跡である。
　周溝は南西側のSD1180と北東側のSD1177が対になり、両端の間隔約４ｍが開口部と推定できる。周溝は後世の削平と攪乱によりきわめて浅く不明瞭になっていたが、かろうじて平面プランと他遺構との先後関係を把握し得た。SD1180ではコーナー部分を確認しており、SD1177も調査区外への屈曲が推定されることから、平面形は四角形プランとなろう。なお、きわめて浅い周溝を記録するため、掘りすぎを承知で実際の底面よりも深く掘削したが、それでも深さは10㎝に満たない。柱穴は調査区境界付近でP11157・11160の２基を検出しており、位置的に主柱穴と判断した。ただし２基は近接しており、対になるものではなく、むしろ建て替えを想定しておきたい。

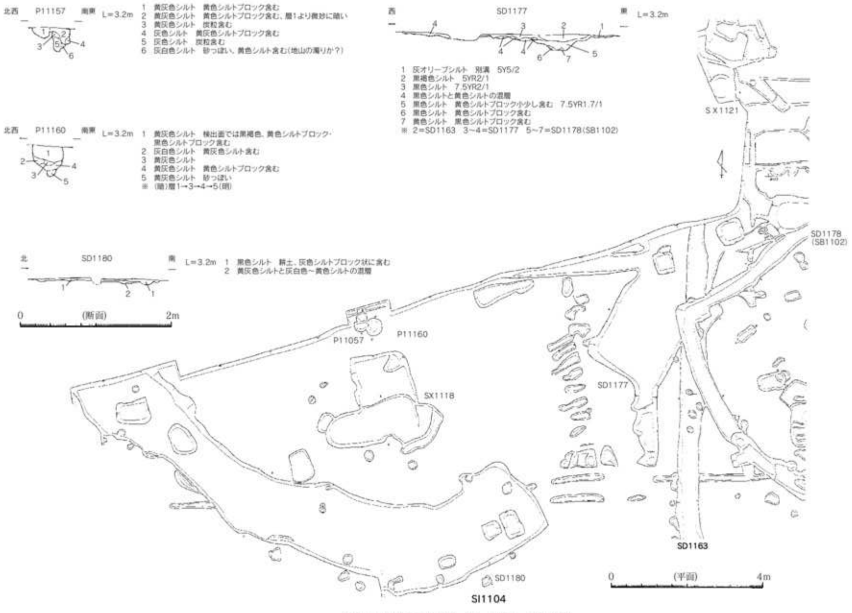
SI1105（遺構：第５図、図版７）
［地区］Ｄ３　［調査年度］2003　［グリッド］BE130　［遺構面標高］2.9m
［構造］４本主柱　［規模］不明　［軸方向］短軸が大きく西へ振る
［遺構番号］柱穴：P11070、P11071、P11072、P11073
［規模・形状］柱穴：不整楕円形（径0.3～0.5m×深0.6～0.85m）
［柱間距離］3.5（P11070－P11071間）～４ｍ（P11070－P11072間）
［堆積］柱穴覆土は黄灰色シルト基調で、地山質土を含む層が多いが、P11073では例外的に少ない。P11071では層６～８の堆積がやや不整であり、柱穴中でもっとも深いことと、褶曲した形状から柱が沈下した可能性がある。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土遺物に乏しく、時期は不明。周辺遺構の状況から、古墳時代前期としたい。
［特記事項］１×１間配置の柱穴のみが検出された建物跡である。SI1101などと同様に竪穴系建物の上面が著しく削平を受け、主柱穴のみが遺存しているものと判断した。柱穴はともかく深いことが特徴であり、狭くて掘削が難しかったことから、約1/2をたちわって層序と底面を確認している。P11073は前述したように柱が沈下した可能性がある。



第4図　竪穴系建物跡1（S=1/50）



第5図 竪穴系建物跡2（S=1/50）



第6図 竪穴系建物跡3 (S=1/50・1/100)

第２節　掘立柱建物跡

SB1101（遺構：第７図、図版８）

［地区］Ｄ３　［調査年度］2003　［グリッド］BJ132、BJ133　［遺構面標高］3.0m

［構造］側柱　［規模］１間（3.75m）以上×２間（1.85＋1.95＝3.8m）以上

［軸方向］N―50°―W　［柱穴番号］P11123、P11124、P11175、P11176

［柱穴規模・形状］不整円形（径約0.3～0.4m×深0.2～0.35m）

［柱穴堆積］覆土は主に黒色シルトと灰黄色シルトで構成される。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは弥生・古墳時代と推定される。

［特記事項］４基の柱穴を検出し、配置から１間以上×２間以上の掘立柱建物跡と判断した。柱列は調査区外へ伸びており、規模は確定できない。Ｄ３区の類例では１×２間か１×３間と推定される。

SB1102（遺構：第８図、図版９　遺物：第32図・第40図、図版25・図版30）

［地区］Ｄ３　［調査年度］2003　［グリッド］BI131・BI132　［遺構面標高］3.0m

［構造］側柱　［規模］１間（2.9m）×２間（1.45＋1.55／1.4＋1.6＝3.0m）

［軸方向］N―39°―W

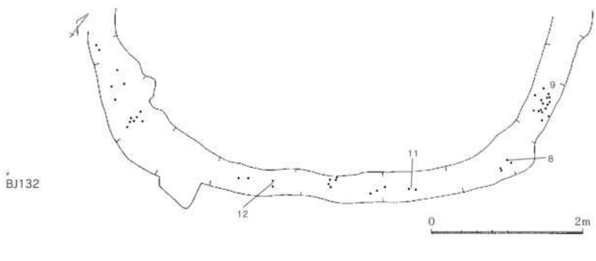
［遺構番号］柱穴：P11129、P11131～111133、P11144、P11148、周溝：SD1178

［規模・形状］柱穴：不整円形（径約0.3～0.5m×深0.15～0.25m）、周溝：断面緩U字（幅0.4～0.5m×深0.15～0.25m）・平面方形（内径5.7m）

［堆積］覆土は柱穴、周溝とも主に黒色シルトで構成される。

［先後関係］周溝は複数の溝と重なっているが、第６図の土層断面から、SB1102周溝SD1178（層５～７）→SI1104外周溝SD1177（層３・４）→SD1163（層２）の先後関係が確認できる。

［出土遺物］周溝SD1178から土器・土製品がまとまって出土している（第32図７～13）。土器は在地系有段口縁に擬凹線を持つ甕(7)、同じく無文の甕（８）、やや薄手で軽量なつくりであるが在地系くの字口縁甕（９）、外来系壷（10）、在来系器台（11）、外来系小型器台（12）、有孔土玉（13）がある。



第７図　SB1102遺物出土状況（S＝1/50）

（9）についてはほぼ完形に復元された。時期は古墳初に位置付けられる。この他、管玉未製品（第40図118）も出土している。

［遺構の時期］出土遺物から古墳時代初である。

［特記事項］遺構の配置から、1×2間の掘立柱建物跡に全周する周溝が付属するものと判断した。この理解については、周溝が壁周溝で、削平された竪穴系建物となる可能性もあり、検出時から現在まで迷っている。類例は、竪穴系建物では金沢市塚崎遺跡第1号竪穴などがあり、掘立柱建物では小松市八里向山C遺跡SB07などがある。本例は、周溝の幅・深さが大きく、柱穴とその配置が小規模であり、柱列が周溝の北側に寄りすぎていることなどを根拠として、掘立柱建物跡としたい。周溝の底面は北東辺がやや低いが、比高差は最大で0.1m程度である。P11148に近接するP11147の存在や、P11131の細長い平面形は建て替えの可能性を示す。

なお、管玉未製品が出土しているが、周溝の覆土を水洗選別しても、少量の剥片が出土しているに過ぎず、玉生産は確実ではない。むしろ、隣接するSI1104からの流入を想定しておきたい。

SB1103（遺構：第7図、図版8）

［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BI132　［遺構面標高］3.0m

［構造］側柱　［規模］1間（2.35m）×2間（1.25+1.3=2.55m）

［軸方向］N—23°—W　［柱穴番号］P11116、P11145、P11146、P11149、P11150、P11151

［柱穴規模・形状］P11116など：不整円形（径約0.4m×深0.25～0.4m）、P11149など：不整長楕円形（短径0.3m×長径0.5m×深0.35～0.4m）

［柱穴堆積］覆土は主に黒色シルトと黄灰色シルトで構成される。

［先後関係］P11150とSX1116の関係は、土層ではP11150（層4～7）が先行する。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは弥生・古墳時代と推定され、後出するSX1116では古墳時代前期前半の遺物が出土していることから、それを降ることはない。

［特記事項］なし

SB1104（遺構：第10図、図版10）

［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BG131、BG132、BH131、BH132

［遺構面標高］3.0m　［構造］側柱

［規模］2間（1.65+1.75=3.4m／1.55+1.75=3.3m）×2間（1.95+1.95／2.1+1.8=3.9m）

［軸方向］N—50°—W　［柱穴番号］P11099、P11101、P11103、P11112

［柱穴規模・形状］不整円形（径0.2～0.3m×深0.22～0.5m）

［柱穴堆積］覆土は主に黒色シルトと黄灰色シルトで構成される。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［先後関係］SB1105と重なり合うが、先後関係は不明である。

［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは弥生・古墳時代と推定できる。

［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、配置から2×2間の掘立柱建物跡と判断した。比較的小さい柱穴が特徴的である。北東側の柱列ではP11102などの近接や穴の重なりがあり、建て替えの可能性

がある。

SB1105（遺構：第10図、図版10・図版11）
［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BG131、BG132、BH131、BH132
［遺構面標高］3.0m　［構造］側柱
［規模］1間（5.1／5.2m）×3間（1.65＋1.75＋1.5＝4.9m）
［軸方向］N—52°—W　［柱穴番号］P11108〜P11111、P11113、P11114
［柱穴規模・形状］P11108：略方形（辺0.2〜0.3m×深0.3m）、その他：不整円形（径0.2〜0.3m×深0.2〜0.35m）
［柱穴堆積］覆土は主に黒色シルトと黄灰色シルトで構成される。
［先後関係］SB1104・1106と重なり合うが、先後関係は不明である。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは弥生・古墳時代と推定できる。
［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、配置から1×3間の掘立柱建物跡と判断した。検出時点では、柱間1間側の間隔が5.1／5.2mと大きくなるため、掘立柱建物跡とすることを躊躇した。しかし、この柱列の復元が最も矛盾がなく、3間の柱列が独立してこの部分のみ柵となるのも不自然であることから、掘立柱建物跡としか考えられない。比較的小さい柱穴はそれらと共通する特徴である。

SB1106（遺構：第11図、図版10・図版11）
［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BI132　［遺構面標高］3.0m
［構造］側柱　［規模］1間（3.7／3.25m）×2間（1.8＋2.0＝3.8m／2.0＋2.0＝4.0m）
［軸方向］N—2°—E　［柱穴番号］P11091、P11093、P11100b、P11104、P11105、P11107
［柱穴規模・形状］P11093：略方形（径約0.4m×深0.4m）、P11091など：不整円形（径0.2〜0.4m×深0.2〜0.4m）
［柱穴堆積］覆土は概ね黒色シルトで構成されている、P11091は暗褐色シルトと黒色シルトととなる。多くは柱痕跡部分が黒色シルト、その周囲が黒色シルトと地山質土の混層というパターンであるが、P11091は柱痕跡が暗褐色シルトである。
［先後関係］SB1105と重なり合うが、先後関係は不明である。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。ほとんど真北を向く軸方向は古代かそれ以降の時期に類例が多いが、柱穴の配置や規模からは弥生・古墳時代と推定できる。
［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、配置から1×2間の掘立柱建物跡と判断した。比較的小さい柱穴が特徴的である。柱列に近接あるいは重複するP11100aやP11106の存在から建て替えの可能性がある。

SB1107（遺構：第12図、図版10・図版11　遺物：第32図、図版25）
［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BE131　［遺構面標高］2.9m
［構造］側柱　［規模］1間（3.4m）×3間（2.0＋1.8＋2.3＝6.1m）
［軸方向］N—31°—W　［柱穴番号］P11075、P11078、P11088、P11089、P11183

［柱穴規模・形状］P11088など：不整円形（径0.2～0.25m×深0.3～0.6m）、P11075：不整長楕円形（短径0.3m×長径0.5m×深0.25m）

［柱穴堆積］覆土は一部の柱穴しか記録していないが、黒色ないし黒褐色シルトと黄灰色シルトで構成される。柱痕跡はいくつかの柱穴で確認できる（P11075層1・6、P11089層4・5）が、いずれも細くて深い。

［出土遺物］柱穴P11078、P11183から土器が出土している。前者は在地系有段口縁甕（14）、後者は外来系くの字口縁甕（15）であり、どちらも古墳初に位置付けたい。系統的にはやや後者が新しく、柱穴の推移を示すものとなる。

［遺構の時期］出土遺物から古墳時代初と推定できる。

［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、配置から1×3間の掘立柱建物跡と判断した。重複する柱穴P11078とP11083や、P11075やP11089など個々に重複する柱穴、近接する柱穴の存在は、建て替えを示すものである。柱はP11078からP11083へ、P11075では南から北へ、P11089では北から南へ移動しており、それぞれ対応するものと考えている。

SB1108（遺構：第13図、図版10～図版12）

［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BD131、BE131　［遺構面標高］2.9m

［構造］側柱　［規模］1間（2.7m）×2間（1.55＋1.35＝2.9m／1.4＋1.3＝2.7m）

［軸方向］N—43°—W　［柱穴番号］P11085、P11087

［柱穴規模・形状］不整円形（径0.3m前後×深0.25～0.4m）

［柱穴堆積］遺構検出面には砂帯が蛇行しており、遺構南半部の柱穴は砂を基盤層とする。覆土は一部の柱穴しか記録していないが、黒色ないし黒褐色シルトである。

［先後関係］SB1109が重複しているが、先後関係は不明である。柱根が残るSB1108が新しいかもしれない。

［出土遺物］時期がわかるものはない。P11085では柱根が遺存しているが、状態は良くない。底面は深く下がっており、沈下した可能性がある。そのため腐朽しなかったのかもしれない。

［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは弥生・古墳時代と推定できる。

［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、柱穴底面の標高はほぼ揃っており、1×2間の掘立柱建物跡と判断した。

SB1109（遺構：第13図、図版10・図版12）

［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BD131　［遺構面標高］2.9m

［構造］側柱　［規模］1間（2.6m）×2間（1.25＋1.25＝2.5m）［軸方向］N—38°—W

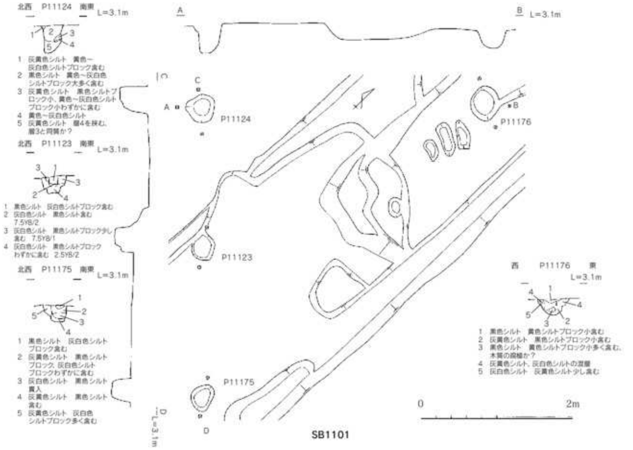
［柱穴番号］P11088、SK1111内P

［柱穴規模・形状］不整円形（径0.3～0.4m×深0.2～0.35m）

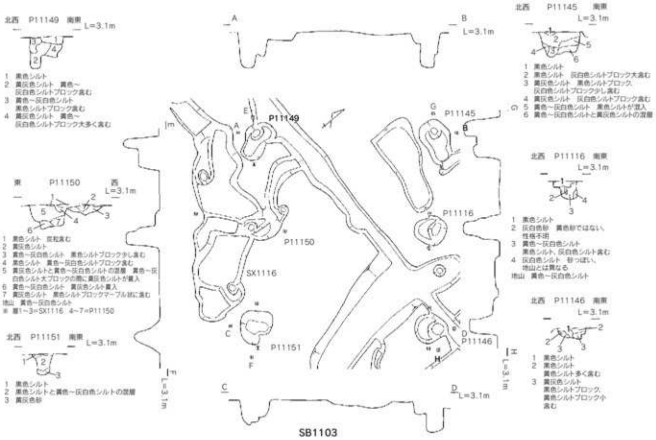
［柱穴堆積］遺構検出面には砂帯が蛇行しており、遺構南半部の柱穴は砂を基盤層とする。覆土は一部の柱穴しか記録していないが、黒色シルトに地山質土を含む。

［先後関係］SB1108が重複しているが、先後関係は不明である。柱根が残るSB1108が新しいかもしれない。SK1111内P（層4～6）はSK1111（層2）に切られている。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

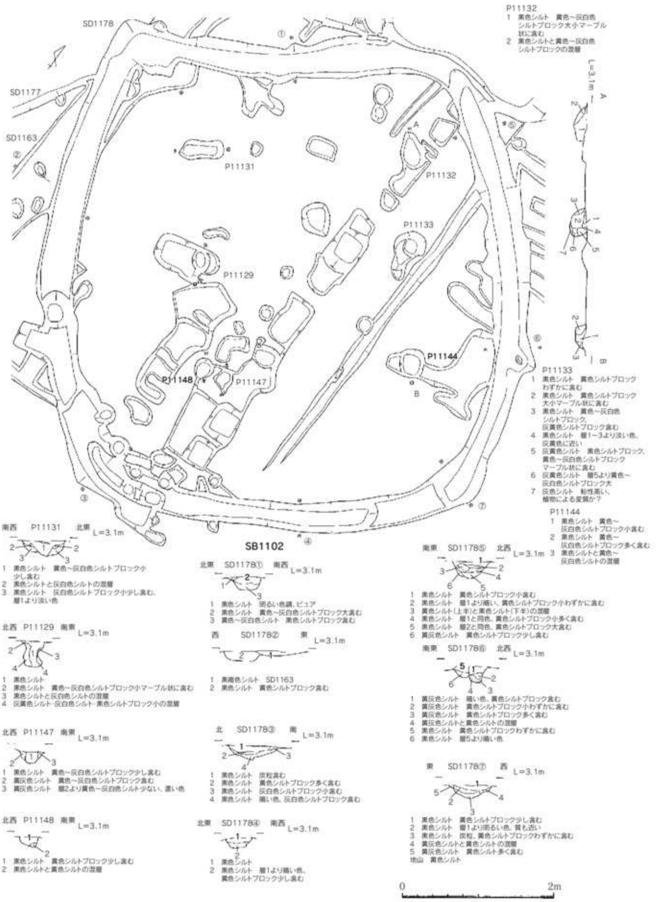


SB1101

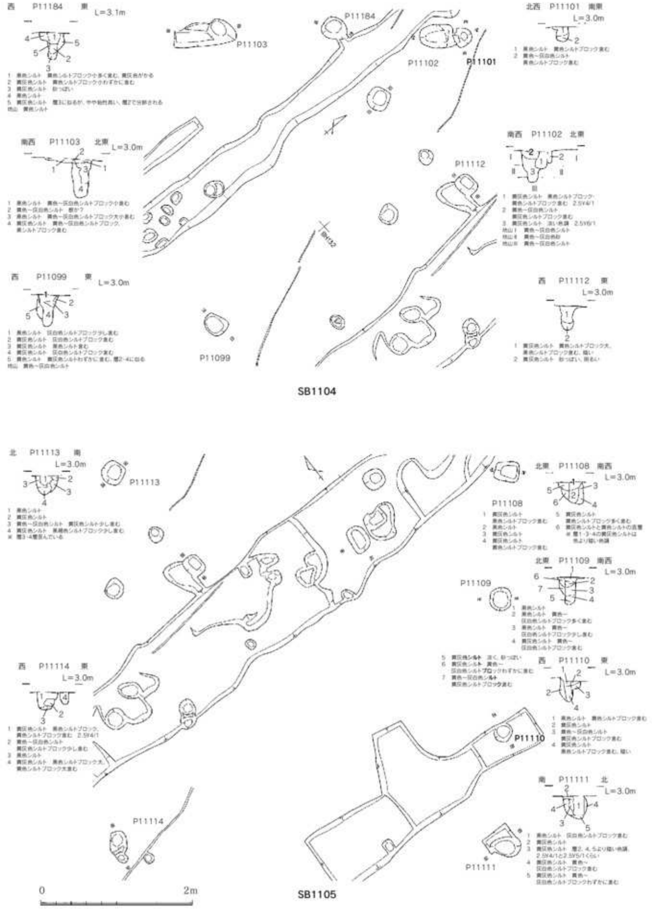


SB1103

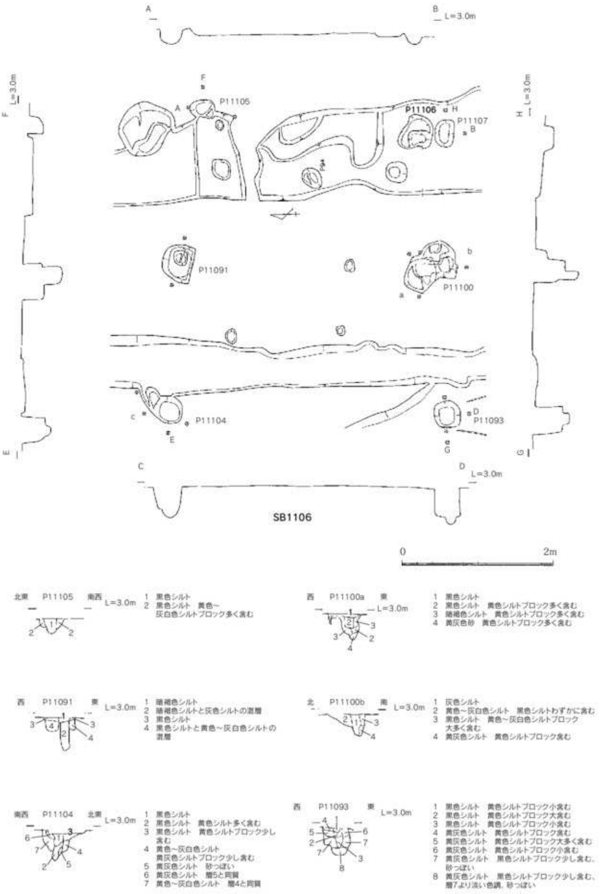
第8図 掘立柱建物跡1（S=1/50）



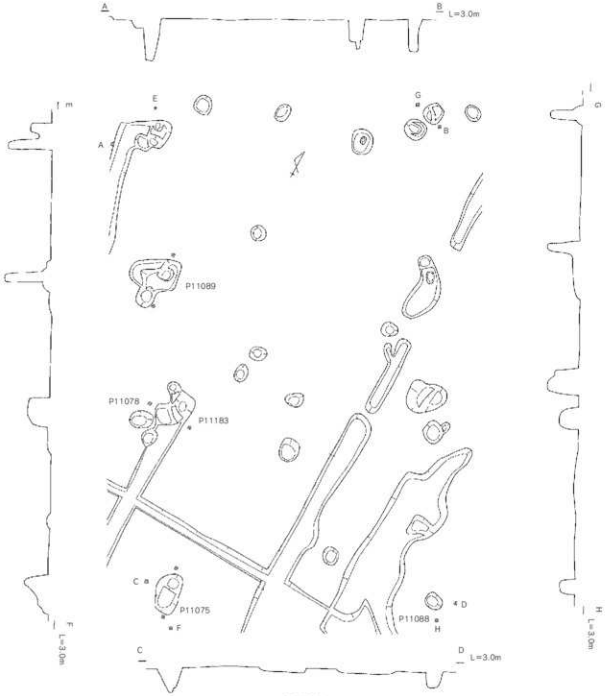
第９図 掘立柱建物跡２（S=１/50）



第 10 図　掘立柱建物跡 3 （S= 1 / 50）

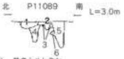


第11図 掘立柱建物跡4（S=1/50）

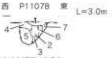


SB1107

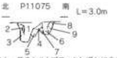
0　　2m



1　黒色シルト　黄色シルト含む
2　黄灰色シルト　黒色シルト・黄色シルト含む
3　黄色シルトと黄灰色シルトの混層
4　黒褐色シルト　ピュア
5　黒色シルト　黄色シルトブロックわずかに含む、
　ほぼピュア
6　黄灰色シルト　黒色シルト小ゴマ状に含む、植物根か？
地山　黄色～灰白色シルト

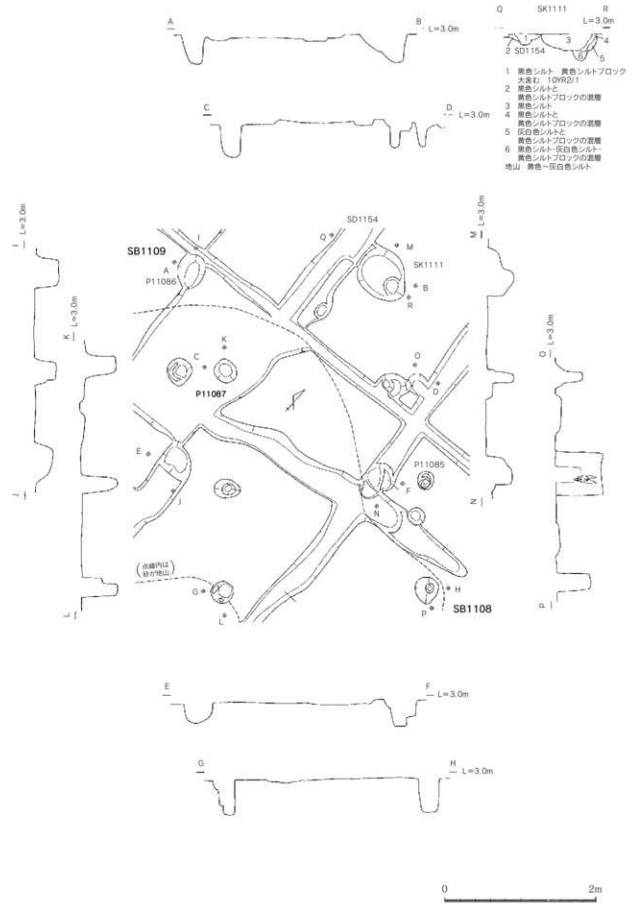


1　黒色シルト　黄色シルトブロック含む
2　黄色～灰白色シルト　黄灰色シルト含む
3　黄灰色シルト　黒色シルトブロック、黄色シルトブロック含む
4　黄灰色シルト　黒色シルトブロック多く含む、
　黄色シルトブロック少し含む
5　黄灰色シルト　黄色シルトブロック大多く含む、
　黒色シルトブロック少し含む
6　黒色シルト　黄色シルトブロック少し含む
7　黄灰色シルト　黄色シルトブロック含む

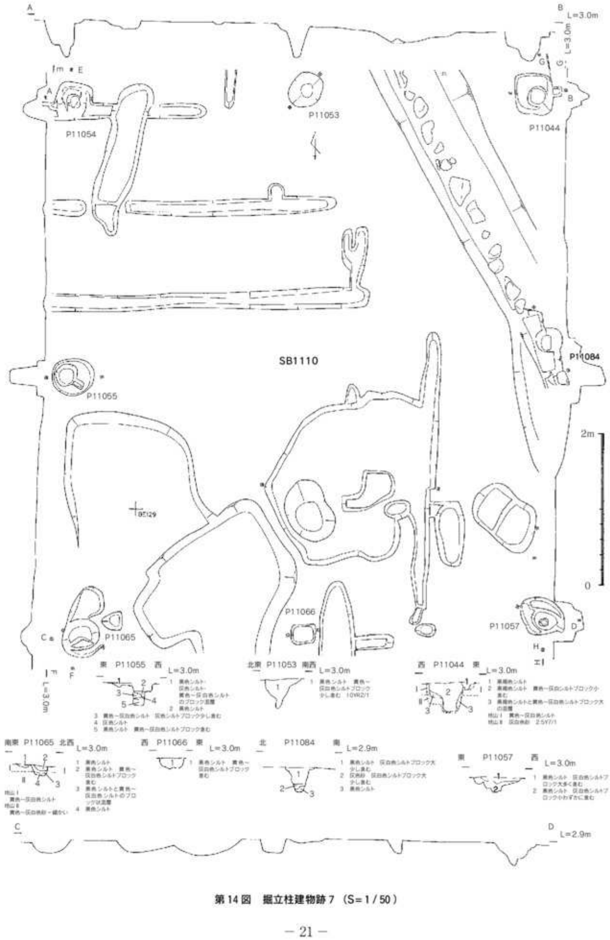


1　黒色シルト　黄色シルトブロックわずかに含む　10YR2/1
2　黒色シルトと黄色シルトの混層
3　黄色シルト　黄灰色シルトブロック少し含む、砂っぽい
4　層3に似るが、黄色シルトブロック粘質で硬い
5　黄灰色シルト　黄色シルト・黒色シルトブロック少し含む
　2.5Y5/1
6　黒褐色シルト　黄色シルトブロック小多く含む　10YR3/1
7　黄色シルト　黄灰色シルトブロック含む
8　黄灰色シルト　黒色シルトブロック、黄色シルトブロック含む
9　黄灰色シルトと黄色シルトの混層

第 12 図　掘立柱建物跡 5（S＝1 / 50）



第13図 掘立柱建物跡6（S=1/50）



第 14 図　掘立柱建物跡 7（S＝1/50）

［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。柱穴の配置や規模、北から大きく振れる軸方向からは、SB1108と同様に弥生・古墳時代と推定できる。
［特記事項］やや軸線から柱がずれるが、柱穴底面の標高はほぼ揃っており、1×2間の掘立柱建物跡と判断した。

SB1110（遺構：第14図、図版11・図版12）
［地区］D3　［調査年度］2003　［グリッド］BD128、BD129、BE128、BE129
［遺構面標高］2.9m
［構造］側柱　［規模］2間（3.2+3.3=6.5m）×2間（3.5+3.9=7.4m）
［軸方向］N—2°—W
［柱穴番号］P11044、P11053～P11055、P11057、P11065、P11066、P11084
［柱穴規模・形状］P11044、P11066など：略方形（辺0.3～0.5m×深0.1×0.4m）、P11053、P11055など：不整円形（径0.4～0.6m×深0.3×0.4m）
［柱穴堆積］覆土は黒色シルトに地山質土を含むもので概ね一致する。P11053のみ底面が細く深くなっており、古い木根ないし柱が沈下した痕跡の可能性がある。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土遺物は乏しく、時期は不明である。ほとんど真北を向く軸方向から古代かそれ以降の時期とも考えたが、同様な柱穴配置の類例は見いだせなかった。軸方向については、古墳時代を想定しているSB1106とも近似しており、柱列がずれる傾向なども共通するので、同じ時期に存在した可能性を示しておきたい。
［特記事項］柱穴の規模・形状がややばらつくが、配置から2×2間の掘立柱建物跡と判断した。D3区の中では比較的柱間距離が広く、建物規模も大きいわりに柱穴は小振りであり、想定される柱も決して太いものではない。また軸線から柱が外れてくるなど、それほど整ったプランともいえない。

第3節　井戸跡

SK522（遺構：第15図、図版13　遺物：第33図、図版25）
［地区］C1　［調査年度］2001　［グリッド］AN109　［遺構面標高］2.3m
［井戸側構造］不明　［井戸側規模］不明
［掘方形状・規模］平面：不整円形（径1.5m）、断面：上縁が広がる筒形（深1.6m以上）
［堆積］7層のうち、層5が地山質で、他は黒色の有機質土。上層の層1～5はレンズ状、下層の層6・7は水平堆積で、層6から層7へ粘性が高くなる。上層は地山の崩落も含めた自然堆積、下層は人為の埋め戻しを想定したい。
［出土遺物］層4下部で小型丸底壺（第33図18）が、ほぼ底近くから布留系の甕（16・17）、壺（19）が出土しており、（16・19）は完存している。全般に厚手・粗製化傾向が見られ、古墳前期でも後半に降るものであろう。ハケ調整の（18）はさらに降る可能性があり、そうであれば堆積の時期差を表すものかもしれない。
［遺構の時期］出土土器から古墳時代前期後半である。
［特記事項］深い円筒形の形状や、底近くでの釣瓶的な土器の出土状況から、井戸跡と判断した。

SX810a（遺構：第15図、図版13　遺物：第33図、図版25）

［地区］C７　［調査年度］2002　［グリッド］AY121　［遺構面標高］2.6m

［井戸側構造］不明　［井戸側規模］不明

［堀方形状・規模］平面：不整円形（径0.8m）、断面：袋状（深1.1m）

［堆積］５層のうち、直接伴うのは層１～４で、主体は暗褐色土に灰色土粒が斑点状に混じる層１である。ほとんど単層と記録されているが、狭くて深い遺構で下半は暗くて十分に観察できなかった。層２～４は地山の崩落土と判断している。

［出土遺物］覆土中位からくの字口縁の甕（20）が出土している。破片は１個体分存在するが、細かいため接合しなかった。

［遺構の時期］出土土器で詳しく位置付けるのは難しいが、古墳時代前期と考えたい。

［特記事項］検出当初は不整形な落ち込みと想定していたが、掘削を進めていくうちに深い土坑状の本遺構SX810aと浅い落ち込みのSX810bに分離した。さらにSX810aは南西に同じような深さでひとまわり小径の穴が複合していた。SX810aは径のわりに深く、壁面がオーバーハングしていくため掘削が難しい遺構となった。覆土の観察も難しかったが、壁面で地山の推移（層Ⅰ～Ⅳ）を観察しながら掘削を進め、底まで到達したものと判断している。袋状の断面は地山が崩落して生じた可能性もあろう。遺構の性格は、形状から井戸跡と判断した。南西に複合する穴は井戸側の抜き取り穴の可能性がある。

SK1104（遺構：第15図、図版14　遺物：第33図、図版25）

［地区］D１　［調査年度］2002　［グリッド］BM132　［遺構面標高］3.0m

［井戸側構造］縦板組　［井戸側規模］辺0.4～0.5mの方形

［堀方形状・規模］平面：不整長楕円形（径1.3×1.6m×深0.5m）

［堆積］覆土は灰色シルトを基調とする。井戸側裏込め（層１～７）、枠内埋土（層８・９）、井戸側痕跡（層10～13・15）、堀方掘削後の整地（層16・17）と理解している。井戸側裏込めは灰色シルトと黒色粘土が互層状になる。枠内埋土は上層シルト（層８）、下層砂（層９）と移行する。

［出土遺物］枠内下層底近くから土器の下半部が出土している（21）。薄手軽量なつくりの在地系甕と推定できるが、底部が安定しているため、型式的には古い。時期は弥生末～古墳初としたい。

［遺構の時期］出土土器から弥生時代末～古墳時代初である。

［特記事項］NR1101の埋没後、その肩部を切って掘削されている。地山はNR1101の堆積砂である。土層断面で垂直方向に伸びる木質層が確認され、底面ではそれが南側に寄って方形に配置することが確認されたことから、縦板組の井戸と判断した。四辺の縦板は縁を型持たせ状に接して組まれており、南東辺は３枚、南西辺は２枚が重ねられ、その一部は壁面に届いている。また、南北隅には杭状の細い材が打ち込まれている。井戸側そのものは遺存しておらず、痕跡からの判断であるが、縦板組井戸側の構造は以上のようなものと推定される。

SK1116（遺構：第15図、図版13　遺物：第33図、図版25）

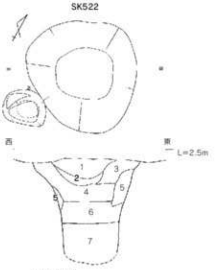
［地区］D１、D３　［調査年度］2002、2003　［グリッド］BJ130　［遺構面標高］3.1m

［井戸側構造］不明　［井戸側規模］不明

［堀方形状・規模］平面：不整円形（径1.0m前後）、断面：上縁が広がる円筒形（深0.8m）

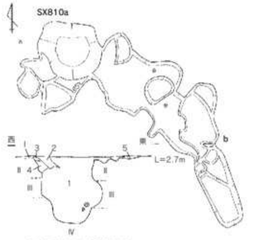
［堆積］覆土は上から黒色シルト（層１）、灰色シルト（層２・３）、灰白色シルト（層４）と推移し、層４下縁で地山が砂層に到達する。

SK522



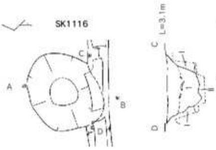
1 黒褐色土
2 黒色土 炭化物層
3 黒灰褐色土
4 黒褐色土 層1に似る、地山粒わずかに含む
5 灰暗褐色土 地山ブロック多く含む
6 黒褐色土 地山小ブロック多く含む
7 黒褐色粘質土 植物腐植物含む層

SX810a

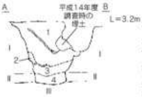


1 暗褐色シルト+暗灰色シルト
(灰白色の斑点が上部によく見られ、下部にいく程灰色味を帯びる)
2 褐灰色シルト+灰白色シルト
3 地山ブロック
4 暗褐色シルト
5 地山土に灰色シルトが混入
地山Ⅰ 明黄褐シルト(灑)
地山Ⅱ 明黄褐シルト(灑)
地山Ⅲ 明黄褐～灰白色粘土
地山Ⅳ 灰色粘土(腐植、自然木含む)
※ 層2～4=壁面の崩落土か?

SK1116

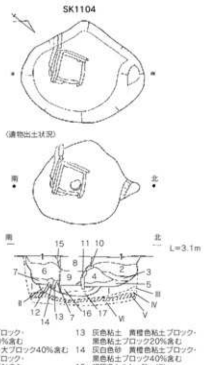


1 黒色粘土 灰白色シルト・灰色シルトブロック5%含む、土器を境にして上半は淡くFe成分が流れるが、下半は濃くFe成分少ない。明確な分層ができない
地山Ⅰ 灰白色シルト
Fe成分含み黄色がかる
地山Ⅱ 灰白色粘土

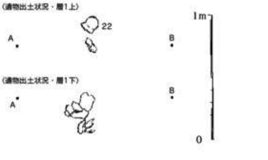


1 黒色シルト 炭化物層の下部は
灰白色シルトブロック含む
2 灰色シルト 灰白色シルトブロック小含む、
N4/0
3 灰色シルト 灰白色シルトブロック少し含む
4 灰白色シルト 粘性高く青味がかる、
灰色シルトわずかに含む、N8/0
地山Ⅰ 黄色～灰白色シルト 砂っぽい、
薄い砂層部分的にあり
地山Ⅱ 灰白色シルト 粘性強く青味がかる
地山Ⅲ 灰白色砂 青味がかる

SK1104



1 灰色シルト 黒色粘土ブロック・
灰白色シルトブロック40%含む
2 黒色粘土 灰白色シルト大ブロック40%含む
3 灰色シルト 黒色粘土ブロック・
灰白色シルトブロック40%含む
4 灰白色砂 灰色シルトブロック・
黒色粘土ブロック小20%含む
5 黒色粘土 灰色シルトブロック・
灰白色シルトブロック大50%含む
6 黒色粘土 灰色シルトブロック・
灰白色シルトブロック40%含む
7 灰白色砂 黒色粘土ブロック5%含む
8 灰色シルト 黒色粘土ブロック・
灰白色シルトブロック10%含む
9 灰色砂 黒色粘土ブロック小5%含む、
濃淡の砂が薄く水平に堆積(自然堆積か?)
10 黄橙色粘土
11 灰色シルト 黄橙色粘土ブロック・
黒色粘土ブロック10%含む
12 灰色粘土 黄橙色粘土ブロック5%含む
13 灰色粘土 黄橙色粘土ブロック・
黒色粘土ブロック20%含む
14 灰白色砂 黄橙色粘土ブロック・
黒色粘土ブロック40%含む
15 褐灰色シルト 砂っぽい
16 灰白色砂 おもに下半に灰色シルトを
層状に30%含む
17 灰白色砂 層16に似るが、
灰色シルト10%程度含む(地山か?)
地山Ⅰ 灰白色砂 灰色シルトをわずかに点々と含む
地山Ⅱ 褐灰色砂・礫
地山Ⅲ 灰白色粘土
地山Ⅳ 灰白色砂
地山Ⅴ 黄橙色砂 Fe成分が沈着し硬化している、
Ⅳ、Ⅵと本来同質あるいは粘質か?
地山Ⅵ 灰白色砂 腐植した木を含み、
その周囲に青灰色粘土を含む
地山Ⅶ 青灰色粘土～シルト 腐食した木を含む
※ 層8～9=井戸枠内
層10～13・15=枠か? 層16・17=堀方底



第15図 古墳時代以前の井戸跡(S=1/50・1/30)

［出土遺物］土器が出土している。層１から畿内系高杯（23）、その下位から粗製甕（22）が出土し、完形に復元された。層３との境界では、図化できなかったが布留系甕が出土している。時期は古墳前期の前半か後半か定め難いが、高杯の華奢な形状は古い型式であり、前半に位置付けたい。下層出土の布留系甕も同様な時期が想定され、堆積層の上下で時間差はほとんど感じられない。
［遺構の時期］出土土器から古墳時代前期前半である。
［特記事項］形状と砂層まで掘削されていることから井戸跡と判断した。調査区をまたいで位置しており、２カ年で調査を行った遺構である。遺構の南縁を2002年度にＤ１区で検出し、層１から出土した高杯を横穴掘削で取り上げている。2003年度は全体を検出し、完掘している。井戸側や水溜は確認されなかったが、層３では中央に暗い色調の部分が不整円形に観察され、細かい木片が含まれていたことから、桶のようなものが井戸側か水溜に使用されており、抜き取られた可能性がある。

第４節　土坑

P996（遺構：第16図、図版15　遺物：第34図、図版26）
［地区］B10　　［調査年度］2000　　［グリッド］AJ116　［遺構面標高］2.3m
［形状・規模］平面：方形か（辺1.0m前後か）、断面：箱形（深0.6m）
［堆積］暗灰色～暗灰褐色シルトで構成される。
［出土遺物］層１、層２からほぼ１個体ずつ土器が出土している。層１からは壺（第34図25）が横倒しの状態で出土している。口縁部以外はほぼ復元できた。層２からは外来系のくの字口縁甕（24）が出土している。甕は古墳初～前期前半に類品がある。
［遺構の時期］出土土器から古墳時代初～前期前半である。
［特記事項］排水溝に切られており、正確な規模・形状は不明である。遺構の種別はPと区分されているが、規模・形状から土坑の項に含めた。

SK48（遺構：第16図、図版15　遺物：第34図、図版26）
［地区］Ｂ６　　［調査年度］2000　　［グリッド］AK108　［遺構面標高］2.3m
［形状・規模］平面：不整円形（径1.0～1.2m）、断面：底面がすぼまる円筒形（深0.85m）
［堆積］上層（層２・３）、中層（層４～７）、下層（層８～10）、最下層（層11・12）に区分され、黒色粘土と灰色粘土が互層をなしており、埋め戻されたものと推定する。
［先後関係］重複するSK34（層１）が後出する。
［出土遺物］下層から凹線文系甕（26）が出土している。弥生時代中期後半でも降る時期である。
［遺構の時期］出土土器から、弥生時代中期である。
［特記事項］土坑の南北に、幅は同じで深さ10cm 前後の溝が伸びており、土坑に伴うものと推定される。堅果類は出土していないが、藤江C遺跡に類例があるような貯蔵穴であろうか。

SK416（遺構：第16図、図版15　遺物：第34図、図版26）
［地区］Ｂ７　　［調査年度］2001　　［グリッド］AB112　［遺構面標高］2.0m
［形状・規模］平面：長方形か（短辺1.3m×長辺2.7m以上）、断面：皿状（深0.25m）
［堆積］暗灰色粘土で構成され、レンズ状堆積をなす。
［出土遺物］覆土から土器が出土している。在地系の甕口縁部（27）、同一個体らしき底部（28）、形

態から近江系との折衷が想定される甕口縁部（29）であり、時期は弥生時代中期後半である。また、覆土全般に炭化物が多く含まれており、土坑中の有機物が炭化したものと推定される。
［遺構の時期］出土土器から、弥生時代中期である。
［特記事項］遺構の北東部は調査区外に伸びており、全形は不明であるが、その形状から土坑墓の可能性がある。

SK523（遺構：第16図、図版15　遺物：第34図、図版26）
［地区］C1　［調査年度］2001　［グリッド］AP109　［遺構面標高］2.3m
［形状・規模］平面：不整形（長径2.6×短径2.2m）、断面：逆台形（深1m）
［堆積］層1～3・6・8・9とほとんどの層は黒色土である。層4は地山質で、見る限り層5とともに崩落土のようである。層7はやや灰色がかる。
［出土遺物］主に層3から出土しており、特に北側に集中していた。断面には層5・7にも土器が見られる。ほぼ外来系で占められ、壺（30）、精製鉢（31）、線刻のある壺底部（32）、東海系高杯（33・34）がある。時期は古墳前期でも前半である。
［遺構の時期］時期は出土した土器から、古墳時代前期前半である。
［特記事項］大型土坑である。先後関係ではP5624に切られている。北に近接するSK524は断面に構造物の痕跡が見られ、井戸の可能性が指摘されている。本遺構SK523はSK524と断面こそ異なるが、規模・形状がよく似ていることから、同様の性格を持つ可能性がある。

SK524（遺構：第16図、図版15）
［地区］C1　［調査年度］2001　［グリッド］AO109・AP109　［遺構面標高］2.3m
［形状・規模］平面：不整形（長径2.5×短径1.9）、断面：逆台形（深0.9m）
［堆積］全体に暗灰色系の覆土であり、ほとんどの層は均質に近いが、層4～6は地山質土を多く含む。断面を見る限り層1・3・6・9が中央に筒状に堆積し、層2・4・5・7・8がその外周に堆積している。前者は井戸側など構造物の痕跡を示すもので、後者はその裏込めとなる可能性があろう。
［出土遺物］主に層3から出土しており、特に北側に集中していた。断面には層5・7にも土器が見られる。図化はできなかった。
［遺構の時期］出土土器では不明確であるが、SK523との類似から古墳時代前期と考えたい。
［特記事項］大型土坑である。堆積状況は本遺構が井戸跡となる可能性を示しているが、根拠が弱い部分もあり、土坑の項に含めた。南に近接するSK523とは堆積や底面形状がやや異なるが、全体的な規模・形状はよく似る。

SK525（遺構：第16図、図版15　遺物：第35図、図版26）
［地区］C1　［調査年度］2001　［グリッド］AT114　［遺構面標高］2.4m
［形状・規模］平面：不整円形（長径1.6×短径1.1m）、断面：筒形（深0.8m）
［堆積］最上層に炭化物層（層1・2）が薄く堆積しているが、主体となるのは暗灰色土（層3～5）である。炭化物層は層1が灰、層2が炭を主体とする。暗灰色土は下層へ向かって粘質からシルト質へ転じている。
［出土遺物］覆土から壺2固体が出土している（35・36）。どちらも下半部であり、上半部は確認できなかった。

［遺構の時期］出土土器で詳しく位置付けるのは難しいが、古墳時代前期と考えたい。
［特記事項］大野庄用水の肩部縁を掘削していた際に検出したものであり、本遺構の上部は用水設置時に削平されている。よって、現状の最上層で確認した炭化物層がどのように生成され、本遺構と関係するのかについては不明な部分が多い。ただし、同様の検出例はD１区SK1101でも見られる。

SK1101（遺構：第17図、図版16　遺物：第35図、図版27）
［地区］D１　［調査年度］2002　［グリッド］BM131　［遺構面標高］2.9m
［形状・規模］平面：不整円形（径1.35～1.4m）、断面：皿状（深0.4m）
［堆積］最上層に炭化物層（層１）が堆積しているが、主体となるのは灰色シルトである。
［出土遺物］土器が出土している。層１から布留系甕１個体（37）が横倒しになってつぶれた状態で出土している。時期は古墳前期前半である。
［遺構の時期］出土土器から、古墳時代前期前半である。
［特記事項］NR1101の埋没後、その肩部を切って掘削されている。地山は粘性の低いシルトから砂へ移行する。最上層で確認した炭化物層の類似例はC１区SK525でも見られるが、土器１個体が出土した点は異なる。本遺構もやはり上部は削平されており、検出された状況をそのまま当時の状況とは捉えられないが、埋没する過程で土器を入れる意図があったことは明らかであろう。

SK1102（遺構：第17図、図版16　遺物：第35図、図版27）
［地区］D１　［調査年度］2002　［グリッド］BM131　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：不整楕円形（短径1.35×長径1.65m）、断面：皿状（深0.55m）
［堆積］主に黒色粘土で構成されるが、西半は地山質土を多く含む層（層９～12）が占める。
［出土遺物］覆土から土器が出土している。層１からは精製壺（39）、層２からは擬凹線を持つ在地系有段口縁甕（38）が出土しており、他に小型高杯（40）がある。時期は古墳初である。
［遺構の時期］出土土器から、古墳時代初である。
［特記事項］NR1101の埋没後、その肩部を切って掘削されている。地山は砂である。検出時は層１と層９・11・12がはっきりと区別でき、後者が裏込め土となって何らかの施設が存在した可能性があるが、調査では確認できなかった。

SK1103（遺構：第17図）
［地区］D１　［調査年度］2002　［グリッド］BM131　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：不整形（短径1.25×長径1.55m）、断面：浅皿状（深0.3m）
［堆積］黒色粘土（層１）で構成され、層２以下はNR1101の不整な堆積と推定される。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土土器が乏しく、不明であるが、周辺遺構の時期から弥生・古墳時代であろう。
［特記事項］NR1101の埋没後、その肩部を切って掘削されている。近接するSK1102のような規模・形状を予想していたが、層２以下は遺構の体をなすものではなかった。同時期の遺構とすれば、削平されて浅くなったことと、SK1102との間にある程度の比高差が存在したことが予想される。

SK1105（遺構：第17図）
［地区］D１　［調査年度］2002　［グリッド］BK131　［遺構面標高］3.0m

［形状・規模］平面：不整形（短径0.65×長径2.5m）、断面：浅皿状（深0.2m）
［堆積］大半は上層の黒色粘土（層３）で、下層は灰白色シルト（層４）である。層１・２はより新しい時期の浅い落ち込みの覆土である
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］出土土器が乏しく、不明であるが、周辺遺構の時期から弥生・古墳時代であろう。
［特記事項］西側に浅い落ち込みが重なっていることは確認したが、周辺が著しい攪乱を受けていたこともあって、全形はうまく捉えられなかった。

SK1106（遺構：第17図）
［地区］Ｄ１　［調査年度］2002　［グリッド］BM132　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺0.6×長径1.05×深0.3m）
［堆積］上層の褐灰色粘土（層１）、下層のオリーブ黄色シルト（層２）で構成される。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明であるが、他の遺構とは覆土の印象が異なっており、新しい時期の可能性もある。

SK1107（遺構：第17図、図版16・図版17　遺物：第35図、図版27）
［地区］Ｄ１　［調査年度］2002　［グリッド］BM132　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：不整円形（径約1.3m）、断面：皿状（深0.3m）
［堆積］主に黒色粘土で構成され、縁に地山質土（層４～６）が堆積する。
［出土遺物］土器が出土している。層３から折り重なるように数個体が出土している。最も上位のくの字口縁甕（41）は完形に復元された。その下位には甕（42）、壺（43）が位置する。甕は外面ケズリ調整の粗製甕で、外来系と推定されるが、系統は不明である。時期は詳しく位置付けるのは難しいが、甕が丸底化していることから古墳前期でも前半以降であろう。
［遺構の時期］出土土器から古墳時代前期である。
［特記事項］NR1101の埋没後、その肩部を切って掘削されている。覆土の地山質土は壁の崩落土の可能性があるが、現状のような深さでは崩れにくいことと、近接するSD1101も北側よりかなり浅くなっていることから、著しく削平されていることを想定しておきたい。

SK1108（遺構：第18図、図版17）
［地区］Ｄ３　［調査年度］2003　［グリッド］BE130　［遺構面標高］2.9m
［形状・規模］平面：不整形（短径1.05×長径1.45m）、断面：皿状（深0.35m）
［堆積］主に黒色シルトで構成され、縁に地山質土（層４～６）が堆積する。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明
［特記事項］大型土坑であるが、性格不明である。

SK1109（遺構：第18図、図版17）
［地区］Ｄ３　［調査年度］2003　［グリッド］BD132　［遺構面標高］2.9m
［形状・規模］平面：不整円形（径0.8～0.85m）、断面：逆台形（深0.2m）
［堆積］黒色シルトの単層

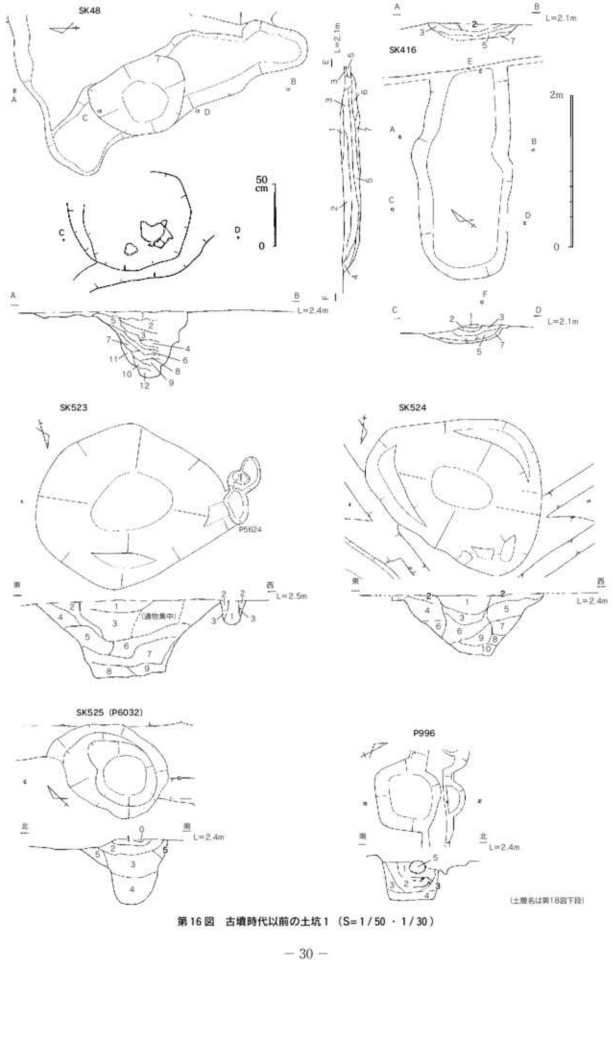
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明であるが、SD1165など周辺遺構の状況から弥生・古墳時代か。
［特記事項］なし

SK1110（遺構：第18図、図版17　遺物：第35図、図版27）
［地区］D３　　［調査年度］2003　　［グリッド］BD131　　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺0.9×長辺1.7m以上）、断面：逆台形（深0.3m）
［堆積］主に黒色シルトで構成される。断面中央の層２のみ地山質土との混層であり、下面が凹凸し上面が平坦なことから埋め戻しの整地土となる可能性がある。
［出土遺物］覆土中で、遺構の北東側に寄って高杯の杯部（44）、脚部（45）が出土している。接合部分の損耗が激しいため合致しないが、おそらく同一個体であり、東海系の小型高杯である。時期は古墳初である。
［遺構の時期］出土した土器から古墳時代初である。
［特記事項］遺構の南西側は段が付いて高くなり浅いまま伸びていくが、土取り溝に切られており全形は不明である。

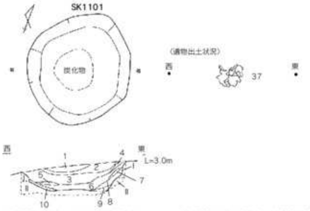
SK1111（遺構：第18図）
［地区］D３　　［調査年度］2003　　［グリッド］BD131　　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：不整楕円形（短径0.6×長径0.7m）、断面：皿状（深0.2m）
［堆積］黒色シルトの単層（層３）。層４～６は先行するSB1109の柱穴である。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明であるが、SB1109に後出する。
［特記事項］なし

SK1112（遺構：第18図）
［地区］D３　　［調査年度］2003　　［グリッド］BG132　　［遺構面標高］2.9m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺0.8×長辺1.1m）、断面：浅皿状（深0.15m）
［堆積］主に黒色シルトで構成される。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明であるが、周辺遺構の状況から弥生・古墳時代か。
［特記事項］なし

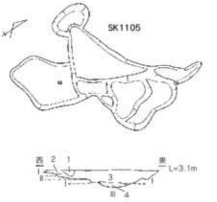
SK1113（遺構：第18図）
［地区］D３　　［調査年度］2003　　［グリッド］BF131　　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：不整形（径1.4m前後）、断面：浅皿状（深0.15m）
［堆積］上層黒色シルト（層２）、下層黄灰色シルト（層３・４）で構成される。
［出土遺物］時期がわかるものはない。
［遺構の時期］不明であるが、地震痕跡に切られており、それよりは古い。
［特記事項］浅く、底面が凹凸しており、何の遺構かよくわからない。



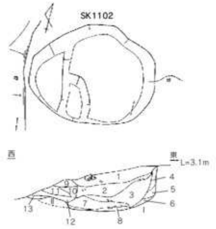
第16図　古墳時代以前の土坑１（S=1/50・1/30）



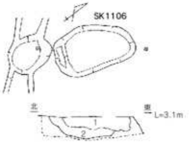
1　黒色粘土　乾いてしまいよく分からない、
　土器(布留系甕)1個体含む
2　灰色シルト　黒色粘土ブロック5%含む
3　灰色シルト　灰白色シルト10%含む
4　灰白色シルト　黒色粘土ブロック5%含む
5　灰色シルトと砂の混層(層3と層6の中間的色層)
6　灰色シルト　灰白色シルト30%含む
7　灰白色シルト　黒色粘土ブロック5%含む
8　灰色シルト　灰白色シルト30%含む、粘性低い
9　灰色粘土・灰白色シルト・黒色粘土の混層　炭化物層状
10　層9と同じ
地山Ⅰ　灰白色シルト　粘性低い
地山Ⅱ　灰白色砂



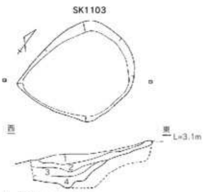
1　黒色粘土　赤みがかる
2　灰白色シルト　黒色粘土ブロック30%含む
4　黒色粘土　灰白色シルトブロック5%含む
5　黒色粘土　灰白色シルトブロック10%含む
地山Ⅰ　灰白色シルト
地山Ⅱ　黄橙色砂
地山Ⅲ　灰白色粘土



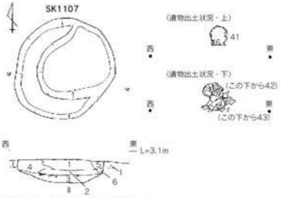
1　黒色粘土　灰白色シルト小ブロック・礫10%含む
2　黒色粘土　灰白色シルト小ブロック・礫10%含む
3　黒色粘土　灰白色シルト小ブロック・礫10%含む
4　黒色粘土　灰白色シルトブロック30%含む
5　黒色粘土　灰白色シルト小ブロック10%含む、粘性高い
6　黒色粘土　灰白色砂40%含む
7　黒色粘土　灰白色シルト小ブロック・礫10%含む
8　黒色粘土　灰白色砂30%含む、炭化物層状
9　黒色粘土　灰白色シルト大ブロック20%含む
10　黒色粘土　灰白色シルトブロック30%含む
11　灰白色シルト　黒色粘土大ブロック20%含む
12　黒色粘土　灰白色シルト大ブロック40%含む
13　黒色粘土　灰白色シルトブロック10%含む
地山Ⅰ　灰オリーブ色砂　5Y6/2
地山Ⅱ　灰オリーブ色粗砂・礫



1　褐灰色粘土　灰オリーブ色シルトブロック10%含む
2　オリーブ黄色シルト　褐灰色粘土ブロック10%含む、Fe成分含む
地山　灰オリーブ色シルト(灰色粘土が筋状に入り込む)
※　遺構内は木の根が伸びている、抜根痕か?

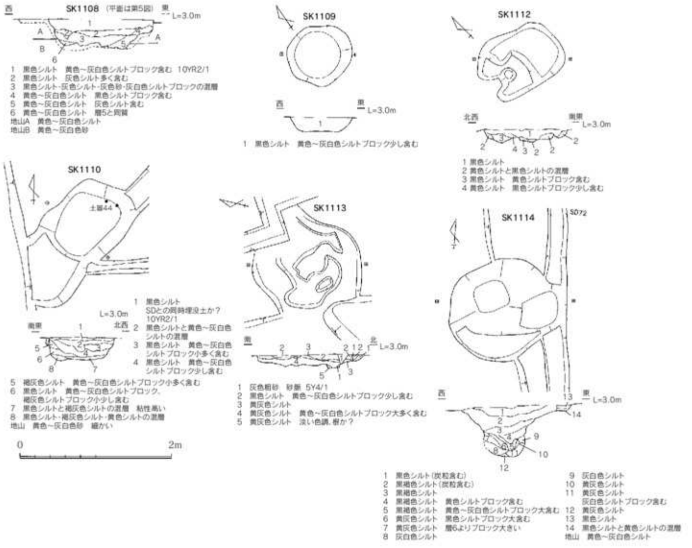


1　黒色粘土　ほとんど均一
2　灰色粘土　黒色粘土ブロック10%含む
3　灰色粘土　ほとんど均一
4　オリーブ黒色粘土　ほとんど均一、腐植質
地山　灰オリーブ色砂
※　層2～4＝地山か?周辺の低い土に広がる



1　黒色粘土　灰白色粘土ブロック20%含む
2　黒色粘土　灰白色粘土ブロック5%含む
3　黒色粘土　土器含む、灰白色粘土ブロック10%含む
4　灰白色粘土　黒色粘土層状に不規則に含む
5　灰白色粘土　黒色粘土ブロック20%含む
6　灰オリーブ色砂　黒色粘土ブロック10%含む
地山Ⅰ　灰白色粘土　黒色粘土ブロック10%斑状に含む
地山Ⅱ　灰オリーブ色砂

第17図　古墳時代以前の土坑2（S＝1／50）



(第16図土色)

P996

1 暗灰色シルト
2 暗灰褐色シルト
3 暗灰褐色シルト ベース土少量混じる
4 暗灰褐色シルト 層2より明るい
5 暗灰褐色シルト 最も暗い、土器内土

SK48

1 暗灰色粘土 しまりあり、地山粒微量、炭少し含む、SK34覆土
2 黒色粘土 しまりあり、炭多く含む(ざくざく)、地山粒ほとんどなし
3 黒色粘土 しまりあり、地山ブロック、炭多く含む
4 灰色粘土 しまりあり、地山粒、炭少し含む
5 灰色粘土 しまりあり、地山ブロック多く、炭少し含む
6 灰色粘土 しまりあり、地山粒多く、炭少し含む
7 灰黄色粘土 しまりあり、地山非常に多く、炭少し含む
8 黒色粘土 しまりあり、地山粒少し、炭非常に多く含む
9 黒色粘土 しまりあり、地山少し、炭多く含む
10 黒色粘土 しまりあり、地山微量、炭多く含む
11 灰黄色粘土 しまりあり、炭少し含む、地山ベース
12 黄色粘土 しまりあり、炭少し含む、地山ベース
※ 1~3=上層 4~7=中層 8~10=下層 11~12=最下層

SK523

1 黒褐色土 やや灰色がかる
2 黒灰褐色土 やや砂質ぎみ
3 黒褐色土 遺物層、特に北部で集中
4 黄灰白色砂 地山崩落土
5 灰白色粘砂 黄白色地山大ブロック含む
6 黒褐色粘質土 わずかに地山粒含む
7 黒灰色シルト 黒色層が帯状に1層入る
8 暗青灰色シルト 層9をブロック状に含む
9 黒色シルト

SK524

1 暗灰赤褐色土 地山粒わずかに含む、やや砂性
2 暗灰赤褐色土 層1より粘性有り、灰色強くなる
3 暗灰褐色土 黒色土ブロック含む
4 暗灰褐色土 地山ブロック大含む
5 暗灰褐色土 地山ブロック多く含む、黒色ブロック含む、やや砂性
6 暗灰褐色粘質土 地山・黒色小ブロック多量に含む
7 暗灰褐色粘質土 地山小ブロックわずかに含む
8 黒灰褐色粘質土
9 暗灰褐色シルト 殆どブロック含まない
10 暗灰褐色シルト 層9よりさらに水性化進む

SK525

1 黒色土 炭の集中層、0層は灰の集中
2 暗灰褐色粘質土
3 暗褐色粘質土 地山ブロックわずかに含む、炭化物粒含む
4 暗灰褐色シルト
5 暗褐色土 地山ブロックわずかに含む

P5624

1 灰褐色土
2 黒褐色土 SK525層3に似る
3 黄灰色粘砂

第18図 古墳時代以前の土坑3 (S=1/50)

SK1114（遺構：第18図、図版17　遺物：第35図、図版27）

［地区］D 3　　［調査年度］2003　　［グリッド］BF131　［遺構面標高］3.0m

［形状・規模］平面：不整円形（径1.4m前後）、断面：上縁が浅く広がる皿状（深0.65m）

［堆積］主に黒色～黒褐色シルト、底近くは黄灰色シルトと地山質土で構成される。底面では自然木が出土しているが、地山に含まれるものである。層 8 以下は自然木に接する位置にあり、影響を受けて変質している可能性があり、本来は地山であるかもしれない。

［出土遺物］覆土から甕の底部（46）が出土している。弥生中期の条痕文系土器である。

［遺構の時期］不明であるが、SD1172（層13・14）を切って掘削されており、それよりは新しい。

［特記事項］弥生時代中期の土器が出土しているが、周辺にこの時期の遺構は確認されておらず、先行するSD1172がその時期まで遡るとは考えにくいことから、遺構の時期を反映するものではない。

第 5 節　溝

SD 3・12（遺構：第22図、図版22　遺物：第36図、図版28）

［地区］B 8、B10、B11　［調査年度］1999、2000　［グリッド］AH114、AH115、AI115

［遺構面標高］2.3m　［幅］0.5～0.9m　［深さ］0.05～0.1m　［断面形］浅皿状

［堆積］一部しか記録がないが、暗褐色土の単層か。

［出土遺物］土器が出土している。鉢（第36図58）であり、時期を比定する特徴に乏しいが、弥生・古墳時代である。

［特記事項］平面が径15mほどの半環状をなし、建物周溝の可能性が高いが、古代の建物跡との錯綜が著しいため、柱穴を復元できていない。

SD73（遺構：第22図、図版22）

［地区］B 6　［調査年度］2000　［グリッド］AI107、AI108、AJ107、AJ108

［遺構面標高］2.3m　［幅］0.2～0.3m　［深さ］0.05～0.15m　［断面形］皿状

［堆積］黒色粘土、暗灰色粘土

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［特記事項］B 6 区に存在する半環状ないし、L字状の溝を指す。調査当初は特定されていたようであるが、途中で不明確になってしまっている。建物周溝の可能性が高いが、時期・性格は不明である。

SD401・403（遺構：第22図　遺物：第36図、図版28）

［地区］B 7　［調査年度］2001　［グリッド］T108、U107、U108　［遺構面標高］1.8m

［幅］SD401：0.3m、SD403：0.3～0.5m　［深さ］SD401：0.25m、SD403：0.05～0.1m

［延長］SD401：5.7m、SD403：15m以上　［断面形］SD401：皿状、SD403：浅皿状

［堆積］SD401：主に暗褐色粘質土、SD403：暗灰色粘質土の単層

［出土遺物］SD403から古墳時代後期の須恵器杯身（59）が出土している。

［特記事項］北東－南西方向に伸びる平行溝であり、間隔は約 9 mを測る。性格は不明であるが、古墳時代後期の可能性がある唯一の遺構となる。

SD115・116・543・544・805・806・812・813・1006・1007

（遺構：第19図・第20図、図版20・図版21　遺物：第36図・第40図、図版28）

［地区］B10、C１、C２、C４、C６、C７　［調査年度］2000～2002

［グリッド］AI114、AJ113、AJ114、AK114、AL114、AM114、AM115、AN115、AO115、AP115、AQ115、AR115、AS115、AS116、AT116、AT117、AU116、AU117、AV117、AV118、AW117、AW118、AX117、AX118、AY118、AY119、AZ118、AZ119

［遺構面標高］2.3～2.5m　［幅］１～２m　［深さ］0.1～0.2m　［延長］200m以上

［断面形］浅皿状　［堆積］全般に灰色系の砂っぽい土壌で構成される。

［出土遺物］古墳時代前期の土器が散発的に出土しており、遺構の時期を示すものと考えている。大型壺（47）、東海系高杯（48）、小型器台（49）、甕（50・51）があり、甕は在地系、それ以外の器種は外来系となる。(47）は図に表現されていないが、有段口縁帯に円形の剥落痕と黒斑が観察でき、大型の円形浮文が貼り付けられていた装飾壺と推定できる。延長の長い溝であり、時期を限定できるかどうかは問題であるが、古墳初～前期前半に位置付けられる。他には、SD20から磨製石鏃（第40図108)、SD806から打製石鏃（104・107）が出土しているが、遺構の時期を示すものではない

［特記事項］わずかに蛇行しながら北西－南東方向に伸びる平行溝であり、平行する範囲を一連の遺構と認識した。調査区間で番号が異なっており、平行する範囲での対応関係をまず示しておく。

東側の溝（北から南へ）：SD115―SD544―SD1006―SD806－SD812

西側の溝（北から南へ）：SD116―SD1008－SD543―SD1007―SD805－SD813

溝の間隔は溝の内側で約３mを測る部分が多いが、数値はやや前後する。北端は東側の溝がB８区でSD19・20に分岐し、さらにSD19はB７区でSD448・449に分岐し、調査区外へ伸びていく。西側の溝はB８区でSD10となりより西へ方向を変えて伸び、大野庄用水に切られて以降は不明となる。南端はC７区で後世の削平により一端途切れるが、SD812・813に続き、大野庄用水に切られて以降は不明である。また、C２区ではこれらと重複する古代建物群の調査が優先され、平行溝にはほとんど調査が及んでいない。土層ではC６区のSD1006でのみ古代の溝と先後関係が逆転するが、土質も逆転しており、写真でもこのようには判断できないので、おそらく担当者の錯誤であろう。

B10区での初検出以来、並走する溝と認識されてきたが、C７区では特に東側の溝が複数の溝の重なりであることが確認できた。SD806はa・b・cの３条の溝であり、おそらくはb→c→aと移行することが推定できる。連続するはずのSD812でもa・bの２条が検出されており、東側の溝は掘り直されている可能性が高い。また、C２区では東側を並走するSD503も関連する遺構の可能性がある。遺構の性格は不明であるが、古墳時代前期の土器が出土しており、少なくとも平行する部分についてはその時期の道路的な機能を推定しておきたい。その場合、遺構は道路の両側側溝となる。

SD453・461・504・506・541・542（遺構：第22図）

［地区］B12、C１～C４、C６　［調査年度］2001、2002

［グリッド］AJ119、AK118、AK119、AK120、AL117、AL118、AL119、AM117、AN116、AN117、AO116、AP115、AQ114、AR113、AR114、AS114、AS115、AT115

［遺構面標高］2.1～2.5m　［幅］0.8～1.0m　［深さ］0.15～0.5m　［延長］120m以上

［断面形］浅皿状

［堆積］全般に灰色系の土壌で構成される。C１区では記録されていない。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［特記事項］北東－南東方向に伸びる溝群であり、南側はC１区で大きく蛇行する。両端は途切れており不明確である。調査区間で番号が異なっており、確実と思われる対応関係は北から南へ向かってSD453―SD504―SD541であり、北側ではSD461やSD506が、南側ではSD542が並走するが、SD115等のように整った配置ではない。他遺構との関係では、SD518や、古代の区画溝SD505には切られており、それよりは古くなる。SD105・SD106やSD503との先後関係は不明である。出土遺物にも乏しく、遺構の時期、性格とも不明である。

SD519・529・810・811・1003（遺構：第21図、図版22）

［地区］C３、C６、C７　［調査年度］2001、2002

［グリッド］AP117、AQ118、AQ119、AQ120、AR119、AS119、AT118、AT119、AU118、AV118、AW118、AW119、AX119、AY119、AY120、AZ120

［遺構面標高］2.4～2.6m　［幅］0.7～1.0m　［深さ］0.1～0.25m　［延長］100m以上

［断面形］浅皿状、SD519とSD529は底面に小穴が連なる。

［堆積］全般に灰色系の土壌で構成される。

［出土遺物］時期がわかるものはない。

［特記事項］北側は北東－南西方向に伸びるが、C６区でSD1003が対応するものとすれば、南側は北西－南東に向きが変わっている。北端は調査区外へ伸びており、交差するSD518が新しい。南端はSD811が分岐するが、SD810とともに近代水路に切られている。出土遺物にも乏しく、遺構の時期、性格とも不明であるが、SD519とSD529については道路の可能性がある。その場合は、前述のSD115・116等とは異なり、遺構自体が道路部分となる。

SD1101（遺構：第23図、図版18・図版19　遺物：第36図、図版28）

［地区］D１、D３　［調査年度］2002、2003

［グリッド］BJ129、BJ130、BK130、BL130、BL131、BM131、BM132、BN132

［遺構面標高］3.0～3.1m　［幅］0.5～0.6m　［深さ］0.23m前後　［延長］55m以上

［断面形］皿状

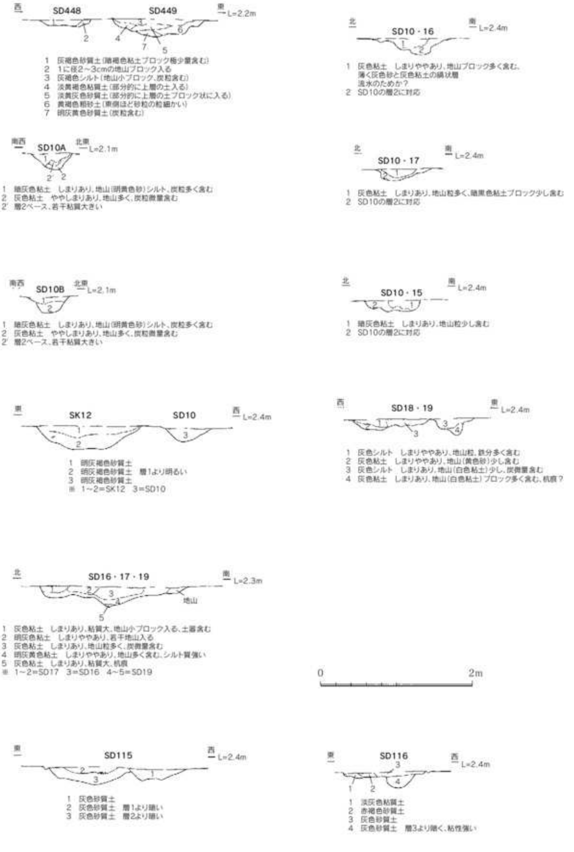
［堆積］灰色粘土～シルトで構成される。地山が砂となる南側では、その影響か黒色となる。

［出土遺物］土器が出土している。北側では底面から浮いた状態であるが、比較的まとまって出土している。布留系甕（52）、くの字口縁甕（53）、広口壺（54）、小型土器（55）がある。時期は布留系甕の形態から古墳前期前半を中心に考えたい。

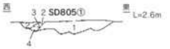
［特記事項］北西－南東方向に伸びる直線的な溝である。幅・深さともほぼ一定しており、整った形状の遺構である。ただし、南側では削平が著しかったようであり、BL131以南は徐々に浅く幅も狭くなり、BN132以南では途切れてしまうが、調査区南端の壁面で確認できたことから、さらに調査区外へ伸びているものと判断できる。北側も調査区外へ伸びている。遺構の時期は、出土土器から弥生時代末から古墳時代前期であり、周辺のほとんどの遺構と同時期である。先後関係では、NR1101の埋没後に掘削されている。遺構の性格については、溝以西は地形が下降しており、ほとんどの遺構は溝以東で検出されていることから、地形の変換点に設けられた区画溝と考えられる。

SD1165・1167（遺構：第23図、図版22　遺物：第36図、図版28）

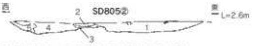
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BD131、BD132　［遺構面標高］2.9m



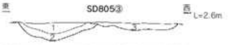
第19図 古墳時代以前の溝1（S＝1／50）



1　褐灰色シルト＋暗褐色シルト＋明褐色シルト（黒色炭の斑点が1ヶ所見られる）
2　暗褐色シルトをベース、褐灰色シルト、明褐色、灰白色混じりのシルトが混入
3　褐灰色シルトをベース、明赤褐色シルトが少量混入
4　灰白色シルトをベース、暗褐色シルト、明褐色シルトが混入



1　暗褐色シルトをベース、褐灰色シルト、明褐色シルトが混入、
　淡黄色、明赤褐色混じりのシルトが部分的に見られる
2　暗褐色シルトをベース、明褐色シルトが混入
3　黒褐色シルト
4　褐灰色シルトをベース、明褐色シルトが混入
5　褐灰色シルト＋明褐色シルト＋淡黄色シルト
※　1～3＝SD804　4～5＝SD805

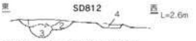


1　褐灰色シルトをベース、暗灰色シルト、明褐色シルトが混入
2　暗褐色シルトをベース、褐灰色シルト、明褐色シルトが混入
3　褐灰色シルトをベース、明褐色シルトが混入（明赤褐色シルトが微量混入）
※　1～2＝SD805　3＝SD804

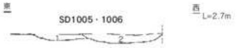
1　暗褐色シルト＋灰色シルト（明褐色シルトが少量混入）

1　褐灰色シルトをベース、明赤褐色シルトが少量混入
2　褐灰色シルト＋灰色シルト＋明褐色シルト（暗褐色シルト、黒色シルトが少量混入）

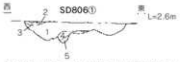
1　暗褐色シルトをベース、明黄褐色砂、淡黄色シルトが少量混入
2　暗褐色シルトをベース、灰色シルト、褐色シルトが混入
3　淡黄色シルトをベース、橙色シルト、青灰色シルト、暗褐色シルトが混入
4　暗褐色シルト（炭が少量混入）
5　暗褐色シルト＋明黄褐色砂
※　1～2＝SD805　4～5＝SX806



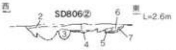
1　灰色シルトをベース、明褐色シルト、灰白色、
　橙色混じりのブロック（シルト質）が混入（新期の溝）
2　灰色シルト＋明褐色シルト（ともに1の土よりも粘質がある）
3　灰色シルトをベース、明褐色シルト（細帯状）が混入
　（1、2を斜め上から切り込む、新期の穴杭か柵）
4　3と同じ（3に比べてさらっとしている）
※　2＝SD812b　4＝SD812a



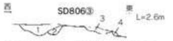
1　暗灰褐色土：粘性あり
2　黒褐色粘質土：粘性ややあり



1　灰色シルトをベース、暗褐色シルト、明赤褐色シルトが混入
2　暗褐色シルトをベース、灰色シルト、明赤褐色シルトが混入
　（黒褐色シルトが斑点状に一部見られる）
3　灰色シルト＋明褐色シルト＋灰白色シルト
4　灰色シルト＋明褐色シルト
5　灰色砂＋明褐色砂



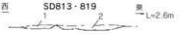
1　灰色シルトをベース、暗褐色シルト、明赤褐色シルトが混入
2　暗褐色シルト＋褐灰色シルト＋明赤褐色シルト
3　灰色砂＋褐色砂
4　灰色砂をベース、褐色砂、淡黄色シルトが少量混入
5　灰色シルトをベース、明赤褐色シルトが少量混入
6　淡黄色・明褐色混じりの粘土
7　灰色シルト＋淡黄色・明褐色混じりの粘土



1　灰色シルトをベース、明赤褐色シルトが混入
2　灰色砂＋明赤褐色砂
3　灰色シルトをベース、明赤褐色シルトが少量混入
4　灰色シルトをベース、暗褐色シルト、明赤褐色シルト、黒褐色シルトが混入

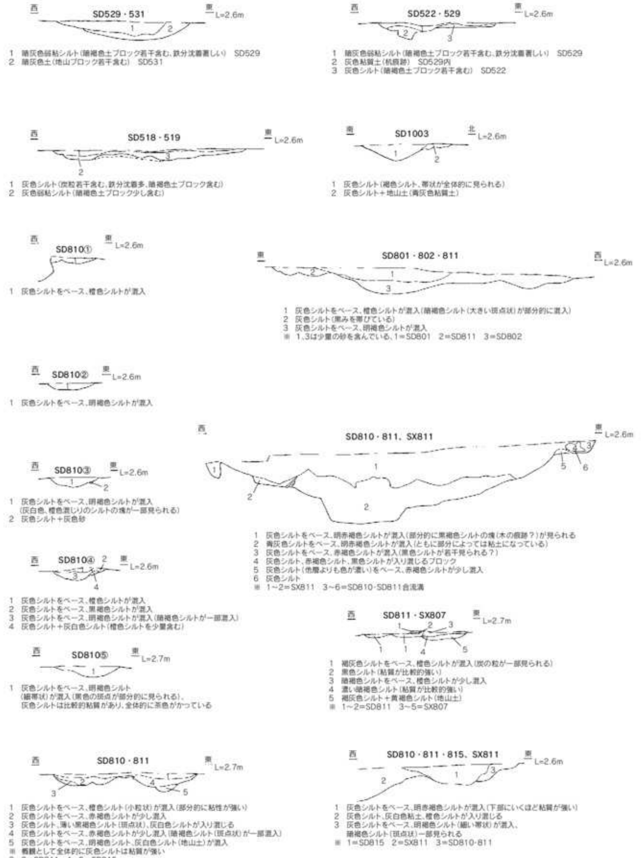
1　暗褐色シルトをベース、淡黄色シルトが斑点状に一部混入
2　灰色シルトをベース、明赤褐色シルト、灰白色シルトが混入
3　暗褐色シルト＋黄褐色砂
4　灰色シルトをベース、明赤褐色、淡黄色混じりのシルトが混入
5　暗褐色シルト＋黒褐色シルト

0　　　　2m

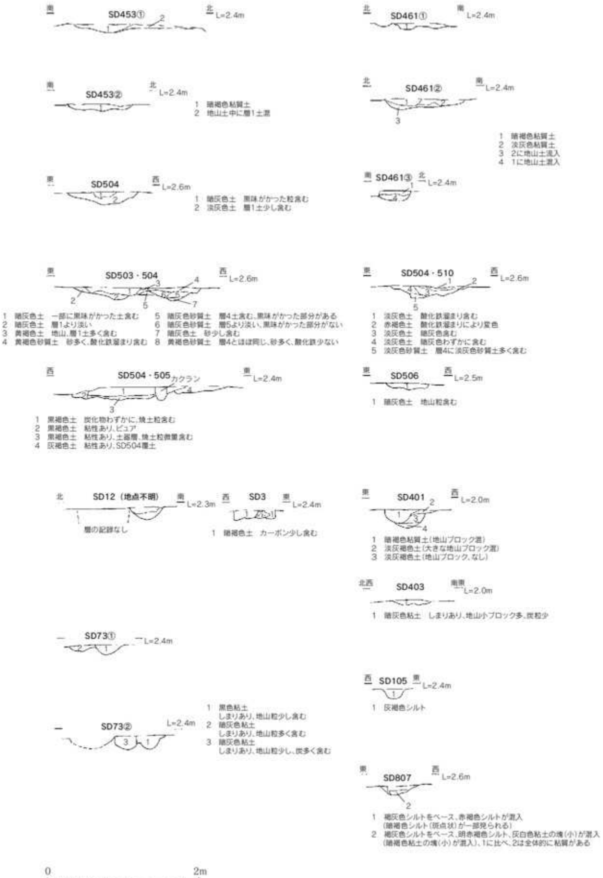


1　褐灰色シルトをベース、薄い黒褐色シルト（小斑点状）、橙色シルトが混入
2　褐灰色シルトをベース、褐色シルトが少量混入
　（全体的に茶色がかっており、非常にさらさらしている）
※　1＝SD819　2＝SD813

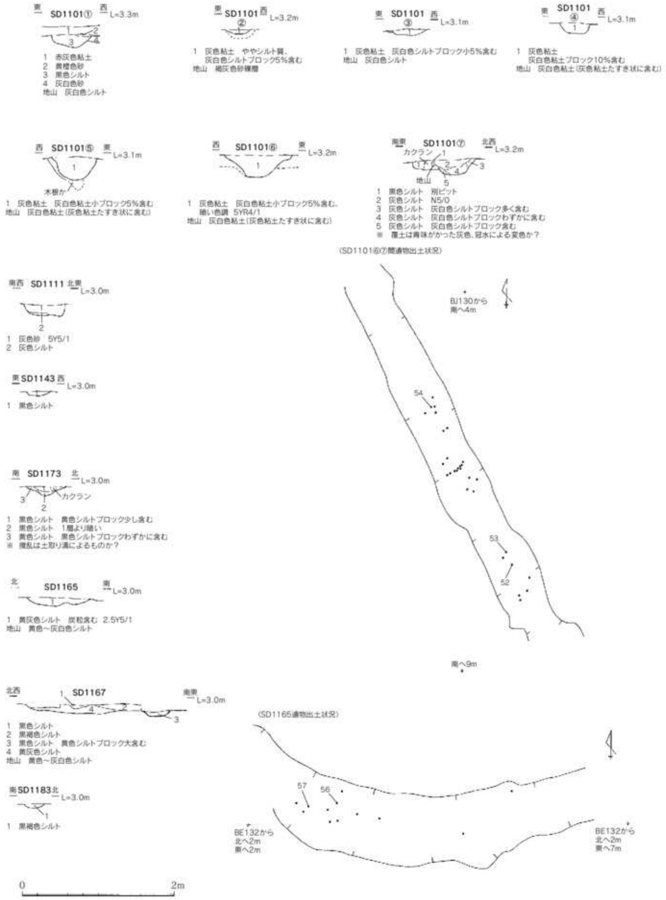
第 20 図　古墳時代以前の溝 2 （S＝1／50）



第21図 古墳時代以前の溝3 (S=1/50)



第 22 図　古墳時代以前の溝 4 （S＝1／50）



第23図 古墳時代以前の溝5(S=1/50)

［幅］0.8～1.0m　［深さ］0.1m　［断面形］浅皿状
［堆積］SX1114の下層と一体であり、黄灰色シルトの単層である。
［出土遺物］古墳時代前期の土器が出土している。図化できたのは小型土器（56・57）のみである。小型丸底壺（56）が定型化していないことから古墳前期前半に位置付けたい。
［特記事項］土取り溝で東西に分断されているが、同一の溝であり、延長は調査区外へ伸びる。建物周溝の可能性があり、調査区の拡張を協議した。トレンチで確認調査を行った結果、建物跡という確証が得られなかったため、調査区は拡張されなかった。

第６節　その他

SX812（遺構：第24図、図版23　遺物：第37図、図版29）
［地区］C７　［調査年度］2002　［グリッド］AZ118、AZ119　［遺構面標高］2.4m
［形状・規模］平面：不整形（径1.8～2.2m）、断面：皿状（深0.5m）
［堆積］全体に淡い色調で炭粒を含む覆土が特徴的である。概ねレンズ状堆積をなし、上層シルトから下層砂へ移行する。
［出土遺物］層６を中心に土器が出土している。壺（第37図60）は弥生中期の条痕文系土器、鉢（61）と底部（62・63）は櫛描文系土器である。条痕文系土器は中期前半、櫛描文系土器は中期後半の時期と推定され、両者は共存するものではない。
［特記事項］遺構の南西部は大野庄用水に切られており、全形は不明である。弥生時代中期の穴が複合したものと考えられるが、地山との識別が困難な覆土であり、整った形状としては捉えられなかった。風倒木かもしれない。

SX1113（遺構：第24図、図版23　遺物：第37図・第40図、図版29・図版30）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BD129、BE129　［遺構面標高］2.9m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺2.7×長辺3.9m）、断面：箱形（深0.3m）
［堆積］ほぼ黒色シルトの単層である。
［出土遺物］出土遺物は少ないが、土器（64・65）、管玉未製品（第40図115）が出土している。土器は東海系S字口縁甕（64）、布留系甕（65）がある。ともに小破片であり、共存するかどうか確実ではない。時期は古墳初～前期前半である。（64）は愛知県廻間遺跡の赤塚分類B類に比定しておく。
［特記事項］竪穴状の遺構である。南半が最も低く、北半は一段高くなり（深0.1m）、北東側にはさらに浅くなった竪穴状遺構SX1112（辺2.0m×深0.05m）が重複する。それぞれの底面は比較的平坦である。各部分の先後関係については、土層では区別できなかった。管玉未製品が出土しているが、遺構の性格は不明であり、玉生産との関係も不明である。なお、地震痕跡に切られており、それよりは古い遺構となる。

SX1114（遺構：第24図・第25図、図版22・図版23　遺物：第37図、図版29）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BC130、BC131、BD131
［遺構面標高］2.9m　［形状・規模］堆積層であり不明確
［堆積］上層黒色シルト（層１）、下層黄灰色シルト（層２）である。上層は重複するSD1144・1161・1166覆土と、下層はSD1165・1167覆土と共通しており、各遺構を被覆している。

［出土遺物］層２を中心として土器が出土している。布留系甕（66）、山陰系甕（67）、器台（68）がある。甕は古墳前期前半に位置付けておくが、かなり新しい部分である。器台は時期不明である。位置的には、後に検出されたSD1165・1167に伴う可能性が高い。
［特記事項］約50㎡（１グリッドの１/２）の範囲で検出された層厚0.1m前後の遺物包含層である。層１を掘削後に同覆土のSD1144・1161・1166を検出し、層２を掘削後にSD1165・1167を検出しており、この部分については遺構面２面が存在したことになる。この地点はD３区の北東端にあたり、拡張トレンチでも同様に遺物包含層が確認されている。周囲よりわずかに地形が下降していたことから、遺物包含層が残ったものと推定でき、遺跡全体の本来の姿に近い可能性がある。

SX1116（遺構：第24図、図版23　遺物：第37図、図版29）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BI132　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：溝状（幅0.8×長2.6m）、断面：皿状（深0.15m）
［堆積］主に黒色シルトと地山質土で構成される。
［出土遺物］土器が出土している。布留系甕（69）と畿内系高杯（70）がある。古墳前期前半である。
［特記事項］SB1103の柱列外側に沿うように位置するが、柱穴と先後関係があり、時期が異なる。SB1103よりも後出であり、出土土器の時期ではむしろ近接するSI1104と同じである。

SX1118（遺構：第24図）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BI130、BI131　［遺構面標高］3.1m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺1.0×長辺3.1m）、断面：浅皿状（深0.05m）
［堆積］黒色シルトの単層である。削平、攪乱が著しい。
［出土遺物］土器が出土している。小破片で図化しなかったが、弥生末～古墳初の時期である。
［特記事項］SI1104の内部と重複しているが、出土土器で見る限りはSX1118が古い。

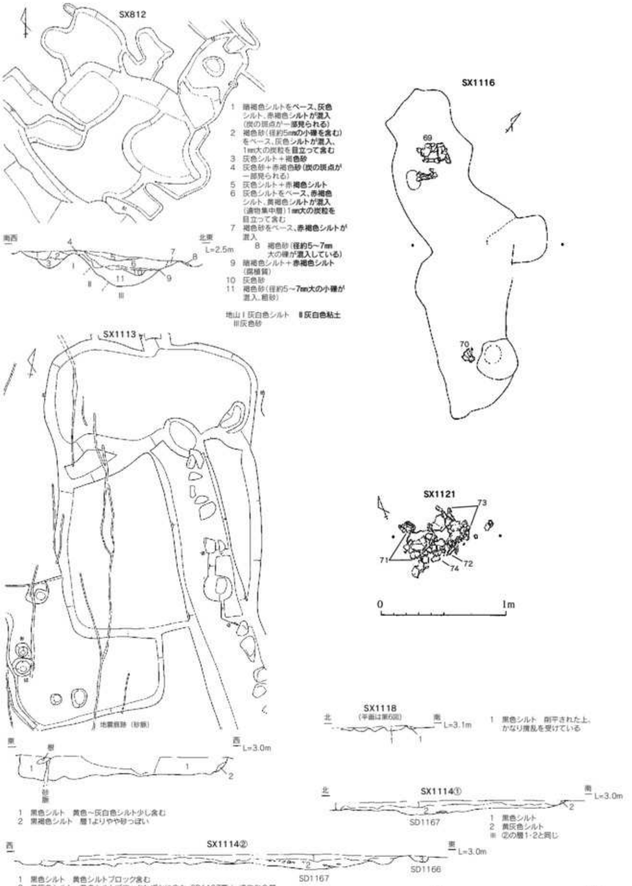
SX1121（遺構：第24図、図版23　遺物：第37図、図版29）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BH131　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］遺物集中（範囲0.4×0.6m）
［堆積］黒色シルトに包含されており、この層は調査区外へ伸びている。
［出土遺物］土器が集中して出土している。布留系甕（71・72）とその影響下にある甕（73）、くの字口縁甕（74）がある。時期は古墳前期前半であり、その中でも新しい。
［特記事項］調査区壁面で検出し、可能な限り拡張して調査した結果、遺物集中部分についてはほぼ完掘できたものと判断した。ほぼ同時期の遺物を出土しているSI1104周溝SD1177の延長部分となる可能性はあるが、開口部との関係では微妙な位置となる。また、南東にはやはりほぼ同時期の遺物を出土しているSX1116があり、その延長上にも位置していることから、なおさら断定はできない。

P11115（遺構：第25図、図版23　遺物：第38図、図版29）
［地区］D３　［調査年度］2003　［グリッド］BI132　［遺構面標高］3.0m
［形状・規模］平面：略長方形（短辺0.27×長辺0.35×深0.35m）
［堆積］黒色シルト、狭い穴の中で遺物がまとまって出土したため断面を観察できなかった。
［出土遺物］土器が出土している。プラン内の柱部分底から壷（76）、同じく柱部分上面から小型丸底

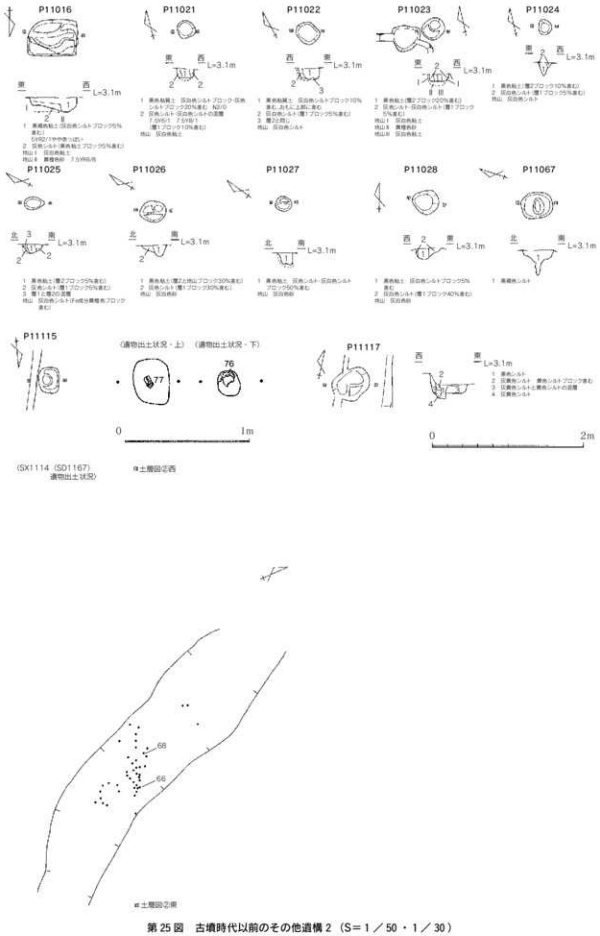
壺（77）が出土している。時期は古墳前期後半である。
［特記事項］プラン内に柱部分と推定できる穴があり、底と上面から壺が出土している。おそらくは建物を構成する柱穴と推定できるが、調査区の端で検出されたため、配置を把握できなかった。土器は柱の抜き取り後に、二回に分けて入れられたものであり、儀礼の一種であろう。

NR1101（遺構：第26図、図版24）
［地区］D１　［調査年度］2002
［グリッド］BM130、BM131、BM132、BM133、BN130、BN131、BN132、BN133
［遺構面標高］3.0m　［形状・規模］幅15m以上×深0.6m以上×延長32m以上
［堆積］砂層が主で、礫層を交える河川の洪水堆積である。上面は削平されているが、最終的には粘土（①トレンチ層１、②トレレンチ層１）で安定的に埋没したものと推定できる。③トレンチでは木質層による堆積層の分断（層３）が確認され、立木痕と推定される。②トレンチでは下位の砂層（層13）が地山の下に入り込んでおり、さらに古い河川が存在するようである。
［出土遺物］出土していない。
［特記事項］蛇行する河川跡である。調査区内では南東から北西へ抜けており、地形的にもその方向に流下するものと推定される。河川が形成された状況は不明であるが、大規模な河川が砂礫で埋没した後は、南側に寄って幅６～７m程度の規模に縮小し、埋没した北側肩部に井戸、土坑、溝が作られたようである。よって、遺構の変遷は大規模な河川が存在した古段階と、河川が縮小して別の遺構が進出した新段階に区分できる。遺構の時期は、新段階については埋没砂を切り込んでいる土坑SK1101や溝SD1101の出土土器から、弥生時代末～古墳時代前期に比定できるが、古段階についてはそれ以前としか表現できない。なお、遺跡の南東200m先に位置する藤江C遺跡でも河川跡が検出されており、方向的にはその延長となる可能性がある。

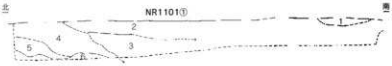
その他出土遺物（第38図～第40図、図版29・図版30）
その他穴から土器が出土している。主には甕（75・79）、小型土器（78）がある。時期は、（78）は不明であるが、他は古墳初～前期前半であろう。
また、新しい時期の遺構や、遺構外からも遺物が出土しており、以下に一括する。
土器・土製品は縄文後期後葉の井口式に位置付けられる深鉢（第38図80）、弥生後期の壺か器台（81）、同様な時期の有孔土玉（82）、古墳中期の土師器高杯（83）、古墳後期の須恵器杯蓋（84）、同じくハソウ（85）がある。有孔土玉はD３区遺構検出面でも１点出土している。他地区でも出土しているかもしれないが把握できていない。
石器・石製品は打製石斧（第39図86～90）、磨製石斧（91・92）、打製石庖丁（93）、すり石類（95・96）、用途不明穿孔品（97）、打製石鏃（第40図98～103・105・106）、打製石錐（109）、楔と推定される剥片（110～112）、管玉石材剥片（113）、管玉未成品（114・116・119・120）、管玉成品（122・123）などがある。時期は、乳棒状で未研磨の磨製石斧（91）、小型両刃の磨製石斧（92）、凹基で珪質石材の石鏃（100・102）は縄文時代、石庖丁（93）、平基で細身の石鏃（103・105）、硬質濃緑色で細身の管玉（122）が弥生時代、軟質淡緑色で太身の管玉（1232）とその未成品（114・116・119・120）が古墳時代となる可能性が高い。その他は、縄文時代と弥生時代が混在しており、特定することは難しい。



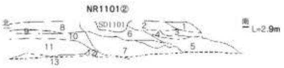
第24図 古墳時代以前のその他遺構1（S＝1／50・1／30）



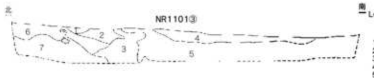
第25図　古墳時代以前のその他遺構2（S＝1／50・1／30）



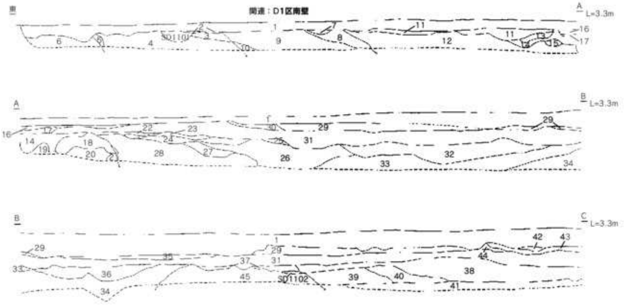
1　灰白色粘土　灰色粘土ブロック5%含む
2　褐灰色砂　南側少し砂礫層現れる？硬くしまる
3　褐灰色砂　層状に砂礫層含む、Fe成分多く含む
4　灰白色シルト　灰色シルトブロック5%含む
5　灰白色シルト　粘性低く、砂質
6　灰オリーブ色粘土　腐植した木を点々と含む

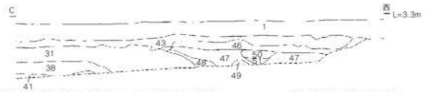


1　灰白色粘土
2　褐灰色砂　灰白色粘土ブロック5%含む
3　褐灰色砂　層2より砂が細かい
4　褐灰色シルト　粘性低く、砂っぽい
5　砂礫
6　褐灰色砂
7　褐灰色砂　Fe成分多く黄色味強い、一部礫が層状に入る
8　灰白色粘土　灰色粘土ブロック5%含む
9　灰白色シルト　粘性低く、砂っぽい
10　灰白色シルト　粘性高く、粘土っぽい
11　灰白色粘土・シルト・砂の混層
12　層11と似るが、灰オリーブがかった色調
13　明黄褐色砂と灰オリーブ色粘土の混層　灰オリーブ色粘土は腐植した木が変化したものか？



1　黄灰色砂
2　黄灰色砂　層1よりやや粗い
3　青灰色シルト　粘性高い、腐植した木を含む
4　明黄褐色砂　灰色シルト・黒色粘土・腐植した木を層状に含む
5　明黄褐色砂　灰色シルトを層状に多く含む
6　オリーブ灰色シルト　南半では青灰色シルトに変化
7　青灰色粘土　腐植した木含む
※　層1～5＝NR1101、層6～7＝ベース、層3が倒木で分断している

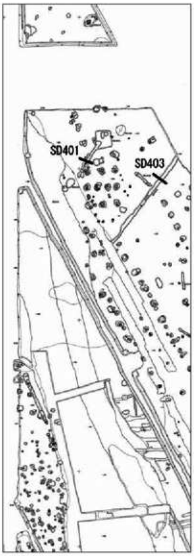




1　灰色粘土　Fe成分多く含む、耕作土・整地土か？
2　黄橙色砂
3　褐色砂
4　灰白色粘土　Fe成分流れている
5　褐色砂　硬くしまる
6　褐色砂　礫含む
7　褐色砂
8　灰白色粘土
9　褐灰色砂　粒子細かい、細砂か？
10　砂礫層
11　黄橙色粘土　灰白色粘土にFe成分が多く含まれる、褐色粘土ブロック40%含む
12　褐灰色砂
13　褐灰色砂　灰白色粘土ブロック40%含む
14　褐灰色砂
15　砂礫層
16　黄橙色粘土　灰白色粘土にFe成分が多く含まれる、褐色粘土ブロック20%含む
17　黄橙色粘土　灰白色粘土にFe成分が多く含まれる、褐色粘土ブロック40%含む
18　砂礫層
19　砂礫層　黄橙色、層18より礫小粒、草根がはびこっている、20が変質したものか？
20　砂礫層　灰色、層18より礫小粒
21　灰白色粘土　粘性低い
22　灰色砂　礫20%含む
23　灰色砂　粒子細かい
24　砂礫層
25　褐色砂
26　灰白色シルト　砂40%含む
27　灰色砂　硬くしまる
28　褐灰色砂
29　灰白色粘土　灰色粘土ブロック40%含む
30　灰色粘土
31　灰色粘土　層30より青味がかる、旧耕作土か？
32　褐灰色砂
33　灰色砂　層34との境に一部砂礫層あり
34　灰色砂
35　黄橙色砂礫　角礫含む、整地土・古代以降のベースか？
36　褐灰色砂・灰色粘土・砂礫の混層
37　褐色砂礫
38　黄橙色粘土
39　灰オリーブ色粘土
40　灰オリーブ色粘土　層39よりFe成分多く含む
41　灰色粘土　上面にFe成分沈着
42　灰色粘土
43　黒色粘土　灰白色粘土ブロック40%含む
44　灰色粘土
45　灰オリーブ色粘土　よくしまり、Fe成分流れる、最も古いベース
46　灰色粘土
47　灰色粘土　層46より暗い色調
48　褐色砂
49　灰色粘土　Fe成分多く含む、しまり悪い、木根か？
50　暗青灰色粘土
51　暗青灰色粘土　砂30%含む
※　層47～51は最も新しい時期の川、層31の耕作に対応したものか？

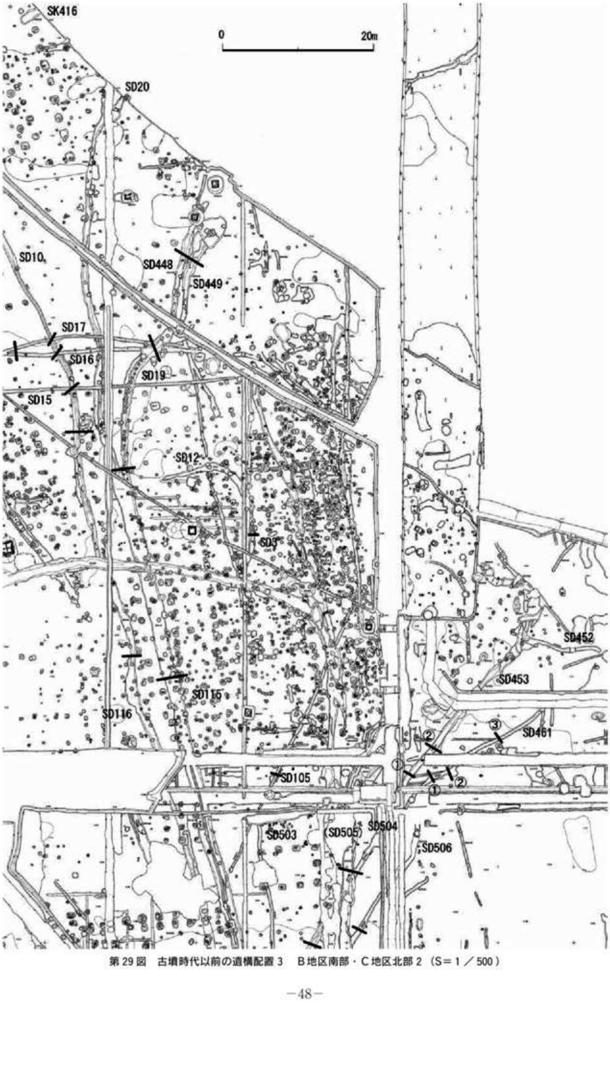
0　2m

第26図　古墳時代以前のその他遺構3（S＝1／60）

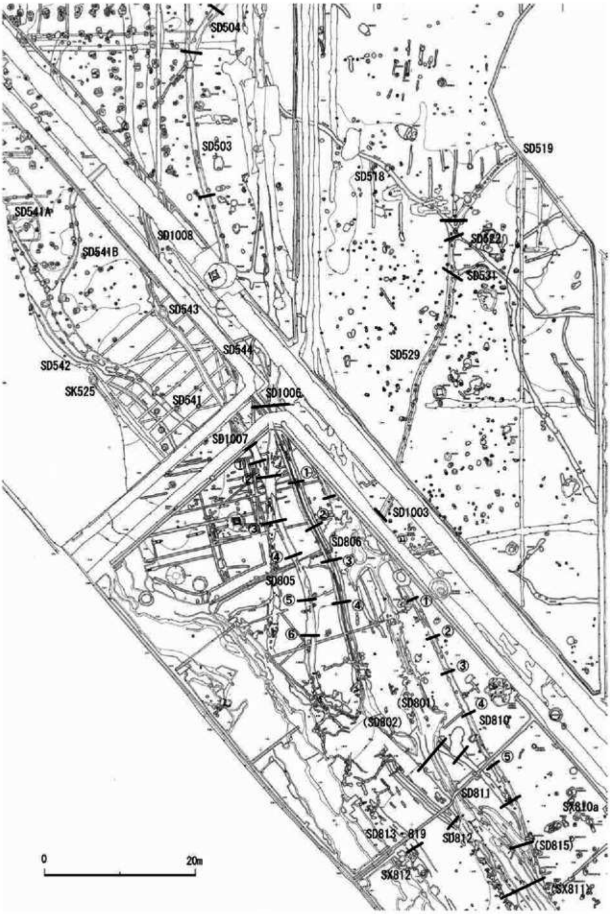


第 27 図　古墳時代以前の遺構配置 1
B 地区北部（S＝1／500）

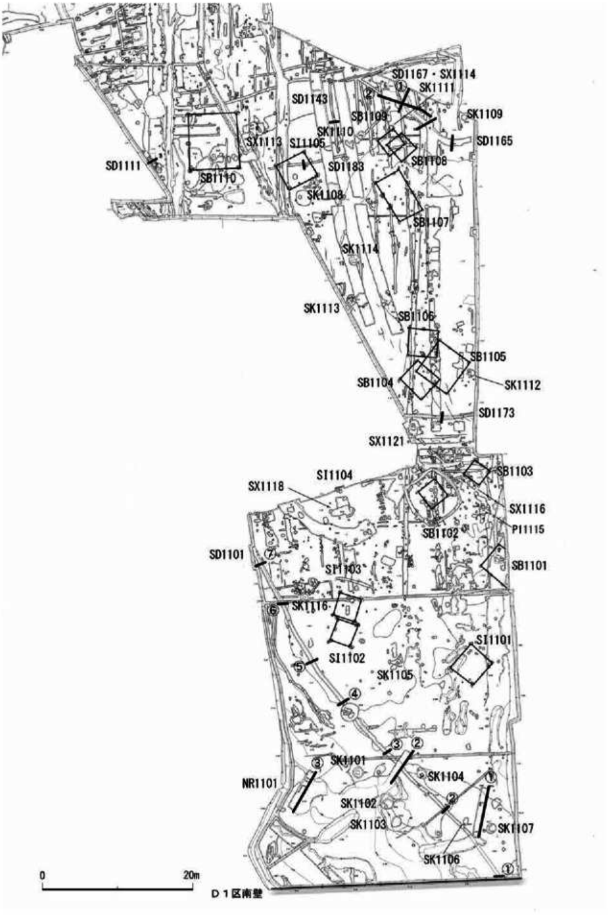
第 28 図　古墳時代以前の遺構配置 2
B 地区南部・C 地区北部 1（S＝1／500）



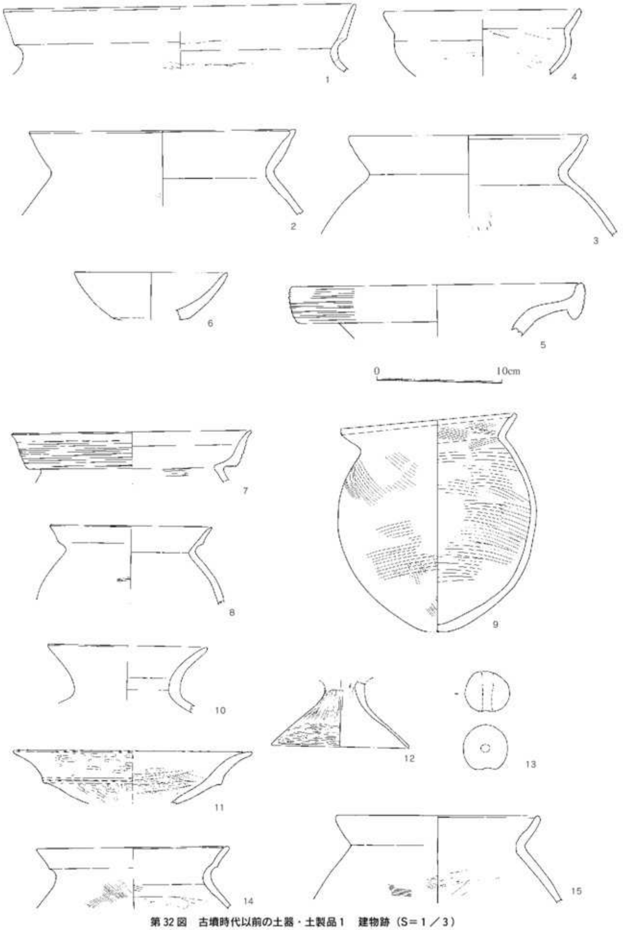
第 29 図　古墳時代以前の遺構配置 3　B地区南部・C地区北部 2（S＝1／500）



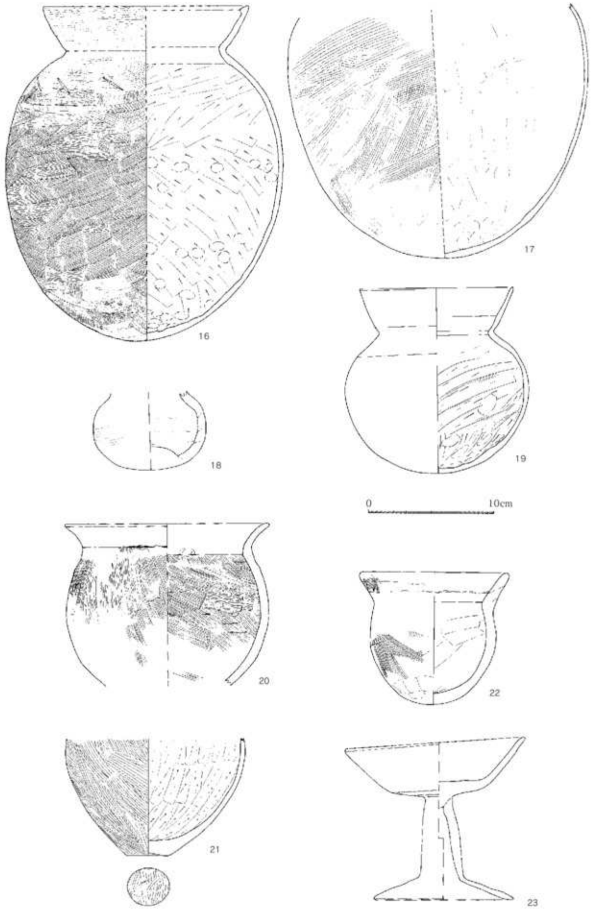
第30図　古墳時代以前の遺構配置4　C地区（S＝1／500）



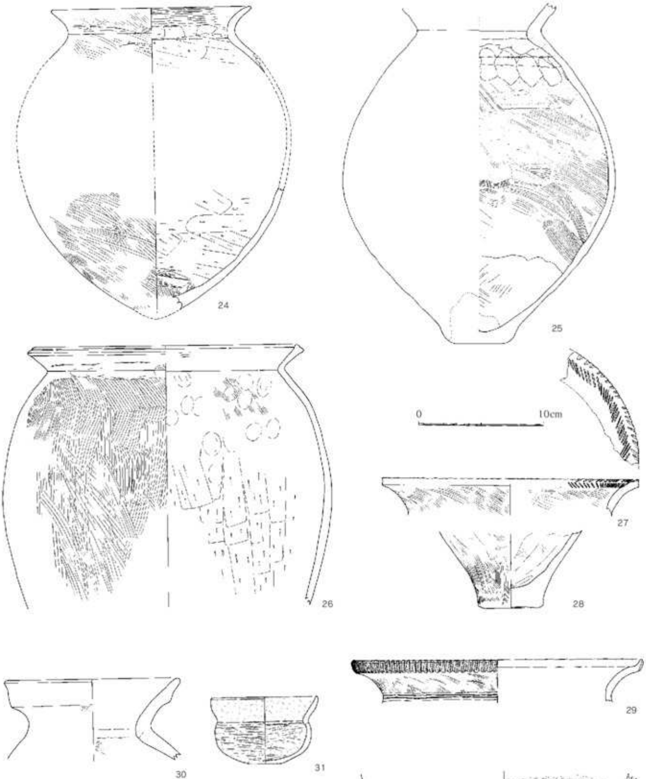
第 31 図　古墳時代以前の遺構配置５　Ｄ地区（S＝１／500）



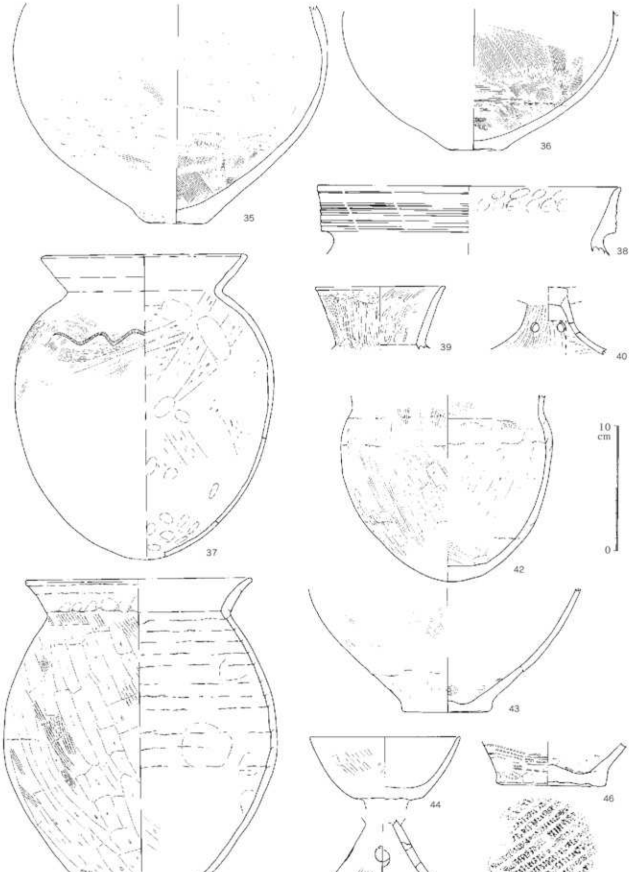
第 32 図　古墳時代以前の土器・土製品 1　建物跡（S＝1／3）



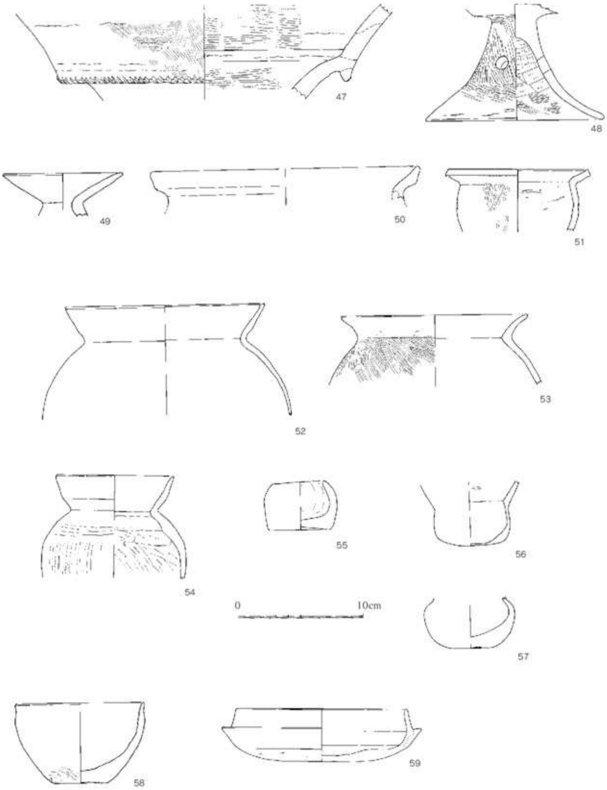
第 33 図　古墳時代以前の土器・土製品 2　井戸跡（S＝1／3）



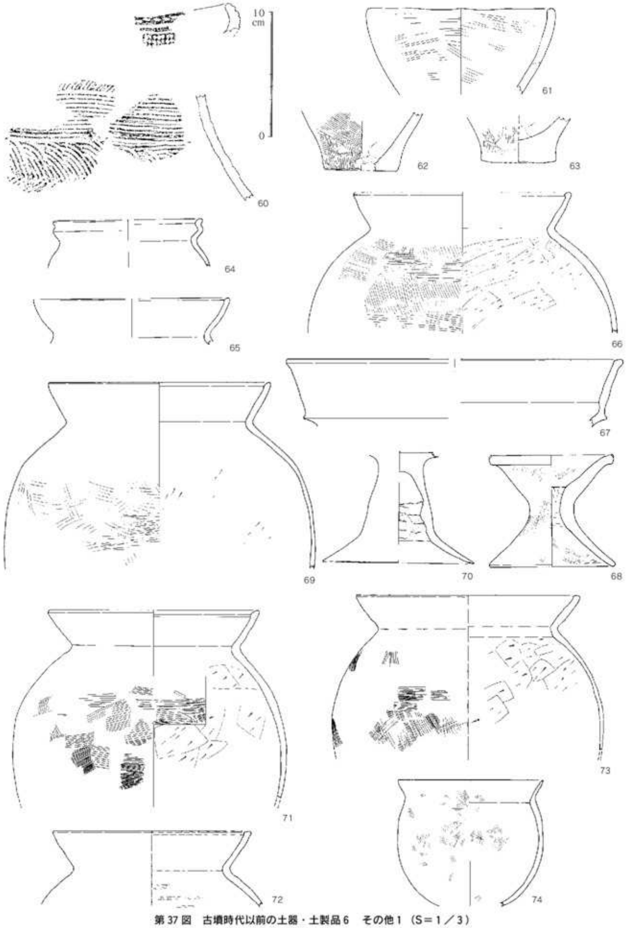
第34図　古墳時代以前の土器・土製品3　土坑1（S＝1／3）



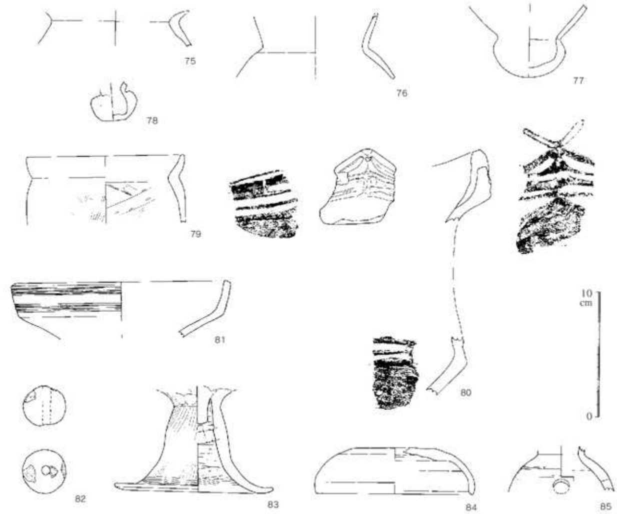
第 35 図　古墳時代以前の土器・土製品 4　土坑 2（S＝1／3）



第 36 図　古墳時代以前の土器・土製品 5　溝（S＝1／3）



第 37 図　古墳時代以前の土器・土製品 6　その他 1（S＝1／3）



第 38 図　古墳時代以前の土器・土製品 7　その他 2（S＝1／3）

遺物観察表凡例

・「実測番号」は遺物整理の年度・担当課が複数錯綜して存在し、番号が同じように 1 から振られていたため、識別できるように記号を加えて表記している。本書に関係するものは以下のとおりである。○は遺物種類に応じたアルファベット、×××は001から始まる 3 桁の基本番号である。

g 02×××：2002年度調査第 4 課整理、g 03×××：2002年度調査第 4 課整理、y 02○×××：2002年度整理課整理、k a 03○×××／k b 03○×××／b 03○×××：2003年度整理課整理（別班）

・「色調」は概ね農林水産省の新版標準土色帖に準拠しているが、観察者による偏差が存在する。

・「胎土」のうち、砂礫の区分は概ね新版標準土色帖に準拠しているが、観察者による偏差が存在する。

・「遺存度」は土器・陶磁器の遺存のよい部位ないし部分について、同心円上の分数で示した。

第 1 表　古墳時代以前の土器・土製品観察表

番号	実測番号	地区	グリッド	遺構1	遺構2	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胴径cm	内色調	外色調	胎土	内調整	外調整	遺存度	備考
1	b03C041	D3	BJ131	SI1104	SD1180	土師器	甕	28.2	－	－	－	鈍黄橙	鈍黄橙	礫・粗砂多	摩耗により不明	摩耗により不明	口1/12	
2	b03C042	D3	BJ130	SI1104	SD1180	土師器	甕	21.1	－	－	－	鈍黄橙	明黄褐	粗砂微、細砂多	ヨコナデ	ヨコナデ	口1/6	
3	b03C040	D3	BJ130	SI1104	SD1180	土師器	甕	18.8	－	－	－	鈍橙	橙	粗砂・細砂多、焼土	摩耗により不明	ヨコナデ	口1/4	
4	b03C039	D3	BJ130	SI1104	SD1180	土師器	鉢	15.6	－	－	－	浅黄	浅黄	細砂多、焼土	ミガキ?ケズリ	ミガキ?ケズリ	口1/6	
5	b03C038	D3	BJ130	SI1104	SD1180	土師器	壺	23.1	－	－	－	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多・細砂多、焼土多	摩耗により不明	摩耗により不明	口1/6	わずかに浮文剥離痕あり
6	b03C026	D3	BJ130	SI1104	P11160	土師器	高杯	12.0	6.2	－	－	橙	橙	細砂、海綿、焼土	摩耗により不明	摩耗により不明	口1/3	外面は赤彩と黒色被膜か
7	b03C037	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	甕	18.9	－	－	－	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂・礫微	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ	口1/6	
8	b03C035	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	壺	13.0	－	－	－	鈍褐	鈍橙	礫・粗砂多	摩耗により不明	摩耗により不明	口1/12	
9	b03C033	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	甕	13.8	1.5	17.5	－	灰黄褐	鈍赤褐	礫微、粗砂・細砂・海綿多	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	ほぼ完	

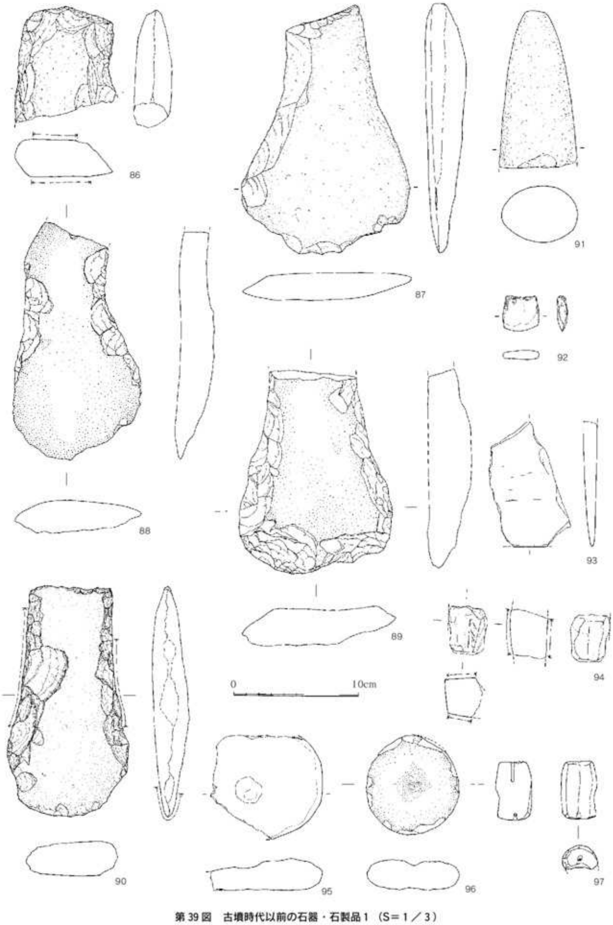
番号	実測番号	地区	グリッド	遺構1	遺構2	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胴径cm	内色調	外色調	胎土	内調整	外調整	遺存度	備考
10	b03C032	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	壺	12.6	–	–	–	橙	橙	細砂少、焼土多	ヨコナデ	ヨコナデ	口8/9	
11	b03C034	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	脚台	18.9	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂・礫やや多、海綿骨	ケズリ、ハケ、ミガキ	ミガキ	口1/6	
12	b03C031	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土師器	脚台	–	11.0	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂多、雲母	ナデ	ミガキ	脚7/12	
13	b03C036	D3	BJ132	SB1102	SD1178	土製品	有孔土玉	–	–	–	–				ナデ	ナデ	完	径3.6×3.25cm、重33.6g
14	b03C015	D3	BE131	SB1107	P11078	土師器	甕	15.2	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂・細砂少、焼土・海綿骨	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	
15	b03C027	D3	BE132	SB1107	P11183	土師器	甕	16.0	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	細砂・焼土多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/4	
16	ka03011	C1	AN109	SK522		土師器	甕	16.3	–	26.9	22.2	鈍黄橙	鈍黄橙	礫少、粗砂・細砂多	ケズリ、オサエ、ヨコナデ	ハケ、ヨコナデ	完	外面口縁部完、外面全体にスス付着、内底面に炭化物付着
17	ka03012	C1	AN109	SK522		土師器	甕	–	–	–	24.1	浅黄橙	浅黄橙	細砂少	ケズリ、オサエ	ハケ、ナデ	底完	外面スス、内底面に炭化物付着
18	ka03009	C1	AN109	SK522	層4下部	土師器	壺	–	–	–	9.0	灰	鈍黄橙	細砂少	ナデ	ハケ、摩耗	胴~底完	
19	ka03010	C1	AN109	SK522		土師器	壺	12.2	2.0	14.8	14.7	黄灰	灰白	粗砂多、焼土微	ヨコナデ、ケズリ、オサエ	ヨコナデ、ハケ	完	
20	g03169	C7	AY121	SX810a		土師器	甕	12.7	–	–	–	灰白~褐灰	灰白~褐灰	礫・粗砂・細砂少、雲母、海綿	ヨコナデ、ケズリ、ハケ	ヨコナデ、ハケ、オサエ	口1/6	
21	b03C004	D1	BM132	SK1104	炉内底	土師器	甕	–	3.4		–	鈍黄橙	黒	粗砂・焼土多、礫微	ケズリ	ハケ	底2/3	外面スス付着、歪みあり
22	b03C049	D3	BJ130	SK1116		土師器	鉢	11.5	–	10.6	–	橙	鈍橙	礫少、粗砂多、細砂多、海綿多	ヨコナデ、ナデ	ナデ、ハケ、オサエ	完	
23	b03C009	D1	BK130	SK1116		土師器	高杯	14.2	10.6	13.2	–	浅黄橙	浅黄橙	細砂	摩耗により不明	摩耗により不明	ほぼ完	
24	g02216	B10	AJ116	P996		土師器	甕	16.0	–	–	–	暗茶褐	暗褐	極粗砂多、海綿	ハケ、ケズリ	ハケ	口3/8	
25	g02471	B10	AJ116	P996		土師器	壺	–	5.0	–	–	浅黄	淡黄	粗砂多、海綿、雲母	ハケ、ナデ	摩耗により不明	胴~底7/8	
26	g02517	B6	AK103	SK48		弥生土器	甕	21.0	–	–	–	赤	赤褐	礫・粗砂多	ヨコナデ、ハケ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/4	
27	ka03015	B7	AB112	SK416		弥生土器	甕	20.6	–	–	–	褐灰	鈍橙	礫・粗砂・焼土多、海綿骨	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	口1/6	口縁部内面綾杉状刺突
28	ka03015	B7	AB112	SK416		弥生土器	底部	–	5.3	–	–			礫・粗砂・焼土多、海綿骨	ハケ、ナデ、オサエ	ハケ	底完	
29	ka03014	B7	AB112	SK416		弥生土器	甕	23.2	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	礫多、粗砂多、海綿骨	ナデ	ハケ、ヨコナデ	口5/36	刺突、櫛描文
30	ka03004	C1	AP109	SK523		土師器	壺	13.7	–	–	–	浅黄橙	浅黄橙	細砂多 海綿骨針多	ハケ、摩耗	ヨコナデ、ハケ、摩耗	口完	
31	ka03007	C1	AP109	SK523		土師器	鉢	8.4	2.5	5.4	7.7	浅黄橙	浅黄橙	細砂少	ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	口1/6、底完	内外面とも赤彩
32	ka03008	C1	AP109	SK523		土師器	壺	–	5.0		–	黒褐	灰白	粗砂・細砂多 海綿少	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ、ケズリ	底完	外面底部付近に記号
33	ka03005	C1	AP109	SK523		土師器	高杯	–	–	–	–	灰黄	灰黄	細砂少	ハケ、ナデ	ミガキ		透かし3箇所
34	ka03006	C1	AP109	SK523		土師器	高杯	–	11.4	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	細砂多	ナデ、ハケ	ミガキ やや摩耗	脚1/4	透かし4箇所
35	ka03002	C1	AT114	SK525		土師器	壺	–	4.8	–	25.2	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多 海綿少	ハケ、ヘラケズリ、摩耗	ハケ、ヘラケズリ、摩耗	底完	
36	ka03003	C1	AT114	SK525		土師器	壺	–	4.2	–	21.2	灰	浅黄橙	粗砂・細砂多 海綿少	ハケ	摩耗により不明	底完	
37	b03C010	D1	BM131	SK1101		土師器	甕	16.6	–	24.3	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂多、礫少	ヨコナデ、ケズリ、オサエ	ヨコナデ、ハケ	口完	波状文連続するかは破損により不明
38	b03C002	D1	BM131	SK1101		土師器	甕	24.2	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂多、焼土	ヨコナデ、オサエ	ナデ	口1/6	
39	b03C001	D1	BM131	SK1102		土師器	壺	10.2	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙褐灰	粗砂多、海綿	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	口3/4	
40	b03C003	D1	BM131	SK1102		土師器	高杯	–	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂、焼土	ナデ、ケズリ	ミガキ		透かし2孔で一対
41	b03C005	D1	BM132	SK1107		土師器	甕	17.8	–	25.4	–	鈍橙	灰黄褐	粗砂・礫多、海綿	ヨコナデ、ナデ	ハケ、ケズリ	全体5/12	
42	b03C007	D1	BM132	SK1107		土師器	甕	–	–	–	–	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多、礫少、焼土微	ハケ、ケズリ、ナデ	ハケ、ケズリ、ナデ	底完	
43	b03C006	D1	BM132	SK1107		土師器	壺	–	7.0	–	–	淡黄	浅黄橙	礫多、粗砂多、焼土多、海綿少	ハケ	ハケ、ミガキ、ケズリ	底完	
44	b03C013	D3	BD131	SK1110		土師器	高杯	11.9	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂・細砂多、焼土多、海綿骨	摩耗により不明	ハケのちミガキ	杯11/12	
45	b03C014	D3	BD131	SK1110		土師器	高杯	–	12.0	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂少、細砂・焼土多	摩耗により不明	ミガキ	脚2/3	
46	b03C021	D3	BJ131	SK1114		弥生土器	底部	–	8.7	–	–	鈍黄橙	灰黄褐	礫少、粗砂多、細砂多、焼土少、海綿骨	粗いナデ	条痕、擦状圧痕	底ほぼ完	
47	ka03013	C2	AM115	SD115		土師器	壺	–	–	–	–	褐灰	鈍黄橙	礫少、粗砂・細砂多	ハケ	ハケ、ナデ	小片	口縁帯下端刺突、浮文剥離痕
48	g02365	B10		SD115		土師器	高杯	–	–	–	–	淡褐	淡褐	粗砂少、焼土	ミガキ、ケズリ、ハケ	ミガキ	脚1/2	
49	g02366	B10	AL114	SD116		土師器	脚台	–	5.6	–	–	黄褐	黄褐	粗砂・細砂少	摩耗のため不明	摩耗のため不明	口ほぼ完	
50	g03115	C7	AW118	SD806		土師器	甕	–	–	–	–	橙	橙	粗砂・細砂、焼土、雲母、海綿	摩耗のため不明	摩耗のため不明	口1/8	
51	g03114	C7	AU117	SD806	a	土師器	甕	11.2	–	–	–	浅橙褐	浅橙褐	粗砂・細砂・焼土多	ケズリ、摩耗	ヨコナデ、ハケ、摩耗	小片	
52	b03C030	D3	BJ130	SD1101		土師器	甕	16.0	–	–	–	浅黄橙	鈍橙	砂、粗砂、焼土	摩耗のため不明	摩耗のため不明	口1/6	
53	b03C029	D3	BJ130	SD1101		土師器	甕	15.0	–	–	–	鈍黄橙	灰黄褐	粗砂多、礫少、焼土	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、オサエ	口1/3	内面に付着物あり
54	b03C028	D3	BJ129	SD1101		土師器	壺	9.4	–	–	–	灰黄褐	鈍黄橙褐灰	粗砂多	ヨコナデ、ケズリ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ	口1/3	
55	b03C008	D1	BJ129	SD1101		土師器	小型土器	4.1	4.8	3.9	–	浅黄橙	浅黄橙	粗砂・焼土多	オサエ	ナデ	ほぼ完	
56	b03C012	D3	BD132	SD1165		土師器	小型土器	–	4.1		–	褐灰	淡黄	粗砂多、焼土多	ナデ、ハケ	ナデ	底ほぼ完	
57	b03C011	D3	BD132	SD1165		土師器	小型土器	–	3.4		–	淡黄	淡黄	粗砂多、焼土多、海綿少	ナデ	ナデ	全体3/8	
58	g02367	B8	AH114, AH115	SD12		土師器	鉢	10.4	4.4	6.5	–	橙褐	桃褐	粗砂・細砂少	摩耗のため不明	ハケ、摩耗	全体3/8	
59	g03073	B7	T108,U107,U108	SD403		須恵器	杯	13.6	8.0	4.2		灰白	灰	粗砂・細砂	ロクロナデ	ロクロナデ、ロクロヘラケズリ	口1/8、底1/4	
60	g03280	C7	AZ118	SX812		弥生土器	壺	–	–	–	–	白灰	白灰	礫・粗砂・細砂多、焼土	ナデ、オサエ	条痕	小片、破片多数	
61	g03281	C7	AZ118	SX812		弥生土器	鉢	14.8	–	–	–	浅橙褐	浅橙褐~淡褐	粗砂・細砂少、焼土多	ハケ	ハケ	口1/8	
62	g03278	C7	AZ118	SX812		弥生土器	底部	–	6	–	–	黒	黄褐	礫・粗砂・細砂多、焼土	ナデ	ハケ、ナデ	底1/4	

番号	実測番号	地区	グリッド	遺構1	遺構2	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胴径cm	内色調	外色調	胎土	内調整	外調整	遺存度	備考
63	g03279	C7	AZ118	SX812		弥生土器	底部	–	6	–	–	淡橙褐	橙褐	礫・粗砂・細砂多、海綿	ナデ、オサエ	ハケ、ナデ	底1/4	
64	b03C016	D3	BD129	SX1113	南東	土師器	甕	約12	–	–	–	淡赤橙	褐灰橙	粗砂	ヨコナデ、摩耗	ヨコナデ、摩耗	小片	
65	b03C017	D3	BD129	SX1113	南西	土師器	甕	約16	–	–	–	浅黄橙	浅黄橙	粗砂多、焼土	摩耗のため不明	摩耗のため不明	小片	
66	b03C019	D3	BD131	SX1114		土師器	甕	17.2	–	–	–	鈍黄橙	鈍褐	粗砂多、焼土	ヨコナデ、ナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/4	
67	b03C020	D3	BD131	SX1114		土師器	甕	約27	–	–	–	浅黄	鈍黄橙 浅黄	粗砂多、焼土	ヨコナデ、摩耗	ヨコナデ	小片	
68	b03C018	D3	BD131	SX1114		土師器	器台	9.4	9.9	9.4	–	鈍黄橙	鈍黄橙	粗砂、礫、海綿、焼土	ヨコナデ、ミガキ?ケズリ、ハケ	ヨコナデ、ハケ、摩耗	全体1/2	
69	b03C044	D3	BI132	SX1116		土師器	甕	17.6	–	–	–	鈍橙	鈍橙 灰褐	粗砂多、焼土	ヨコナデ、ケズリ、摩耗	ヨコナデ、ハケ、摩耗	口5/12	
70	b03C043	D3	BI132	SX1116		土師器	高杯	–	12.0	–	–	黒褐	浅黄橙	粗砂多、焼土	ナデ、摩耗	摩耗のため不明	脚1/6	
71	b03C045	D3	BH132	SX1121		土師器	甕	16.6	–	–	–	鈍黄橙	鈍橙	粗砂・細砂多、礫微	ヨコナデ、ケズリのちナデ	ヨコナデ、ハケ	口ほぼ完	外面頸部に刺突
72	b03C048	D3	BH132	SX1121		土師器	甕	15.9	–	–	–	褐灰	浅黄橙	粗砂多、焼土	ヨコナデ、ナデ、ハケ?	ヨコナデ、摩耗	口1/6	
73	b03C046	D3	BH132	SX1121		土師器	甕	17.8	–	–	–	鈍黄橙	鈍黄橙	礫・粗砂多、焼土多	ヨコナデ、ケズリのちナデ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	
74	b03C047	D3	BH132	SX1121		土師器	甕	11.6	–	–	–	橙	橙	焼土、海綿	ハケ、摩耗	ハケ、摩耗		
75	g02225	B10	AJ115	P1109・P1108		土師器	甕	–	–	–	–	橙白	明橙	極粗砂多	ヨコナデ	摩耗のため不明	小片	
76	b03C023	D3	BI131	P11115		土師器	壺	–	–	–	–	橙	橙	細砂・焼土少	ハケのちミガキ?	ミガキ	胴1/4	
77	b03C022	D3	BI131	P11115		土師器	小型土器	–	–	–	–	橙	橙	細砂・焼土多	摩耗のため不明	摩耗のため不明	胴~底ほぼ完	
78	b03C025	D3	BI138	P11158		土師器	小型土器	–	1.8	–	–	浅黄橙	浅黄橙	粗砂、細砂少、焼土微、海綿	ナデ	ナデ	胴~底ほぼ完	
79	b03C024	D3	BI130	P11164		土師器	甕	12.4	–	–	–	灰黄	浅黄	粗砂多、細砂多	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、ハケ	口1/12	
80	g03282	C7	AW116	旧大野庄用水		縄文土器	深鉢	–	–	–	–	黒~暗褐		粗砂・細砂多	ナデ	ナデ	小片、破片多数	一部スス付着
81	ka03001	C1	AQ110	SD67		弥生土器	器台か脚台	16.6	–	–	–	鈍橙	鈍橙	礫微、粗砂多	ナデ	ナデ	口7/36	
82	g03274	B6	AK107	SD67		土師器	有孔土玉	–	–	–	–	褐					ほぼ完	径3.5×3.2cm、重34.4g
83	g03254	C5	AN109	SD67		土師器	高杯	16.2	–	–	–	橙褐	暗褐	粗砂・細砂多	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ	脚1/4	
84	g03070	C7	BA119	旧大野庄用水		須恵器	杯蓋	12.4	7.0	3.7	–	灰白	灰白	細砂多	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	口1/8	
85	kb03D192	A8	J101	遺物包含層		須恵器	ハソウ	–	–	–	–	灰	灰	粗砂小	ロクロナデ	ロクロナデ、カキメ		

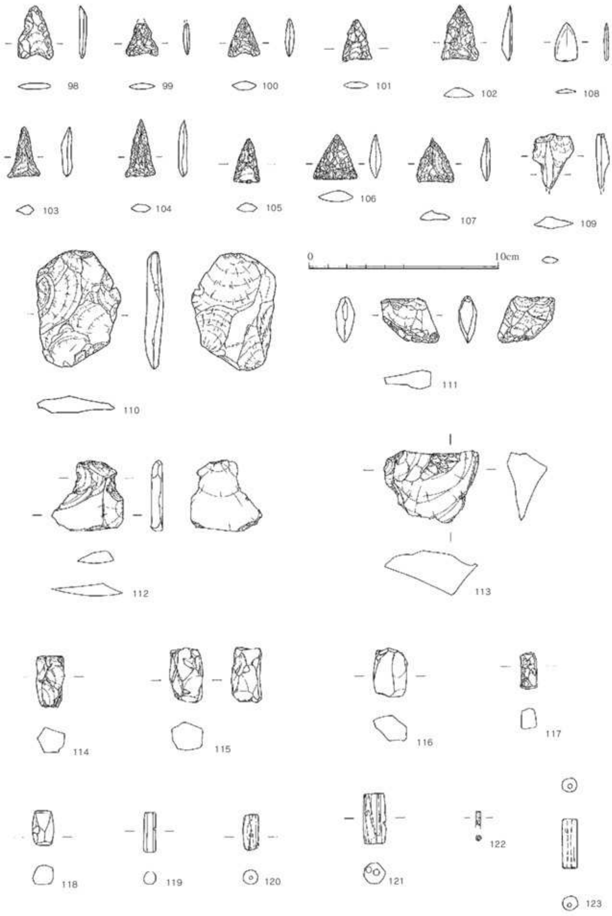
第2表　古墳時代以前の石器・石製品観察表

番号	整理番号	地区	グリッド	遺構1	遺構2	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
86	kb03S030	A8	N101			打製石斧	9.5	8	3	313.7	凝灰岩	砥石に転用
87	kb03S016	C4	AL118	旧鹿道側溝		打製石斧	20	13.5	3.3	779.98	凝灰角礫岩	
88	g03283	C7	AX117	旧大野庄用水		打製石斧	18.5	10.1	2.7	624	凝灰角礫岩	
89	g03284	C7		旧大野庄用水		打製石斧	16.3	12.3	3.6	858	凝灰角礫岩	
90	b03S001	D3		SD1107・1108		打製石斧	14.6	9.7	3	579.52	凝灰角礫岩	基部が直基
91	kb03S023	A6	R107・S107	SE603		磨製石斧	12.6	6.2	4.4	491.13	凝灰岩（砂岩質）	敲打痕あり（未成品か?）
92	kb03S009	C7	AX117	旧大野庄用水		磨製石斧	2.85	2.9	8	10.8	蛇紋岩	
93	kb03S013	C7	AY117	旧大野庄用水		石包丁	10	6.5	1.1	86.5	安山岩か	
94	b03S009	D3	BI130	SD1180		砥石	3.95	3.14	3.2	46.09	凝灰岩（泥岩質）	使用痕あり
95	kb03S028	A4	P105	SD602		すり石類	8.3	9	2.55	290.56	凝灰角礫岩	
96	g03286	C7	AZ118	旧大野庄用水		すり石類	8	7.5	2.4	206	砂岩	
97	g02276	B8	AH116	P72		?	4.6	2.8	1.8	32	凝灰岩（泥岩質）	
98	kb03S011	C7	AY117	旧大野庄用水		打製石鏃	2.8	1.9	0.4	1.9	ガラス質安山岩	凹基
99	kb03S007	C7	AY117	旧大野庄用水		打製石鏃	1.7	1.6	0.34	0.9	ガラス質デイサイトか	凹基
100	kb03S005	C7	AX118	遺構検出時		打製石鏃	2	1.7	0.43	1	硬質頁岩	凹基
101	b03S016	D1		表土除去（南半）		打製石鏃	2.2	1.53	0.32	1.01	ガラス質安山岩	凹基
102	kb03S020	B2	V104	P7074		打製石鏃	2.9	1.9	0.5	1.79	硬質頁岩	凹基
103	kb03S001	C7	AW116	旧大野庄用水		打製石鏃	2.64	1.7	0.53	1.4	頁岩	平基
104	kb03S008	C7	AU117	SD806		打製石鏃	1.94	1.6	0.44	1.7	ガラス質安山岩	平基
105	b03S002	D3	BE128	SD1107・1108		打製石鏃	2.33	1.36	0.44	1.04	ガラス質安山岩	平基
106	kb03S049	B2		SD727	灰色砂層	打製石鏃	2.3	2.3	0.6	1.95	硬質頁岩	平基
107	kb03S003	C7	AV117	SD806		打製石鏃	2.3	1.96	0.48	1.6	頁岩	平基
108	kb03S002	B7		SD20		磨製石鏃	2	1.2	0.24	0.9	粘板岩	
109	kb03S010	C7	AY117	旧大野庄用水		石錐	2.9	2.2	0.7	3.2	ガラス質安山岩	
110	kb03S012	C5	AM109	SD67		石楔	6.2	4.4	1	26.7	ガラス質安山岩	
111	kb03S004	C7	AX116	旧大野庄用水		石楔	2.4	2.6	1	7	ガラス質安山岩	
112	b03S015	D1	BN130	SX1101		石楔	3.75	3.8	0.62	9.27	頁岩	
113	b03S006	D3	BG132	遺構検出面		玉剥片	3.8	5.02	2.42	29.26	*緑色凝灰岩	
114	b03S014	D3	BD128	SD1107・1108		管玉未成品	2.75	1.48	1.32	6.6	*緑色凝灰岩	角柱状
115	b03S005	D3	BD129・BE129	SX1113	南東	管玉未成品	2.82	1.74	1.58	8.69	*緑色凝灰岩	角柱状
116	b03S013	D3	BE128	SD1108		管玉未成品	2.57	1.74	1.37	6.42	*緑色凝灰岩	角柱状
117	b03S007	D3	BI130	SI1104	P11160	管玉未成品	1.89	0.88	1.06	2.05	*緑色凝灰岩	角柱状
118	b03S011	D3	BI132	SB1102	SD1178	管玉未成品	1.85	1.2	1.01	2.86	*緑色凝灰岩	円柱状
119	b03S012	D3	BE128	SD1108		管玉未成品	2.13	10.67	0.68	1.12	*緑色凝灰岩	円柱状
120	b03S008	D3		SD1113		管玉未成品	0.87	0.8	0.76	1.03	*緑色凝灰岩	円柱状、穿孔途中
121	b03S010	D3	BI131	SI1104	SD1180	管玉未成品	2.69	1.18	1.1	3.03	*緑色凝灰岩	円柱状、穿孔途中
122	y02S001	C1	AN110	SD67	上面	管玉	0.72	0.27	0.27	0.08	*緑色凝灰岩	
123	kb03S006	C7	AZ118	旧大野庄用水		管玉	2.6	0.8	0.7	3.2	*緑色凝灰岩	中心を少しずれて両面穿孔

*は石材を同定しておらず、肉眼で見た通称名である。



第 39 図　古墳時代以前の石器・石製品 1（S＝1／3）



第 40 図　古墳時代以前の石器・石製品 2（S＝1／2）

第３章　中世以降

第１節　旧大野庄用水

2000〜2002年度の調査において、A、B、C地区を貫流する水路が検出されている（第41図〜第43図）。流向は南北方向であるが、南南東から北北西に振っている。検出時点はSD８としたが、覆土から近世以降の水路と推定されたので、2000年度と2001年度は全掘せずにトレンチによる確認調査にとどめている。2002年度は調査が可能な最後の機会となったため、全掘した。全掘していない部分が多いが、確認された幅は10m前後で、縁の浅い部分を含めると15mで検出した部分もある。深さは0.7m〜1.2mを測る。延長は400m以上に及び､調査区外へ伸びている。南側はD１区南端のSX1111とつながる可能性が高い。SX1111もトレンチによる確認調査である。堆積は砂層、砂質土層が多く観察され、適度に水流があったことがわかる。B８区では砂で埋まった後、水路が切り替わったり、最掘削が行われた痕跡が観察できる。水路に伴う護岸等の施設は確認されていない。この水路は旧地籍図と照合した結果、旧大野庄用水の支流の一つであることが判明した（第48図）。

遺物は多く出土しているが、そのほとんどは古代の須恵器であり、２次堆積と判断される。古墳時代以前の遺物については前章で取り上げており、古代の遺物については別分冊に所収する予定であるので、ここでは水路と関係する中近世の遺物について掲載する（第49図〜第53図）。土器・陶磁器は珠洲（124〜128）、越前（129〜131）、瓦器（132〜134）、肥前系陶器（135）がある。珠洲は中世前半のすり鉢（124・125）、中世後半のすり鉢（126・127）、甕（128）がある。越前は中世後半のすり鉢（129）、近世でも後半のすり鉢（130・131）がある。瓦器は中世後半の三足香炉（132）と、近世と推定した鉢状の品（133）、すり鉢（134）がある。肥前系陶器は17世紀代の皿（136）がある。石製品は砥石（137〜139）、炉壁（140）、石鉢（141）がある。砥石は定型的なもの（137・138）と礫素材の不定型なもの（139）があり、古代以前に遡るものもあるかもしれないが、判断できないのでここに掲載した。金属製品には銭貨、金具がある。銭貨は南唐銭１点（142）、北宋銭５点（143〜147）、その可能性があるもの１点（148）、明銭１点（149）、近世銭４点（151〜154）の計12点出土している。中世に流通するものが多い。北宋銭の３点（143〜145）は銅金具（150）とともに底面から出土している。状況から察すると、銭貨の入った巾着が水路に落ち、繊維が腐植して消失したものと推定できる。当然、銅金具は巾着の根付けとなろう。木製品は意味不明の墨書材（161）、穴の空いた容器（162）、匙状の漆器（163）、留め具状のもの（164）がある。時期、用途は不明である。

大野庄用水は天正年間（1573〜1592）に開鑿されたと伝えられ、金沢で最も古い用水の一つである。今回の調査では、方位に偏向する部分の流向が確認できた。この方向は周辺の自然な水の流れに沿っており、町割りとも一致する。おそらく、用水は地形に即して開発されており、元々存在した自然河川が利用され、それに倣って町割りも行われたものと推定する。また、今回の調査では近世の遺物に加えて、中世の遺物が比較的良好な状態で出土しており、付近に中世集落の存在を伺わせる。大野庄用水自体は金沢城の築城や城下町の形成と深く関係して整備されたものであり、中世まで遡るものではないが、その前史を考える上でも興味深い資料である。

第２節　地震痕跡

D３区では、調査区を北北西・南南東方向に縦断する砂脈群が検出された（第44図）。これらは過去の地震による液状化現象を示す地震痕跡と判断される。具体的には地割れから地下水が砂とともに噴出したものであり、地表面の噴砂は復旧作業で取り除かれ、地割れにのみ残ったものである。

砂脈群の最も北西はBB129区、最も南東はBH132区に達し、延長は70mを超えており、さらに調査区外へ伸びている。砂脈個々の幅は検出面で５cm以下と細く、延長は長いものでも６m、短いものは50cm に満たない。それらが断続しながら北北西・南南東方向に伸びている状況である。BD129区、BE129区、BE130区が最も明確に検出され、そこから北北西・南南東方向に向かっては細く不明確になっていく。概ね延長が長いものは幅が広い部分をもっており、地割れが大きい部分に噴砂も著しかった状況が伺える。古墳時代の遺構であるSX1113、SB1104～1106、SB1110や、古代と推定している南北溝SD1163などを切り裂いており、これら以降の時期に起こった地震となる。

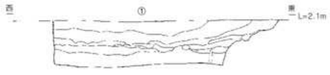
砂脈が明確であった地点では、①～③の箇所で地山を断ち割って土層を確認した。地点①では砂脈がやや不明確になりつつあり、垂直方向にも断続が見られた。地点②では砂脈が検出面から約80cm の深さに位置する粗砂層（層Ⅸ）から形成されていることを確認しており、地下水と砂が噴出した層が特定できた（図版23）。地点③では近世の水路SD1105（層５）・SD1109（層７）、近代の水路（層１）が重なっており、砂脈はこれら水路を貫いていない。よって、地震はそれ以前に起こったものとなる。近世の水路からは近世後半の遺物が出土しており、水路が近世初頭から原形をとどめているとも考えにくいので、実質的に下限となる時期は近世後半であろう。

以上の地震痕跡については、遺構との前後関係から、古代以降近世後半以前の時期が想定される。記録に残る地震で該当する可能性が高いものは寛政11（1799）年の金沢地震であり、金沢市普正寺高畠遺跡でも検出されている。地震痕跡の方向はこの地域の自然な水の流れと一致しており、古地形やそれに沿って移動する地下水の流れを反映するものと推定できる。この地点は粘質の地山層が薄く、その下位の粗砂層を見る限り、地下水位が高かった地勢が推定でき、地震による液状化現象が生じ易かったものであろう。なお、他の調査区では同様の地震痕跡は確認されておらず、見落としの可能性もあるが、この地点のように一定の条件が揃った環境下で生じる性質のものと考えている。

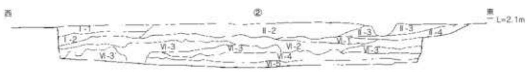
第３節　その他

その他遺構として、耕作溝を除く近世・近代溝群を取り上げる（第45図～第47図）。B７区とB８区で検出された南北方向の溝SD９は、用水から分岐する水路と推定される。その北側は落ち込み状に広がっており、後述するC７区のような水場となる可能性がある。C７区は大野庄用水の東側に水路SX811がほぼ並走しており、その北半はSD801と先端が完結する溝SD802が分岐し、SD801には落ち込み状のSX801・SX803・SX804が付帯する。その先はさらに北に伸びるSD807と、直角に折れてC３区・C８区へ伸びる溝が分岐するようである。これらは前述の旧地籍地図にも記載されている水路であり、大野庄用水に比べると小規模であり、副水路的な性格が想定される。SX801・SX803・SX804など池状のものは水場になっていた可能性がある。C７区では溝群の周辺で肥溜やよく似た方向の耕作溝が検出されており、耕作に関係する施設と推定される。D３区のSD1105・SD1109も同様であろう。なお、肥溜についてはB４区などでも確認されている。

その他遺物として肥前系磁器、銭貨がある。肥前系磁器は18世紀代の碗（第50図136）である。銭貨は寛永通宝（第52図155～158）の他、寛永通宝の四文銭が１点（159）、文久永宝の四文銭が１点（160）ある。近世・近代溝群の他、肥溜や遺構外からも出土している。



層の記録なし



Ⅰ　暗黄色粘土
1　地山ベースに灰色粘土・黒色粘土ブロック多く入る
2　層1よりブロック少ない

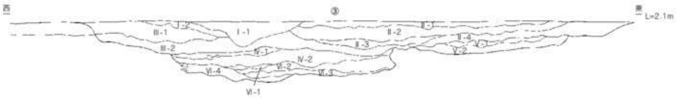
Ⅱ　暗黄灰色砂
1　暗黄色粘土(地山)粒多く含む
2　暗黄色粘土(地山)粒少し含む
3　若干砂質大きい
4　暗黄色粘土(地山)ブロック少し含む

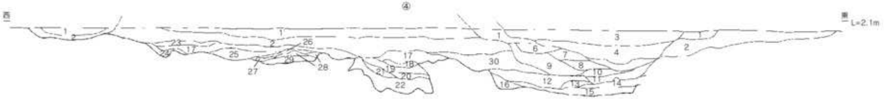
Ⅲ　灰色粘土
1　暗黄色粘土ブロック多く含む
2　粘質大、地山微量含む

Ⅳ　灰色シルト
1　若干粒の粗い砂、粘質なし
2　灰色粘土少し含む

Ⅴ　灰色粘土
1　粘質大、地山(白色粘土)ブロック少し含む
2　粘質大、地山(白色粘土)大ブロック多く含む

Ⅵ　青灰色シルト
1　若干粒の粗い砂、粘土粒少しからむ
2　粒の大きい砂、粘質なし、灰色シルト少し含む
　(最も土器が多く出る層)
3　青灰色シルト　若干砂質
4　粘質大、砂質微量含む
※　洪水砂層＝Ⅳ－1、Ⅵ－1、Ⅵ－2

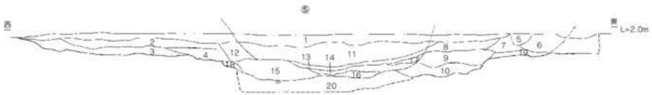




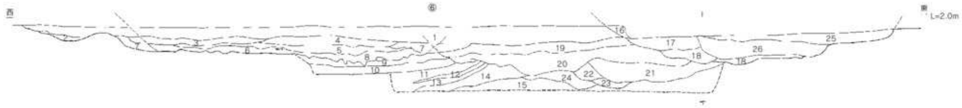
1'　層1よりやや明るい
1　明灰褐色粘質土
2　明灰褐色粘質土　やや褐色が強い
3　明灰色粘質土
4　明灰色粘質土　やや暗い
5　明灰色粘質土　層4より暗い
6　明灰褐色砂
7　明灰色細砂
8　明灰褐色細砂
9　明灰褐色細砂　層8より粒子細かく、粘性強い
10　層8よりやや暗い
11　層10より砂質が強い
12　層9より暗くやや粘性強い
13　明灰褐色砂
14　緑灰色細砂
15　緑灰色細砂　層14より粒子大きく、木を含む湧水層
16　層15よりやや暗い
17　灰褐色砂
18　灰褐色砂　層17よりやや暗い
19　暗灰褐色砂
20　暗灰褐色砂　層19よりやや粒子大きい
21　暗灰褐色砂　層19よりやや暗い
22　暗灰色粘質土　ピットか？
23　明灰褐色粘質土　層2よりやや暗い
24　暗灰褐色粘質土　ベース土含む
25　灰褐色細砂
26　灰褐色細砂　層25より明るい
27　褐色粗砂
28　暗灰色粘質土
29　明灰褐色砂
30　灰色シルト質土

0　2m

第41図　旧大野庄用水1（S＝1／60）



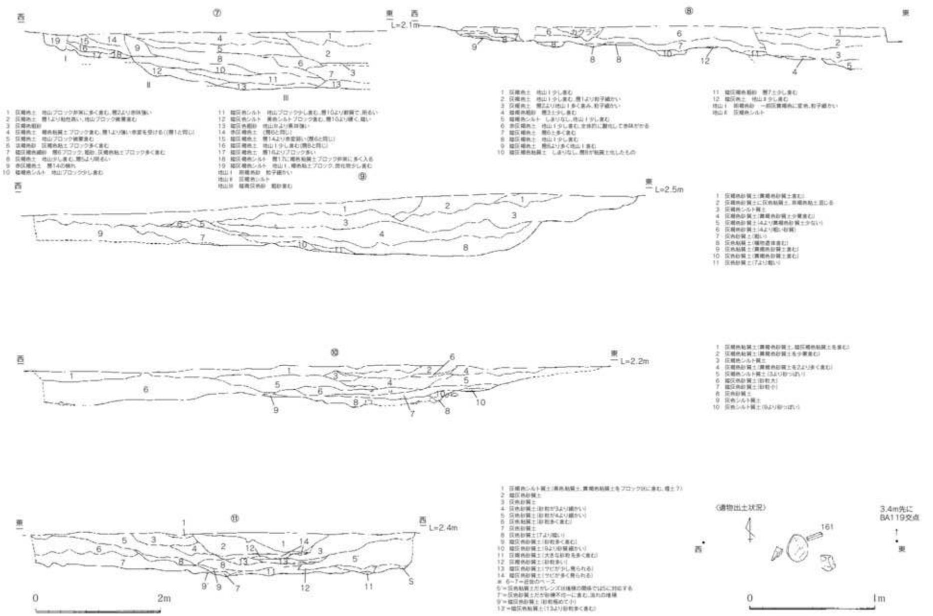
1 灰褐色粘質土
2 暗黄褐色粘質土　鉄分多く含む
3 灰褐色粘質土
4 灰褐色粘質土　層3より明るい
5 明灰色粘質土　B8区から続く溝
6 灰色粘質土　ブロック状にベース土含む
7 オリーブ褐色粘質土
8 灰褐色粘質土　層1より暗い
9 灰褐色粘質土　層8より明るい
10 灰褐色粘質土　層9より暗く、粒子粗い
11 灰褐色粘質土
12 灰色粘質土
13 暗灰色粘質土　水分多く含む
14 灰褐色砂質土
15 灰色粘質土　層12より暗い
16 暗灰色砂質土
17 暗灰色細砂
18 暗灰色粘質土
19 灰色粘質土
20 緑灰色砂質土　水がしみでる



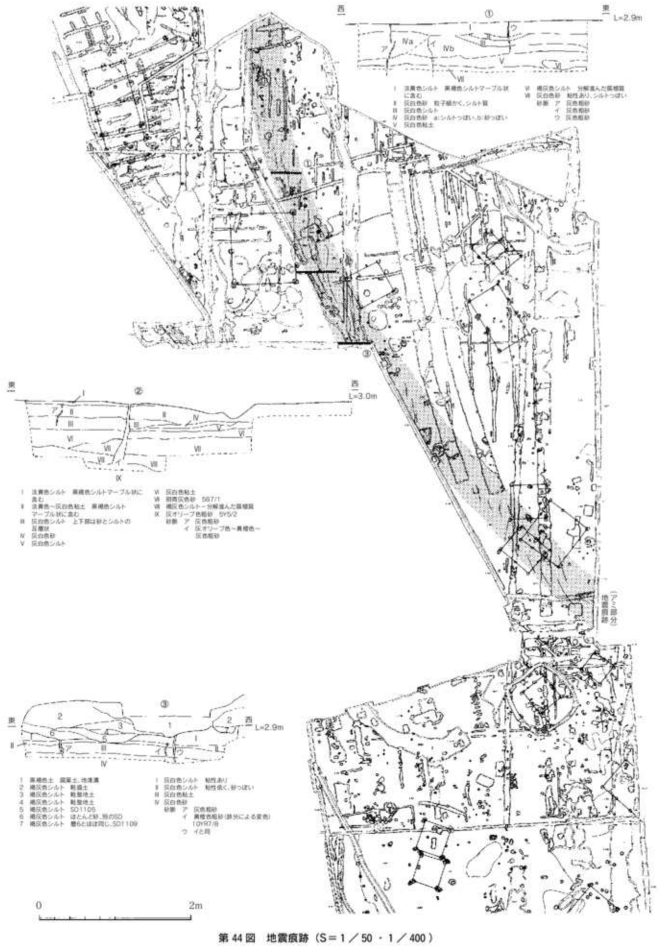
1 明灰褐色粘質土
2 灰褐色粘質土
3 灰褐色粘質土
4 灰褐色砂質土
5 暗灰色砂質土
6 灰褐色粗砂
7 暗灰褐色粘質土
8 暗灰色粗砂
9 灰色粘質土　ベース土混じる
10 灰褐色粘質土　腐植土混じる
11 緑灰色砂質土
12 暗灰色粘質土
13 緑灰色砂質土
14 暗灰色粘質土
15 緑灰色粘質土　湧水層
16 明灰褐色粘質土　層1より明るい
17 灰色粘質土
18 オリーブ褐色砂質土
19 灰色粘質土　鉄分多く含む
20 明灰色粘質土
21 灰色砂質土
22 灰色砂質土　層21より暗い
23 灰褐色砂質土
24 暗灰褐色砂質土
25 灰褐色粘質土
26 灰褐色粘質土　層25より明るい

0　2m

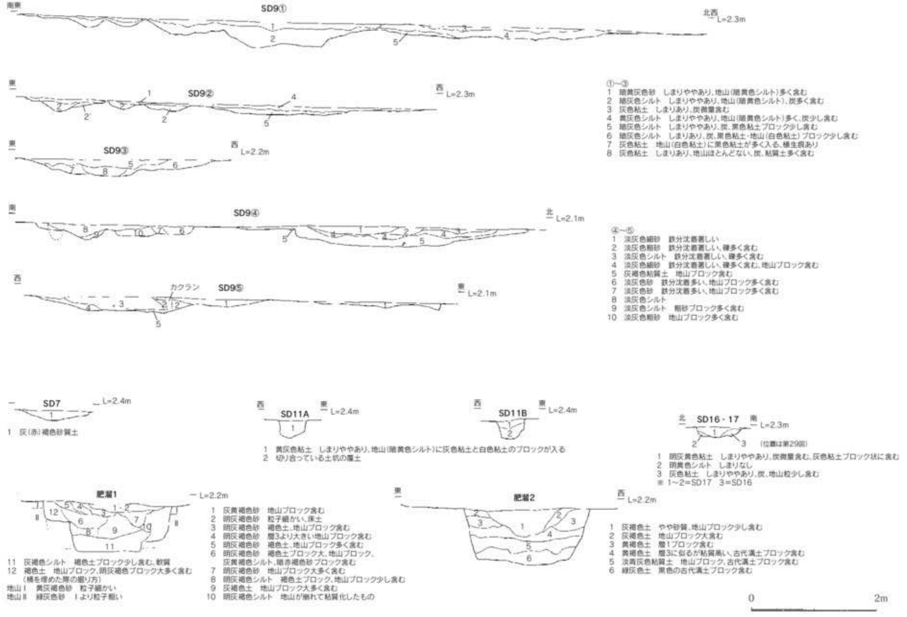
第42図　旧大野庄用水２（S＝１／60）



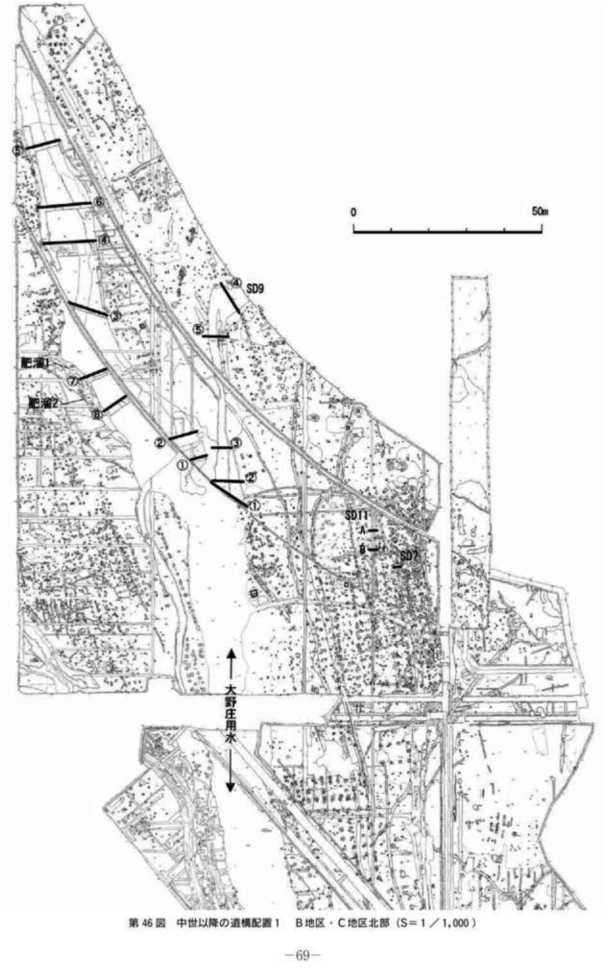
第43図　旧大野庄用水3（S＝1／60・1／30）



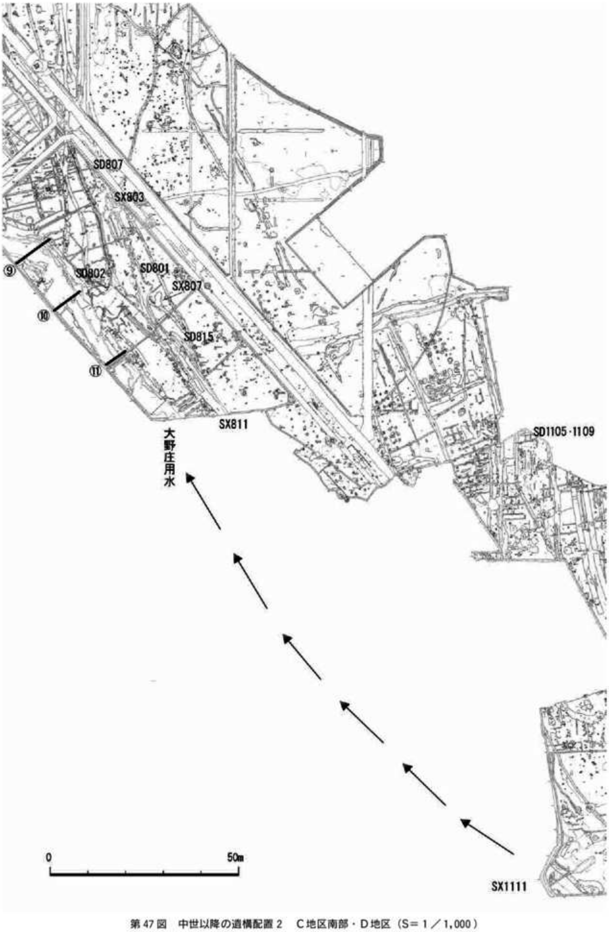
第44図　地震痕跡（S＝1／50・1／400）



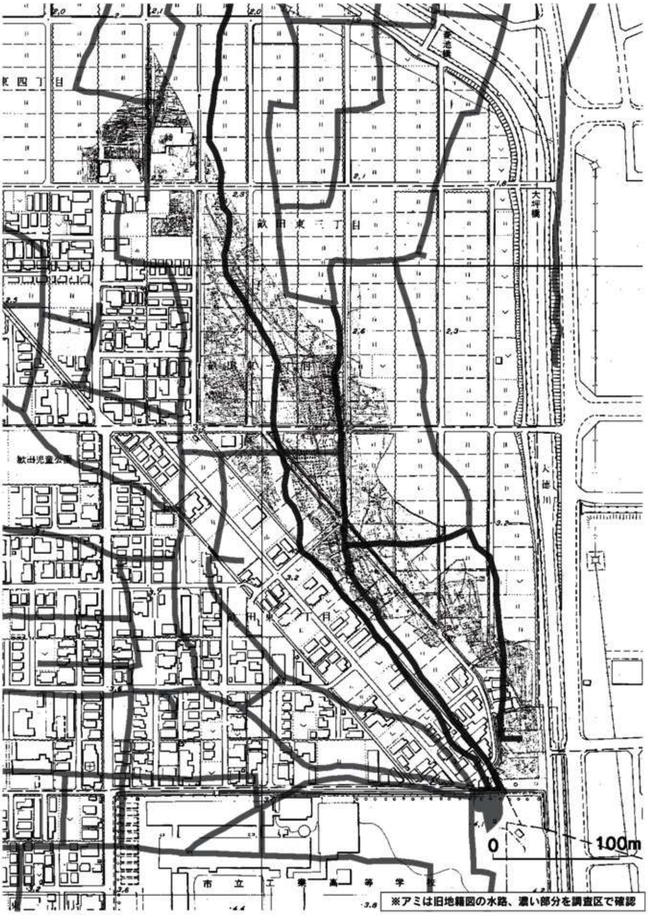
第45図　中世以降のその他遺構（S＝1／60）



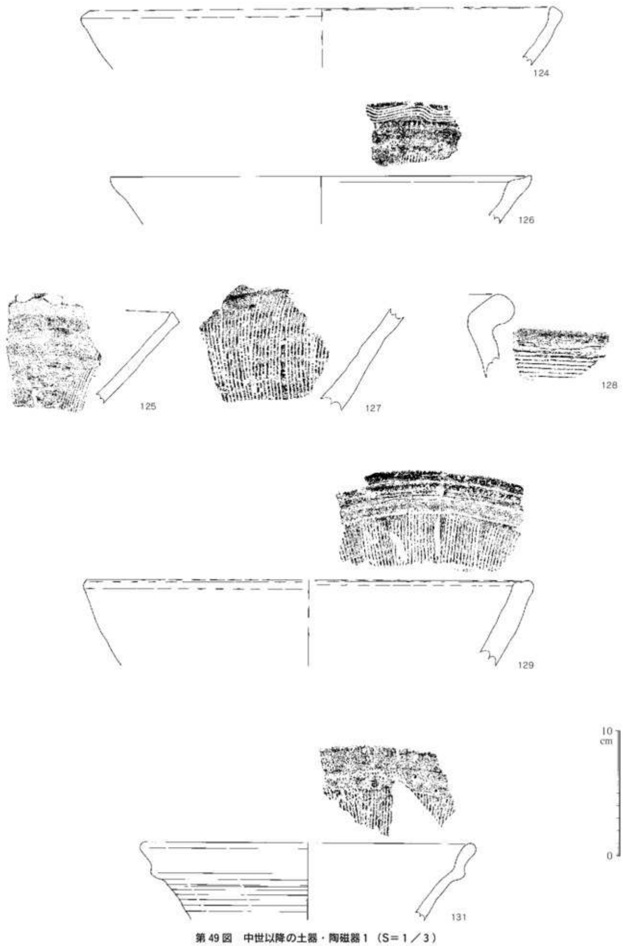
第46図　中世以降の遺構配置1　B地区・C地区北部（S＝1／1,000）



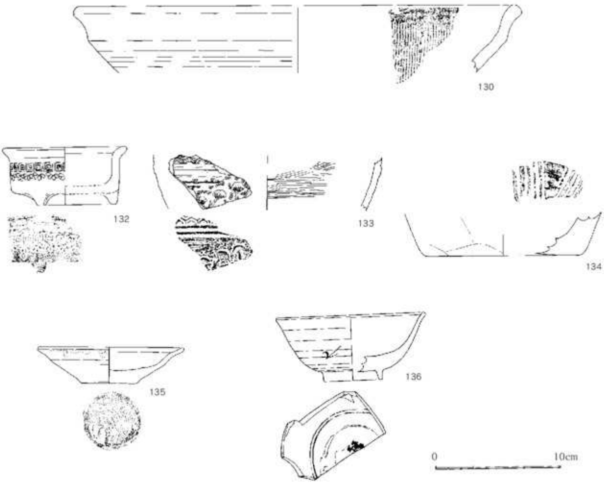
第47図　中世以降の遺構配置２　Ｃ地区南部・Ｄ地区（S＝１／1,000）



第 48 図　調査区と旧地籍図（S＝1／3,000）



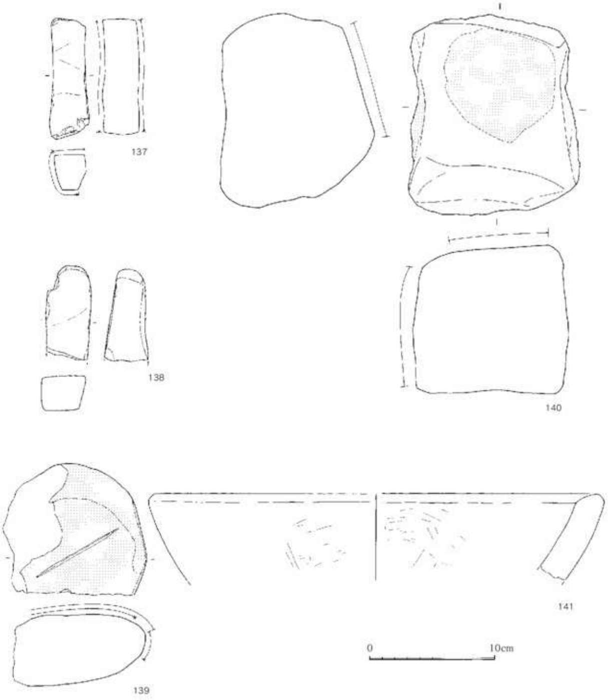
第49図　中世以降の土器・陶磁器1（S＝1／3）



第 50 図　中世以降の土器・陶磁器 2（S＝1／3）

第 3 表　中世以降の土器・陶磁器観察表

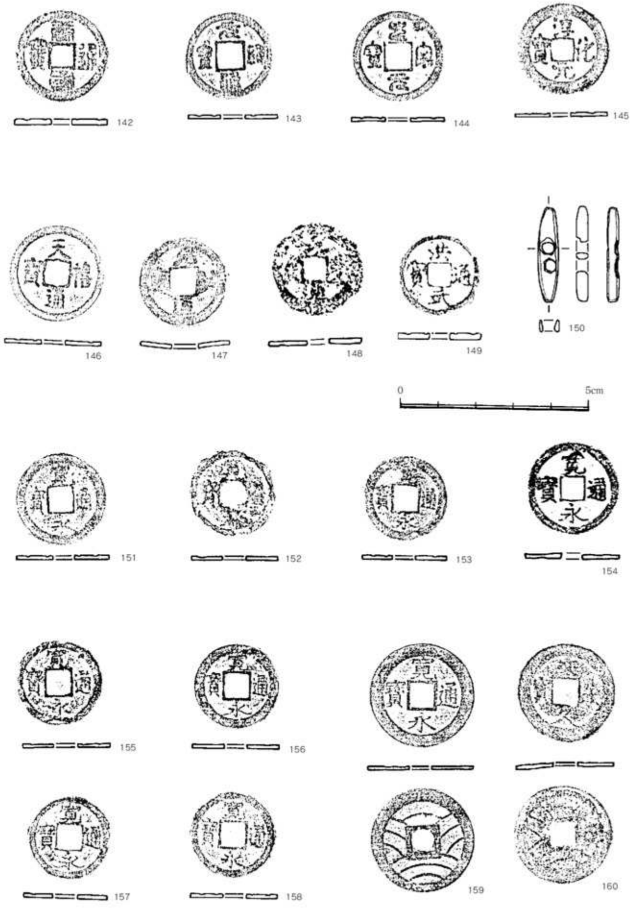
番号	実測番号	地区	グリッド	遺構	種別	器種	口径cm	底径cm	器高cm	胴径cm	内色調	外色調	胎土	内調整	外調整	遺存度	備考
124	g03270	C7	BA119	旧大野庄用水	珠洲焼	すり鉢	32.7	−	−	−	灰	灰	粗砂・細砂少，海綿	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/8以下	
125	g03277	C7	BA119	旧大野庄用水	珠洲焼	すり鉢	−	−	−	−	灰	灰	粗砂・細砂少，海綿	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
126	g03291	C7	BA119	旧大野庄用水	珠洲焼	すり鉢	33.7	−	−	−	灰	灰	粗砂・細砂少，海綿	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/8以下	全面に赤色顔料（?）付着
127	g03276	C7	AZ119	旧大野庄用水	珠洲焼	すり鉢	−	−	−	−	灰	灰	粗砂・細砂少，海綿	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	
128	g03290	C7	AY117	旧大野庄用水	珠洲焼	甕	−	−	−	−	灰	灰	粗砂・細砂少，海綿	ナデ，オサエ	ナデ，タタキ	口1/8以下	
129	g03275	C7	AW116 - AW118	旧大野庄用水	越前焼	すり鉢	36	−	−	−	赤橙褐	茶褐	砂礫・粗砂・細砂多	ナデ	ナデ	口1/4	
130	g03289	C7	AW116	旧大野庄用水	越前焼	すり鉢	35.1	−	−	−	橙褐	橙褐	砂礫・粗砂・細砂多	ナデ	ナデ	口1/8以下	
131	g03273	C7	BA119	旧大野庄用水	越前焼	すり鉢	26.4	−	−	−	橙褐	橙褐	砂礫・粗砂・細砂少，焼土	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/8	内面に炭化物付着
132	g03069	C7	AX117	旧大野庄用水	瓦器	香炉	9.6	8.4	4.6	−	黄褐	黄褐	焼土塊	ナデ	ナデ	口1/8	三足に復元
133	g03271	C7	AZ118	旧大野庄用水	瓦器	鉢?	−	−	−	−	黒	暗褐	細砂少	ハケ，ナデ	文様	小片	
134	g03272	C7	AZ117	旧大野庄用水	瓦器	すり鉢	−	12.8	−	−	灰	灰	細砂少	ナデ	ナデ	底1/4	一部摩耗で地が出ている
135	g03071	C7	AZ118	旧大野庄用水	陶器	皿	11.5	4.8	2.9	−	赤褐～暗褐	赤褐		ロクロナデ	ロクロナデ，回転糸切り	口1/4	内面に目あと
136	g03077	C7	BA120	遺構検出時	磁器	碗	11.7	4.8	5.3	−						口1/8	高台畳付ハゲ，断面に漆?付着



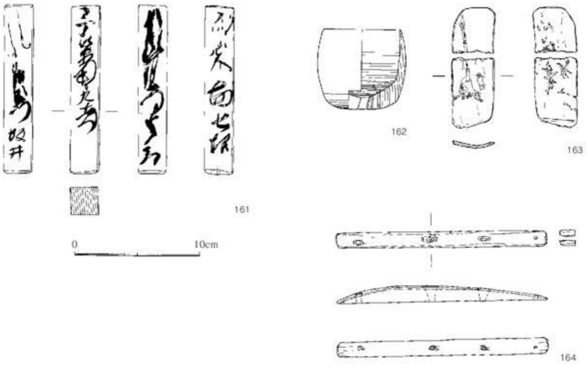
第 51 図　中世以降の石製品（S＝1／3）

第 4 表　中世以降の石器・石製品観察表

番号	整理番号	地区	グリッド	遺構	器種	長cm	幅cm	厚cm	重g	石材	備考
137	kb03S018	B2		旧大野庄用水	砥石	9.7	3.2	3	141.79	珪化木	
138	kb03S021	B2		旧大野庄用水	砥石	7.5	3.5	3.5	129.79	凝灰岩（砂岩質）	
139	kb03S037	A4	R105	旧大野庄用水	砥石	10.45	11.1	5.7	956.13	砂岩	工具痕あり，火を受けている
140	kb03S026	A4	R105	旧大野庄用水	炉壁	13.7	16.2	12.3	4100	花崗岩	火を受けている
141	kb03S022	B2		旧大野庄用水	石鉢	−	−	−	278.66	凝灰岩	口径35×器高7以上



第52図　中世以降の金属製品（S＝1／1）



第53図　中世以降の木製品（S＝1／3）

第5表　中世以降の金属製品観察表

番号	整理番号	種類1	種類2	材質	地区	グリッド	遺構	径cm	厚cm	重g	備考
142	kb03M001	銭貨	唐國通寶	銅	C7	AZ118	旧大野庄用水	2.45	0.15	3.8	南唐銭、初鋳959年、篆書体
143	kb03M005	銭貨	元祐通寶	銅	C7	AX116	旧大野庄用水	2.35	0.1	2.3	北宋銭、初鋳1086年、篆書体
144	kb03M006	銭貨	聖宋元寶	銅	C7	AX116	旧大野庄用水	2.45	0.1	4.1	北宋銭、初鋳1101年、篆書体
145	kb03M007	銭貨	淳化元寶	銅	C7	AX116	旧大野庄用水	2.45	0.1	2.5	北宋銭、初鋳990年、真書体
146	kb03M014	銭貨	天禧通寶	銅	C7	BA119	旧大野庄用水	2.55	0.1	3.9	北宋銭、初鋳1017年
147	kb03M016	銭貨	元祐通寶	銅	C7	AX116	旧大野庄用水	2.35	0.2	2.7	北宋銭、初鋳1086年、行書体
148	kb03M019	銭貨	元豊通寶？	銅	C7	AX116	旧大野庄用水	2.5	0.15	3.9	銭名が正しければ北宋銭、初鋳1078年
149	kb03M010	銭貨	洪武通寶	銅	C7	AZ118	旧大野庄用水	2.2	0.15	2.2	明銭、初鋳1368年
150	kb03M008	金具		銅＊	C7	AX116	旧大野庄用水	2.5	0.55・0.3	2	
151	kb03M013	銭貨	寛永通寶	銅	C7	BA119	旧大野庄用水	2.45	0.1	2.8	
152	kb03M017	銭貨	寛永通寶	銅	C7	AZ118	旧大野庄用水	2.3	0.1	1.4	
153	kb03M015	銭貨	寛永通寶	銅	C7	BA119	旧大野庄用水	2.25	0.1	2	
154	kb03M018	銭貨	寛永通寶	銅	C7	BA119	旧大野庄用水	2.5	0.1	2.9	古寛永、1636～1659年鋳造
155	kb03M012	銭貨	寛永通寶	銅	C7	AX118	SD802	2.3	0.1	1.4	
156	kb03M003	銭貨	寛永通寶	銅	C7	BA120	SX811	2.3	0.1	1.9	
157	kb03M004	銭貨	寛永通寶	銅	C7	AV115	肥溜	2.2	0.1	1.8	
158	kb03M011	銭貨	寛永通寶	銅	C1		採集	2.3	0.1	2	
159	kb03M002	銭貨	寛永通寶	真鍮＊	C7	AW118	SD801	2.8	0.1	5.5	四文銭、文政ないし安政年間鋳造
160	kb03M009	銭貨	文久永寶	銅	C7	AU117	遺構検出時	2.6	0.2	2.9	四文銭、1863～1865年鋳造、真書体

＊は当センターで実施した蛍光X線成分分析の結果による

第6表　中世以降の木製品観察表

番号	整理番号	地区	グリッド	遺構1	遺構2	器種	長cm	幅cm	厚cm	樹種	備考
161	kb03W052	C7	AZ118	旧大野庄用水		?	13.5	2.3	2.3	アスナロ	4面すべてに墨書、文字判読困難
162	kb03W031	C7	AZ118	旧大野庄用水		?	－	－	－	エゴノキ属	口径6.0×器高5.4、孔径0.7、ロクロ目顕著、歪みあり
163	kb03W054	C7	BA119	旧大野庄用水	粗砂	漆器	9.65	3.4	0.6	樹皮	内外面ともに赤色漆で文様
164	kb03W051	C7	AZ118	旧大野庄用水		?	16.95	1.25	1.3	サワラ	穿孔4ヶ所、赤色・黒色漆付着

第４章　まとめ

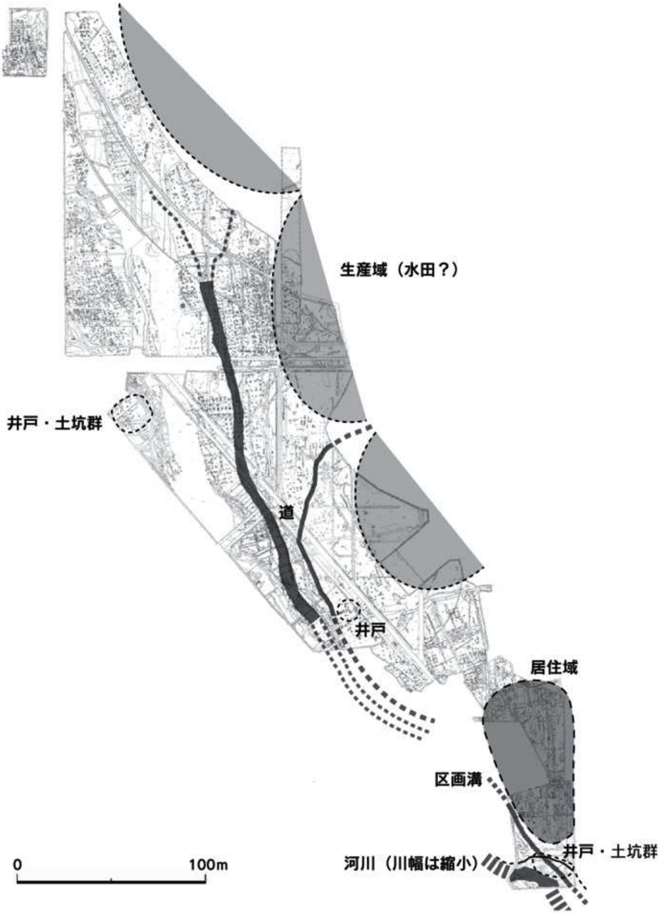
第１節　古墳時代以前

古墳時代以前の時期で特筆すべきは、遺構・遺物が質・量ともに卓越する古墳前期であろう。南側のD地区では玉生産を行っていた居住域を確認し、北側のB・C地区では古代の遺構に破壊されながらも井戸跡、土坑、延長100m以上も伸びる溝群等の遺構を検出している。詳細な時期については、出土した土器により古墳初、前期前半、前期後半に区分した。古墳初は主に在来系土器と東海・近江系土器で組成され、布留系甕を含まない段階で、金沢市寺中B遺跡等を指標とする。前期前半は布留系甕や畿内系高杯、小型精製器種が出現し、定型化する段階で、金沢市田中A遺跡SK12等を指標とする。前期後半は土器全体が粗製化を始める段階で、金沢市沖町遺跡SD03等を指標とする。従前の土器編年観と比較すると、古墳初は弥生末とされていた段階の一部を含み、前期前半は後半とされていた段階の一部を含み、前期後半はより限定されたものとなるが、主要器種の確実な出現と形態変化を指標とすれば、このような区分も可能であることを補足しておきたい。

居住域（第31図）はD３区のほぼ全域とD１区の北半に相当する。規模としては南北80m・東西30m程度の範囲に分散するが、事業地外のため未調査である西側にさらに広がることが予想される。建物跡は５棟の竪穴系建物と10棟の掘立柱建物が検出されており、遺構の重なりや出土土器からほぼ古墳時代前期を通して営まれたものと判断したい。建物跡の時期は、古墳初のSB1102から前期前半のSI1104への推移が確認されている。また、前期前半のSX1116に先行するSB1103は古墳初となる蓋然性が高い。SB1107は柱穴からの出土土器で古墳初と判明している。この他の建物跡については出土遺物が乏しく、また、主軸方位の規則性も見られないため、詳細な時期は不明である。本来ならば竪穴系建物跡に多くの遺物が残るはずであるが、本遺跡では後世の削平が著しく、柱穴しか遺存しないものが主体であった。ほとんど唯一の例外であるSI1104では管玉未成品が一定量出土しており、確実に玉生産を行っていた建物となる。この他の遺構では、居住域内に位置する前期前半の井戸跡SK1116は、同時期で近接するSI1104をはじめとする建物群に伴う井戸と推定したい。

居住域の南側は延長50m以上が伸びているSD1101を境として遺構密度が低下しており、SD1101は区画溝と推定できる。調査区南端のD１区南半ではおそらく弥生時代以前から河川跡NR1101が存在しており、地形的にも遺構分布の南限となる。NR1101が埋没し縮小した段階には、井戸跡SK1104を最古とする古墳時代前期の井戸・土坑群がその旧肩部に掘削されている。居住域の北側（第28～30図）はC７区から概ね北方向に伸びる溝群がB地区まで確認できる。SD115・116他は150m以上の距離をほぼ等間隔で並走しており、古墳時代前期の土器が出土している。SD519他はこれらと重複せず別方向を向くことから、同時期と推定したい。こうした溝群の周囲では遺構が希薄であり、古代の遺構が錯綜することもあって建物の抽出が難しい。B地区ではSD３・12やSD73等、その可能性を残す半環状の溝も存在するが、時期も明確でないことから、居住域とはいえない。C地区でも同様であるが、C７区では井戸跡SX810a、C１区では井戸跡SK522や土坑SK523等の井戸・土坑群が検出されており、後者は複数時期を通して遺構が存在する。

以上述べてきた古墳前期の主要遺構を時期別に整列させると第７表のようになる。未調査や時期・性格不明など流動的な要素も多いが、推測を交えながら全体の遺構配置について考えてみたい。居住域については、調査区全体に占める面積は狭いものであり、むしろ居住域外を広い面積で調査したこ

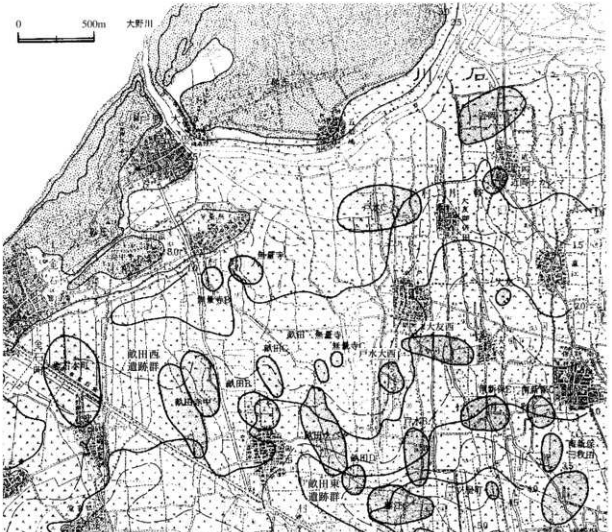


第54図　古墳時代前期の歓田東遺跡群概念図（S＝1／2,000）

とになる。居住域の周辺には井戸・土坑群が複数存在しており、北側ではそれらを結ぶように溝群が伸びている。井戸・土坑はともに地下水位が高い地点で深く掘削しており、その性格は水に関係することは疑いない。溝群は形態や堆積の状況から、水路とは異なる性格のものである。平行する部分や底面に小穴をもつ部分については、富山県下老子笹川遺跡B５地区SF26（弥生後期）等や大阪府久宝寺遺跡竜華地区第４－２面（古墳初）の例を参考にして道路と推定する。残念ながら削平を受けており、路面が存在したかどうかは不明である。溝群は居住域から基本的に低地側へ伸びており、1996年度調査区やC８区では黒色土の湿地堆積を確認している。おそらくは、北・東側に展開した水田域へ向かう道であろう。全体としては、大阪府池島・福万寺遺跡（古墳中後期）のように水田域と居住域の間に井戸・土坑群や、未確認ながら畑地が展開する景観を想定しておきたい（第54図）。

第７表　主要遺構の時期

時期＼地点	南側井戸・土坑群	居住域の遺構	北側井戸・土坑群
古墳初	SK1102　SK1104	SB1102　SB1103　SB1107　SK1110	SK523
古墳前期前半	SK1101	SI1104　SK1116　SX1116　SX1121　SD1165・1167（SX1114）	
古墳前期後半		P11115	SK522



第55図　旧地形と周辺の遺跡（S＝1/25,000）　　県教委・㈶県埋文センター 2004　223・224頁から

遺跡の性格は集落となるが、生産域など居住域外の空間が加わっており、現状では総体的な構造を比較できる遺跡は県内に存在しない。今後、同様な視点での復元・検討が必要であろう。また、地域の中で玉生産を行っていることは重要である。古墳前期の玉生産遺跡は弥生後期に比べて急減しており、本遺跡の周辺では、南東200m先の藤江C遺跡、同800m先の藤江B遺跡でしか確実な痕跡が見られない。全体的に時期を特定できる出土状況に乏しい中で、管玉製作を前期前半段階に比定できる本遺跡は貴重な存在である。さらに、旧地形復元の成果（第55図）によれば、両遺跡は本遺跡と同一微高地上に立地しており、地縁的な関係も深い。以上から、この微高地とそれを占地する集団が地域の玉生産の中心を担っていた可能性が導かれよう。各遺跡の詳細な関係や、管玉と石製腕飾の器種差などについては本書では論及する紙面がない。今後の課題とし、研究の深化に期待したい。

第２節　中世以降

中世以降の時期は前章でまとめており、ここでは第48図で行った旧地籍地図との照合作業について補足するにとどめる。旧地籍図は金沢市普正寺在住で永く地域の発掘調査に携わってこられた福田弘光氏が複写・接合して保管していたものを使用させていただいた。縮尺は不明であるが、金石街道と畝田の集落や神社との位置関係から１/3,000と判断できる。ただし、正確な測量図ではないことから、地域の広い範囲に照合するとずれが大きくなった。第48図では南東隅を基準としているので、そこから離れるにつれて誤差が大きくなっており、注意が必要である。

今回、この作業を行うことによって、遺跡の成立から現代に至るまで地域の変遷を垣間見ることができ、旧地籍図の重要さを実感した。福田弘光氏には文中であるが敬意を表し、深く感謝したい。

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター　1990　『廻間遺跡』
石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団　1976　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書II　塚崎遺跡』
石川県教育委員会　1992　『石川県遺跡地図』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2002　『金沢市藤江B遺跡Ⅳ』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2002　『金沢市藤江C遺跡Ⅳ・Ⅴ』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2002　『金沢市藤江C遺跡Ⅶ』
石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　2004　『金沢市畝田B遺跡　畝田C遺跡　無量寺C遺跡』
石川県金沢市・金沢市教育委員会　1992　『金沢市田中A遺跡』
石川県金沢市教育委員会・高山物産株式会社　1992　『金沢市沖町遺跡』
石川県金沢市教育委員会・石川県金沢西部開発事務所　1994　『金沢市藤江B遺跡（第２次）』
石川県小松市教育委員会　2004　『八里向山遺跡群』
石川県立埋蔵文化財センター　1991　『金沢市寺中B遺跡』
寒川　旭　1997　『揺れる大地　日本列島の地震史』同朋舎出版
㈶石川県埋蔵文化財センター　2001　『金沢市藤江C遺跡Ⅰ』
㈶富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所　1998　『埋蔵文化財調査概要－平成９年度－』
㈶大阪府文化財センター　2003　『八尾市亀井地内所在　久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅴ』
㈶大阪府文化財センター　2005　『カルチュアはっとり№６　古墳時代の池島・福万寺遺跡－初めてのすみごこち－』

写 真 図 版

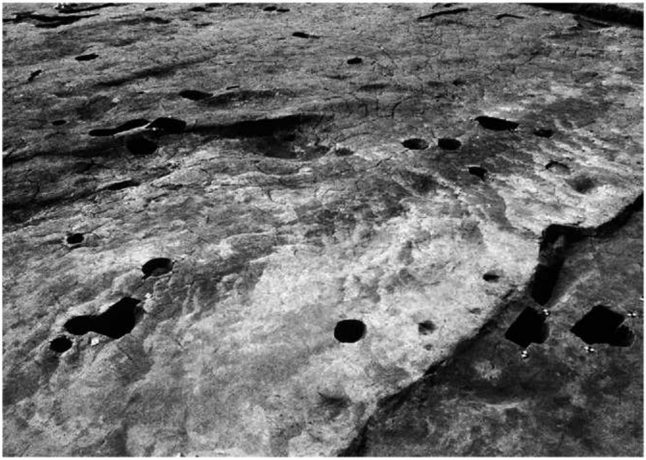
D1区全景（垂直、右が北）

D1区全景（北から）

図版２　Ｄ３区全景

Ｄ３区全景（垂直、右が北）

Ｄ３区全景（南東から）



SI1101全景（南東から）

SI1101主柱穴P11010

SI1101主柱穴P11014

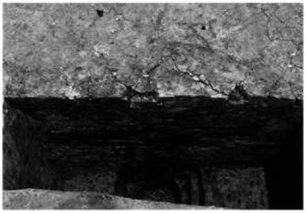
SI1101主柱穴P11034

SI1101主柱穴P11038

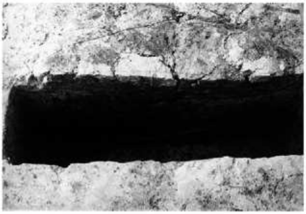
SI1102全景（南東から）

SI1102主柱穴P11018

SI1102主柱穴P11029



SI1102主柱穴P11031



SI1102主柱穴P11039

SI1103全景（垂直、右が北）

SI1103主柱穴P11019

SI1103主柱穴P11030

SI1103主柱穴P11032

SI1103主柱穴P11053

SI1104全景（南東から）

SI1104周溝SD1180土層

SI1104周溝SD1177他土層

SI1104主柱穴P11157

SI1104主柱穴P11160

SI1105全景（南西から）

SI1105主柱穴P11070

SI1105主柱穴P11071

SI1105主柱穴P11072

SI1105主柱穴P11073

SB1101全景（北西から）

SB1103全景（南東から）

SB1102全景（南東から）

SB1102主柱穴P11144

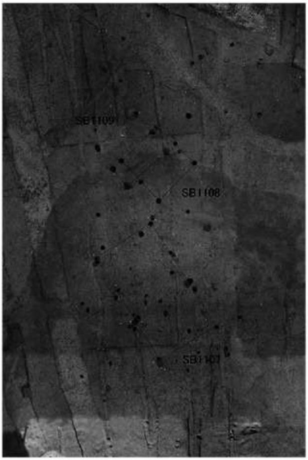
SB1102周溝土層①

SB1102周溝遺物出土状況

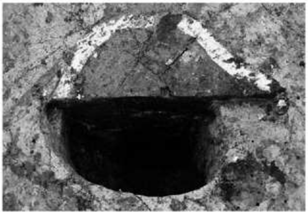
SB1102周溝土層⑦

SB1106全景（西から）

SB1104～1106全景（垂直、上が北）



SB1107～1109全景（垂直、上が北）



SB1105主柱穴P11109

SB1106主柱穴P11091

SB1108主柱穴P11085

SB1110主柱穴P11054

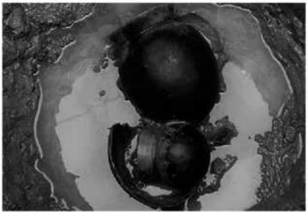
SB1107全景（南東から）

図版12　その他掘立柱建物跡３

SB1108・1109（南東から）

SB1110全景（垂直、右が北）

SK522遺物出土状況（層４）



SK522遺物出土状況（底近く）

SX810a全景（南西から）

SK1116全景（西から）

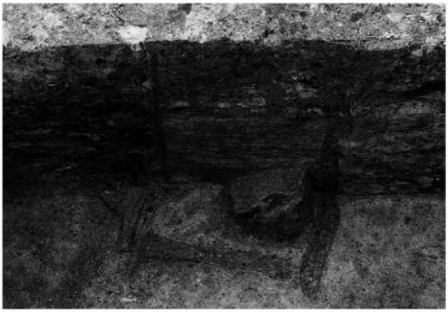
SK1116土層

SK1116遺物出土状況（層１上）

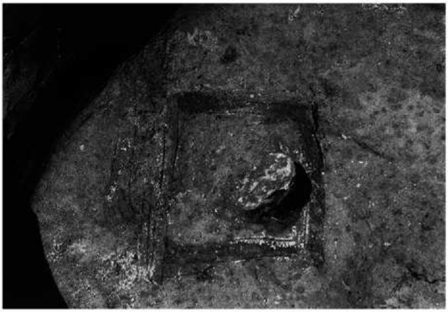
SK1116遺物出土状況（層１上）

SK1116遺物出土状況（層１下）

SK1104土層（北東から）



SK1104井戸側痕跡土層断面



SK1104井戸側痕跡

P996遺物出土状況

SK48遺物出土状況

SK48土層

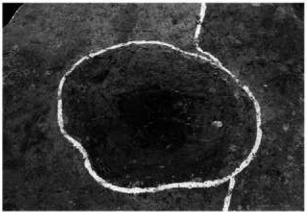
SK416遺物出土状況

SK523遺物出土状況

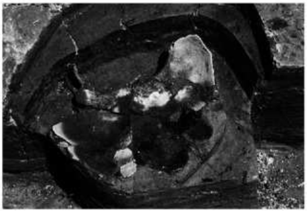
SK523土層

SK524土層

SK525土層


SK1101検出状況

SK1101土層


SK1101遺物出土状況

SK1101全景（西から）

SK1102検出状況

SK1102土層

SK1102全景（西から）

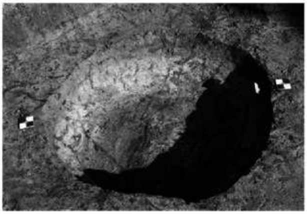
SK1107全景（南から）

SK1107遺物出土状況（上位）

SK1107遺物出土状況（下位）

SK1108土層

SK1109土層



SK1109全景（南から）

SK1110土層

SK1110全景（北西から）

SK1114土層

SD1101全景（D１区、北西から）

SD1101全景（D１区、南東から）

SD1101全景（D３区、南東から）

SD1101遺物出土状況

SD1101土層⑥

SD1101土層③

SD1101土層②

SD1101土層①

SD115・116全景（北西から）

SD805・806全景（南東から）

SD805・806全景（北西から）

SD812・813全景（北から）

SD518・519・529全景（北東から）

SD12遺物出土状況

SD73全景（南から）

SD1165（SX1114）遺物出土状況

SD1167遺物出土状況

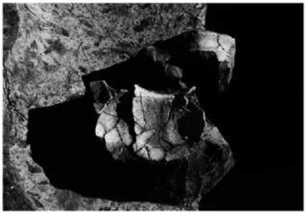
P11115上位遺物出土状況

P11115下位遺物出土状況

SX812全景（北から）

SX1113全景（南から）

SX1114土層

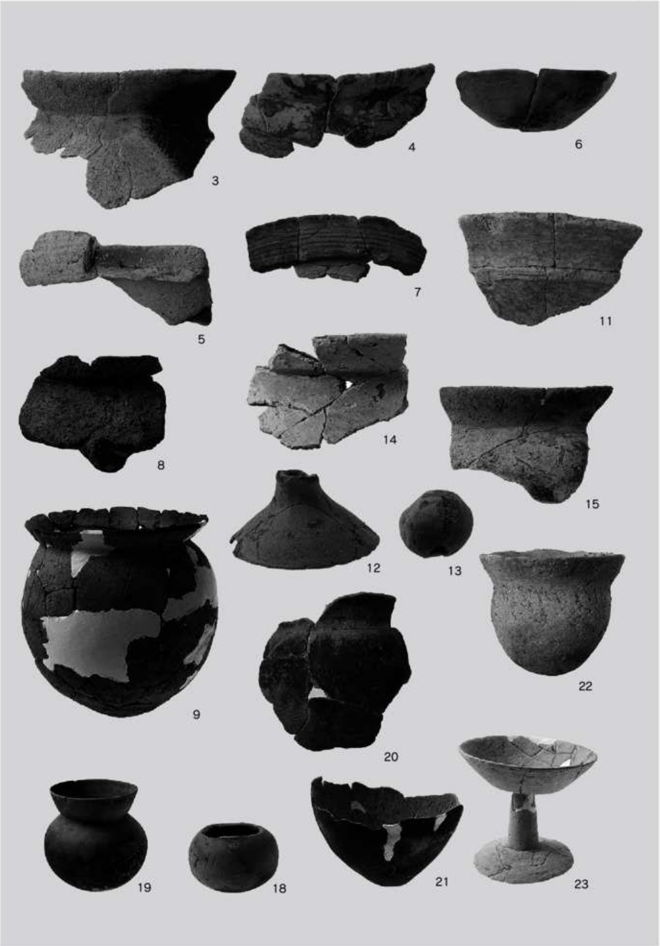

SX1116遺物出土状況

SX1121遺物出土状況

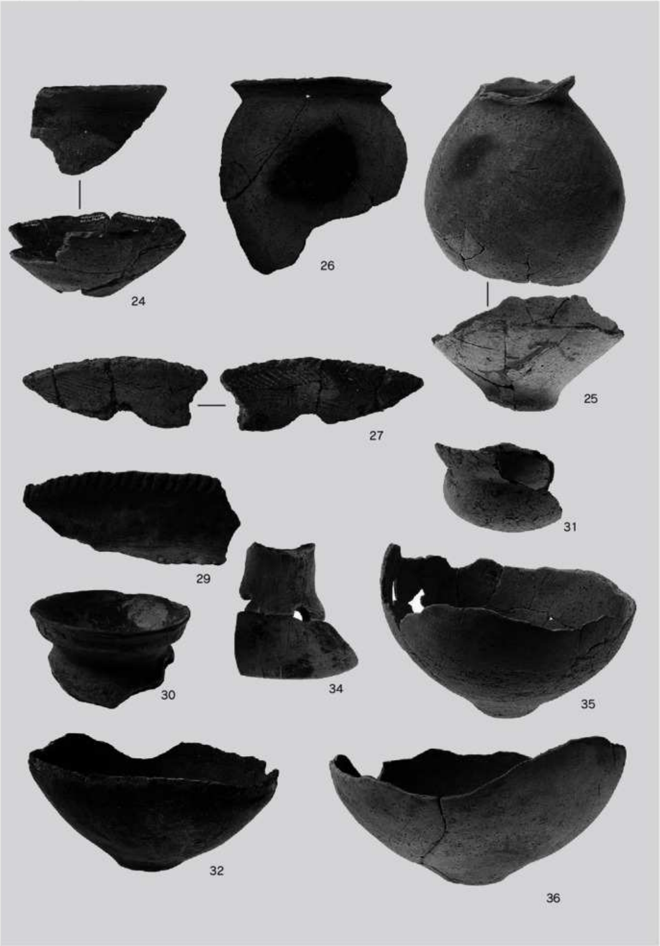
地震痕跡土層

NR1101全景（東から）

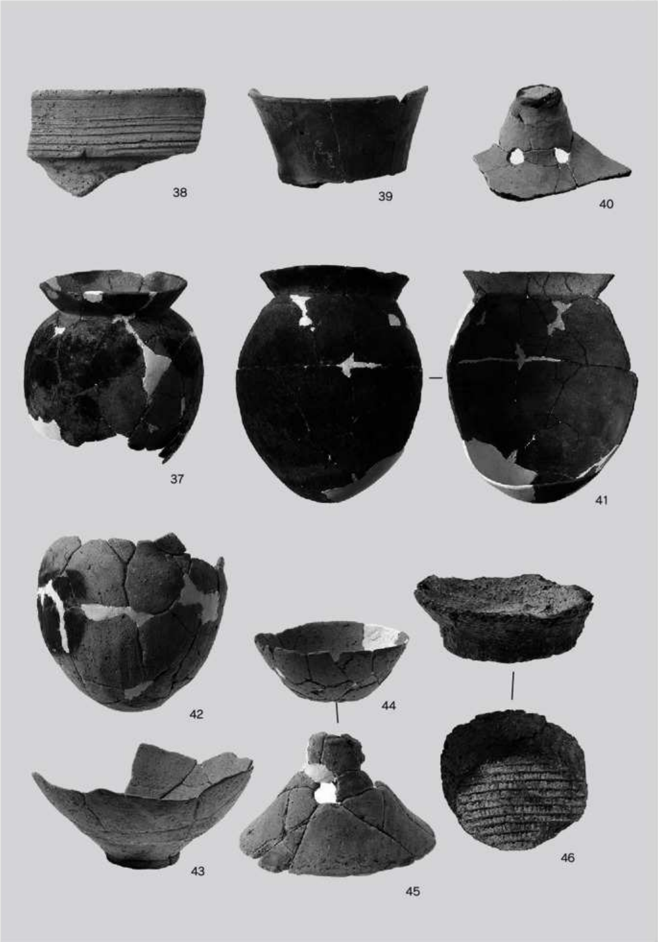
大野庄用水他全景（C７区、南東から）



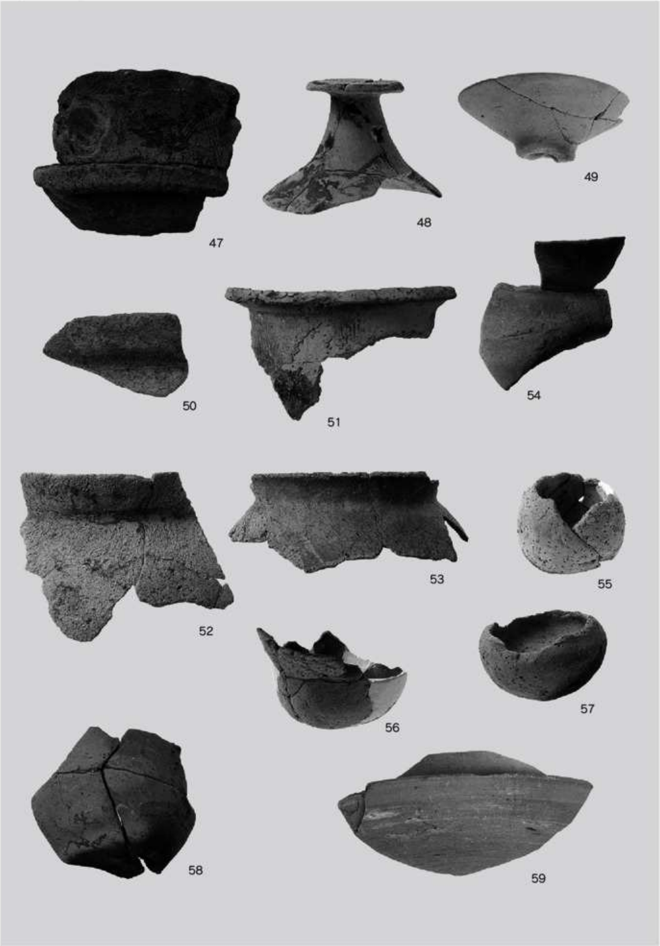
古墳時代以前の土器・土製品1



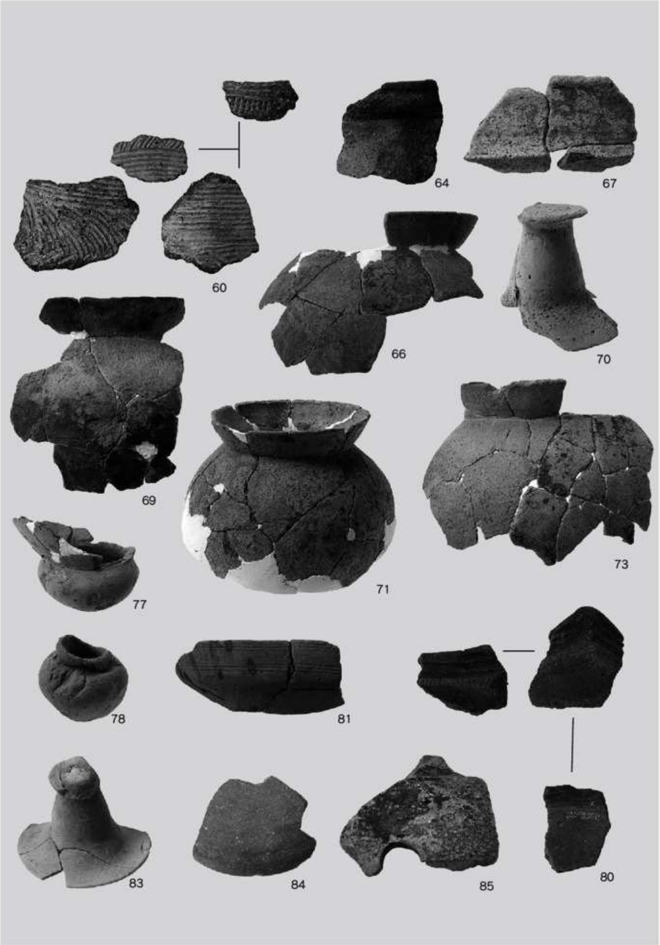
古墳時代以前の土器・土製品 2



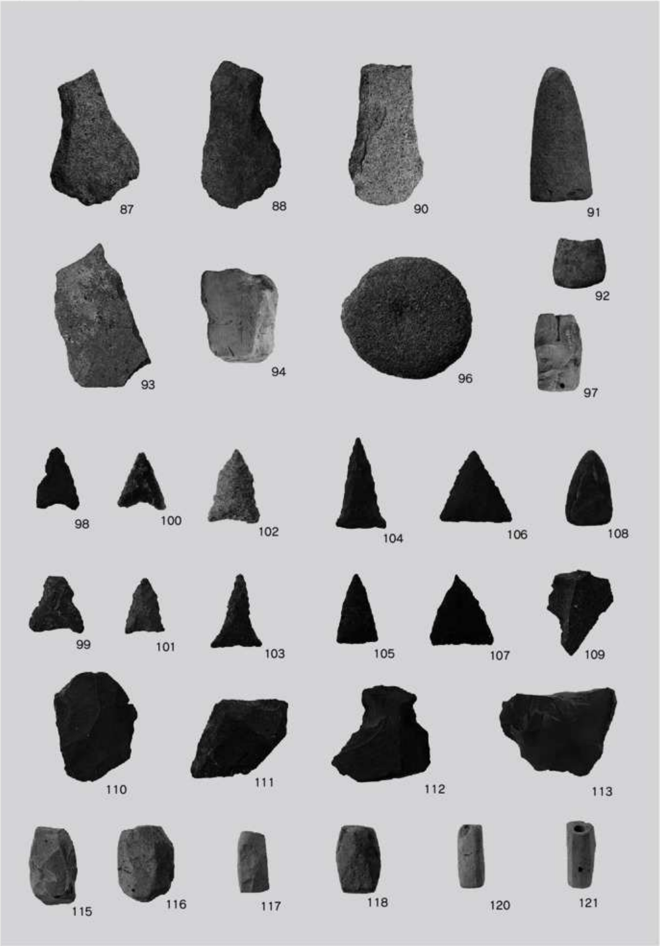
古墳時代以前の土器・土製品 3



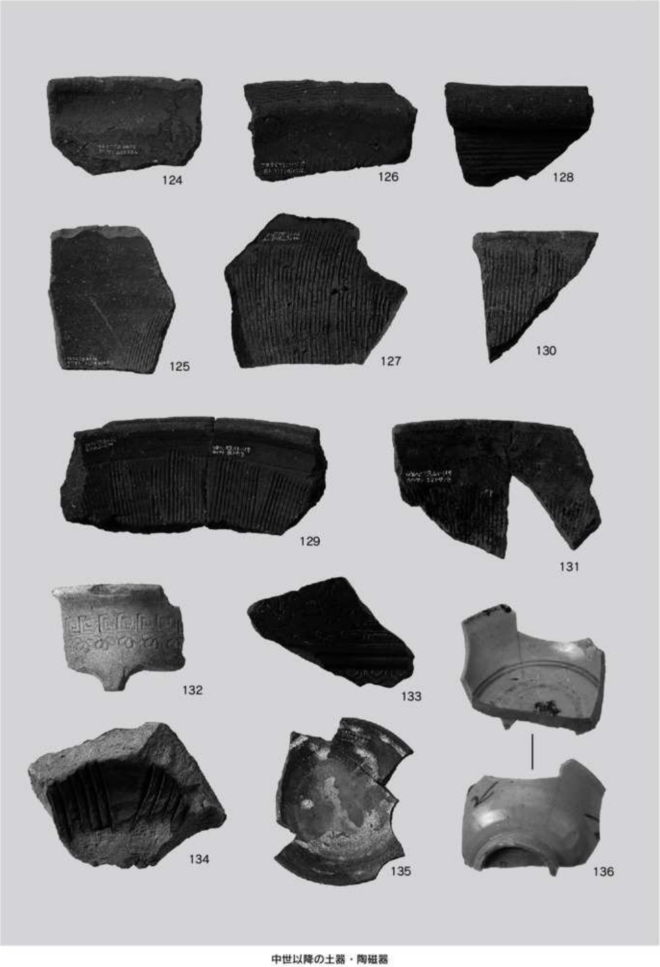
古墳時代以前の土器・土製品 4



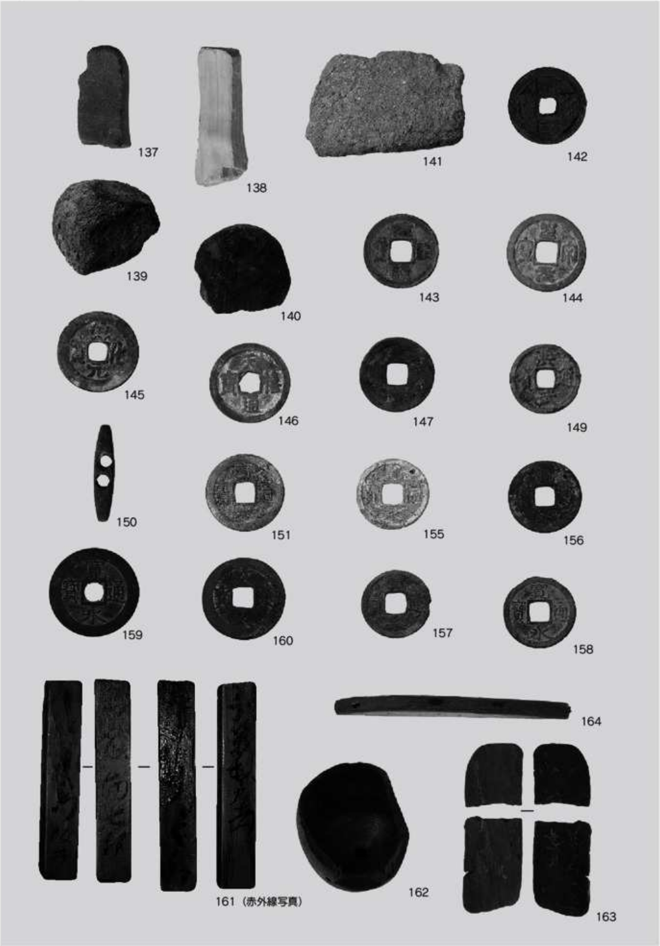
古墳時代以前の土器・土製品 5



古墳時代以前の石器・石製品6



中世以降の土器・陶磁器



中世以降の石製品・金属製品・木製品

報告書抄録

ふりがな	かなざわしうねだひがしいせきぐん　ご
書名	金沢市畝田東遺跡群Ⅴ
副書名	金沢西部第二土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	7
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	安　英樹
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター
所在地	〒920－1336　石川県金沢市中戸町18番地1　TEL（076）229－4477
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積	調査原因
畝田（うねだ）ナベタ遺跡 畝田（うねだ）D遺跡	石川県金沢市（いしかわけんかなざわし） 畝田東、藤江（ふじえ）北 地内	17201	1267	36度 35分 48秒	136度 36分 58秒	19991124 ～ 20031215	43,406㎡	金沢西部 第二土地 区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
畝田ナベタ遺跡 畝田D遺跡	散布地	縄文時代		縄文土器、石器	
	散布地	弥生時代	土坑	弥生土器、石器	
	集落跡	古墳時代	竪穴系建物跡5棟 掘立柱建物跡10棟 井戸跡4基 土坑 溝	土師器、石製品	管玉を生産している居住域と、その周辺に展開する道路や井戸・土坑群などの遺構を確認し、当時の景観復元を試みた。
	官衙	古代	別冊に所収	別冊に所収	
	集落跡	中近世	用水跡	陶磁器、石製品、金属製品、木製品	水路群の配置は旧地籍図とほぼ一致する。

要約	遺跡の中心時期である古代以外の遺構・遺物を所収した。主な時代は古墳時代前期と中近世である。官衙遺跡の前後史であり、地域を考える上で重要である。

金沢市　畝田東遺跡群Ⅴ

発行日　平成17（2005）年3月31日
発行者　石川県教育委員会
〒920-8575　石川県金沢市鞍月1丁目1番地
電話　076－225－1842（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
電話　076－229－4477
E-mail　mail@ishikawa-maibun.or.jp
印　刷　株式会社　橋本確文堂